

BULLETIN

OF

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

研究紀要

研究紀要

The twelfth issue
2020.3

第12号
2020.3

第十二号

二〇二〇・三

CONTENTS

A Study of Settlement Dynamics of Jomon Period at the Mamigasakigawa Alluvial Fan in the Yamagata Basin	KOBAYASHI Keiichi	3
7th century earthenware excavated from the Murayama area	WATANABE Kazuyuki	43

目次

馬見ヶ崎川扇状地における縄文時代の遺跡動態	小林 圭一	3
村山地域から出土した7世紀の土器	渡辺 和行	43

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

刊行のことば

公益財団法人山形県埋蔵文化財センターは、山形県内における遺跡等の埋蔵文化財の調査研究を行い、県民の文化財に関する理解を深めるとともに、文化財保護と地域開発の調和を図り、もって、県民の文化生活の向上と地域文化の振興に寄与することを目的に、平成5年4月に設立され、今日に至っております。

設立以来、東北横断自動車道、東北中央自動車道等の高速道路をはじめとする道路建設や圃場整備等の開発事業に伴い、緊急発掘調査を数多く実施して参りました。その間、国宝に指定された舟形町西ノ前遺跡の土偶「縄文の女神」をはじめとして、多数の貴重な埋蔵文化財が発見されました。

また、発掘調査のみならず、調査の成果を県民に広く紹介すべく、発掘調査速報会はもとより、考古学講座や出土品の企画展示、遺跡見学・発掘作業体験の受け入れ等に取り組んで参りました。

さらには、埋蔵文化財の調査研究の一層の充実を図るとともに、職員がこれまでに蓄積した学術的な研究成果を発表する場として、設立10周年を機に、平成15年より、『研究紀要』を刊行して参りました。途中休刊した時期もありましたが、この数年は毎年刊行を重ねて参りました。これもひとえに関係各位と皆様方の御支援と御協力の賜と、心より感謝を申し上げます。

職員の日頃の研鑽の成果である『研究紀要』は、考古学研究の資料としてのみならず、埋蔵文化財に対する県民の皆様の理解を一層深めるために欠くことのできない刊行物です。山形県内はもとより、他県の調査成果の比較研究等も盛り込まれており、考古学研究の最前線にある成果といっても過言ではなく、地域文化の振興に大きく寄与しているものと自認しております。

このたび、『研究紀要』第12号を上梓いたしました。本書が、学術研究の資料としてのみならず、埋蔵文化財や地域に対する皆様方の御理解を一層深め、広く活用されることを願っております。

令和2年3月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 菅間 裕晃

研究紀要刊行事業等の御協賛者芳名

（平成29年11月から12月にかけて協賛を募集しておりました
当センター『研究紀要』の刊行事業等に対して御賛同いただいた方々）

法人・団体

株式会社サンライズ機工 様（酒田市）

環清工業株式会社 様（酒田市）

県教育庁文化財・生涯学習課有志一同 様（山形市）

公益財団法人山形県生涯学習文化財団 様（山形市）

中山地区会 様（上山市）

（その他研究紀要への掲載を希望されなかった方 2団体様）

個人（五十音順）

青山 崇 様 阿子島功 様 安彦政信 様 稲村圭一 様 大類 誠 様

小笠原正道 様 奥山 賢 様 小野 忍 様 菅野 滋 様 草苅信博 様

齋藤 稔 様 佐藤鎮雄 様 佐藤庄一 様 角屋由美子 様 竹田純子 様

中蔦 寛 様 廣瀬 涉 様 松田国明 様 向田明夫 様 村山賢司 様

渡邊弘明 様

（その他研究紀要への掲載を希望されなかった方 25名様）

馬見ヶ崎川扇状地における縄文時代の遺跡動態

小林圭一

1 はじめに

県都である山形市は山形盆地の南東部を占め、市街地は奥羽脊梁山脈の蔵王山系を源流とし南東から北西方向に北流する馬見ヶ崎川が形成した扇状地上に展開する。この馬見ヶ崎川扇状地には扇頂部に熊ノ前遺跡、扇端部に山形西高敷地内遺跡が立地するが、両遺跡は行政発掘の黎明期であった1970年代半ばに発掘調査が実施され、早くから縄文時代中期の大規模な集落跡として衆目を集めてきた。しかし同扇状地は現在も形成途上の「現成扇状地」であるため、氾濫の危険にさらされた不安定な状態との先入観から、扇状地内の遺跡の分布調査は十分とは言えず、縄文時代の遺跡の解明が立ち後れていた。

近年市街地開発に伴う発掘調査が、山形城三の丸跡の区域内で実施されるようになり、縄文時代の生活の痕跡が徐々に判明してきている。前記した2遺跡に比べると内容の乏しさは否めないが、三の丸域内から縄文時代の土坑等の遺構が検出され、中期から晩期の土器が出土しており、断続的ではあるが、扇端部に小規模な集落が形成されていた可能性が推定される。河道が比較的安定した時期に、湧水帯付近での生活が繰り返されていたのであろう。

本稿では、馬見ヶ崎川扇状地から出土した縄文土器を集成し、年代的な推移を考察する。併せて山形盆地の縄文時代各期の遺跡動態を示すことで、馬見ヶ崎川扇状地の該期の特性を明確にし、最上川流域の縄文時代研究に資することを企図している。

2 馬見ヶ崎川扇状地の概要

(1) 馬見ヶ崎川扇状地について

山形盆地は最上川の中流域に当たり、山形県のほぼ中央に位置する。南北約40 km、東西約10～20 kmの舟底形の構造盆地で、北接する尾花沢盆地とは河島山丘陵、南接する上山盆地とは蔵王火山の泥流堆積による

狭窄部によって画される。山形県内を貫流する最上川は、盆地内の北西部を蛇行帯を形成しながら北流しており、盆地の東側には扇状地が発達し、北から乱川・立谷川・馬見ヶ崎川の各扇状地が並列する。北のものほど扇体の規模が大きく、開析され段丘化が進んでおり、西側の寒河江川扇状地等を含めると、扇状地が盆地の半分近い面積を占めている。

市街地がのる扇状地を形成した馬見ヶ崎川は、蔵王山系を源流とする流路延長24 km程度の河川で、山形市の北縁で最上川支流の須川に合流する。馬見ヶ崎川の上流域は多くの沢水を集めて流下し、河成段丘を発達させるが、内山川が合流する妙見寺付近から扇状地性の谷底平野となり、盃山と千歳山を結んだラインから西方に至って扇状地が広く展開する。現在の流路は17世紀に人為的に改修されたもので、それ以前は流路が固定しない荒れ川であった。そのため扇状地面上での溢流が繰り返され、扇状地面の放射状の谷線(凹所)や前縁部の自然堤防に旧河道の名残を留めており、流路改修後も市街地は度々水害に見舞われた歴史を持つ^(註1)。

馬見ヶ崎川扇状地は、扇頂部から扇中央部にかけて透水性の高い礫層が堆積し、河川水や降水は速やかに浸透して伏流水となっており、扇端部に湧水帯が南北に走っている。1本の河川だけで形成された「単純扇状地」で、扇状地面はほとんど開析されず、等高線は明瞭な同心円状を示している。それに対し北側にある乱川扇状地と立谷川扇状地は複数の河川が形成した複合扇状地で、段丘化して2面以上の地形面に区分される(図10)。馬見ヶ崎川扇状地の扇体は半径約6 kmと小さく、扇頂部の海拔は230 m(山形市妙見寺付近)、扇端部の海拔は120～125 m(山形市城西町付近)にあり、比高差は110 mを測る。平均勾配は約18/1000となっており、乱川扇状地の14/1000(半径約11 km、比高差約155 m)、立谷川扇状地の15/1000(半径約7 km、比高差約105 m)に比べ急勾配となる。その要因は山形盆地南部の沈降水量

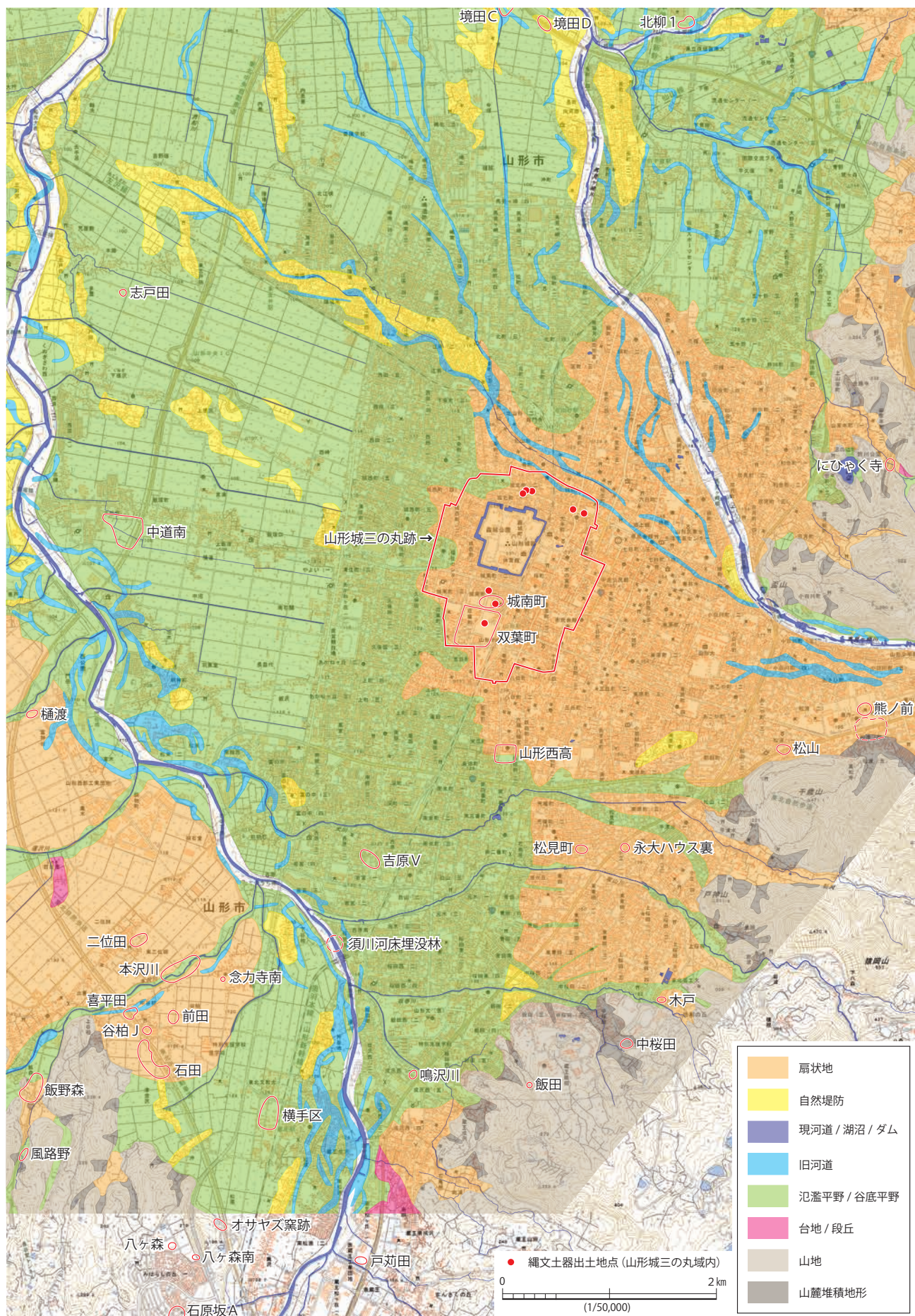


図1 山形市近郊の地形分類と縄文時代の遺跡分布

が大きく、その運動が現在に至るまで継続していること、また後二者の扇状地に比べ硬質の花崗岩・安山岩が主で、粘土分の少ない堆積物となっていることが指摘されている（山形市史編さん委員会編 1973：25－26頁）。

馬見ヶ崎川扇状地の扇側は山麓線に接するが、特に北側は出入りの多い入江状の山麓線と接するため、小さな支谷の出口が閉塞され、湿地となる例が多い。また扇端部は不明瞭で、前縁部に移行しており、前縁部は細長く発達した自然堤防と後背湿地で構成される。自然堤防は比高が30～70cmと比較的低く、周縁の低地との判別が困難な場所が多くあり、盆地底に当たる須川合流点（山形市成安）付近の完新世堆積層の層厚は10m以上に達している。なお山形盆地南部を北流する須川は、扇状地によって盆地の西側に押しやられており、盆地西縁を区画する白鷹丘陵に近接して流下する。

（2）山形市近郊の縄文遺跡

山形市の市街地と近郊の縄文遺跡を図1にプロットしたが、総数で34遺跡を数える。凡例で隠れた龍山川沿いにも4遺跡が位置するが、図示できなかったため総数には含めていない。

図郭内には明確な旧石器時代の遺跡は存在しない^(註2)。谷柏^{やがしわ}地区の須川河床には、氷河期の針葉樹の埋没林（トウヒ・カラマツ等の化石樹木）が認められている。土石流等で急激に埋め立てられ枯死した大木の樹根が、土砂の浸食で露呈したもので、AT降下以降の年代（約27,000年前）が推定されている。人類との直接的な関わりは見られず、往時の寒冷な環境を示す地質学上の標本資料でしかないが、同様の氷期の埋没林は山形市黒沢地区と上山市宮脇地区の須川河床、また天童市高擲^{たかだま}地区の立谷川河床でも確認されており、旧石器時代の遺跡が希薄な村山地方南部に限られる（図11）。

山形市内で発掘調査された縄文時代最古の遺跡は、にひやく寺遺跡（山形県教委編 1985）である。馬見ヶ崎川扇状地北側の入江状の山麓線に位置し、早期の沈線文系土器や貝殻沈線文系土器、条痕文系土器が出土しており、立地上は馬見ヶ崎川扇状地の形成に直接関連しないが、長期にわたり反復的・周期的に利用された遺跡となっている。また久保手泥流丘陵に立地した八ヶ森遺跡が、早・前期の遺跡（早期末葉～前期初頭・前期末葉）として登録されている（山形県教委編 2002）。

図郭内で時期が特定された縄文遺跡の多くが、中期に該当する。熊ノ前遺跡と山形西高敷地内遺跡以外にも、扇側に近い松山遺跡、龍山川の小扇状地の松見町遺跡（大木8a・8b式期）・永大ハウス裏遺跡、蔵王山西北麓の木戸遺跡・中桜田遺跡・飯田遺跡^(註3)は中期に位置づけられている。しかし発掘調査は実施されておらず、詳細な時期は特定できない。須川右岸の犬川と龍山川に挟まれた吉原^{よしはら}地区では、吉原V遺跡が1997年に発掘調査され、大木8a・8b式の土器片を中心に16箱程度が出土している（山形市教委編 2001）。同地区の最高所に立地するが、調査区内では遺構が検出されず、居住域は調査区より高い地点にあったと推定されている。

本沢川^{もとさわがわ}扇状地扇端部の谷柏地区には、中期末葉～後期中葉にかけての遺跡が集中するが、その中心になるのが前田遺跡（別称谷柏K遺跡）である。1954年に山形大学による発掘調査が実施され、後期前葉～中葉の膨大な量の遺物が出土し拠点集落と推定されており、周囲にはほぼ同時期の谷柏J遺跡・喜平田^{きへいだ}遺跡・石田遺跡・本沢川遺跡・二位田遺跡等が密集する。

図郭北端の馬見ヶ崎川と高瀬川が形成した自然堤防上には、晩期の遺跡が点在する。山形盆地では、晩期後半に沖積低地での遺跡の形成が活発化しており、境田C遺跡では大洞C2式の壺形土器、境田D遺跡で大洞A1式の浅鉢形土器等、北柳^{きたやなぎ}1遺跡では大洞A2～A'式期の住居跡や廃棄ブロックが検出され、弥生時代に先駆けて遺跡の低地への進出が顕在化する。なお図郭外の境田C'遺跡では、大洞BC式の土器片が出土している。

馬見ヶ崎川扇状地前縁部の沖積低地には、中道南^{なかみちみなみ}遺跡と志戸田^{しとだ}遺跡が位置する。中道南遺跡は縄文時代の包蔵地で、1998年の試掘調査で晩期の土器片が数点出土した。しかし河川跡以外の遺構が検出されず、出土品も少量であったため、発掘調査の対象から除外された（山形県埋文セン編 1999）。志戸田遺跡も同じ包蔵地で、石斧が採集されたに過ぎず、詳細は定かでない。

図1の図郭外となるが、熊ノ前遺跡より馬見ヶ崎川を遡った上流には、縄文時代の遺跡が24遺跡周知されている（図10）。内山川沿いに5遺跡、馬見ヶ崎川沿いに3遺跡、滑川沿いに16遺跡で、山間河谷の段丘上に立地した遺跡が多く、内山川では千葉屋敷遺跡、馬見ヶ崎川では向山^{まっどめ}遺跡と松留^{にいやま}遺跡、滑川では新山A遺跡が代

表的な遺跡である。早期は新山 A・^{せきざわ}関沢 B・^{おおやざわ}大谷沢 A 遺跡、前期は新山 A 遺跡と少ないが、中期になると松留遺跡を含む 6 遺跡に増加し、後・晩期は千葉屋敷遺跡や向山遺跡、松留遺跡が中核的な遺跡となる。また滑川沿いの遺跡は脊梁山脈の鞍部である笹谷峠 (標高 906 m) に通じており、宮城県名取川水系への経路になっていたと考えられる。

3 馬見ヶ崎川扇状地出土の縄文土器

馬見ヶ崎川扇状地に位置する縄文時代の遺跡は、熊ノ前遺跡と山形西高敷地内遺跡を除くと僅かではない。近年山形城三の丸跡の発掘調査が実施され、扇端部における縄文時代中期～晩期の生活の痕跡が明らかになってきており、中期初頭 (前期末葉大木 6 式の可能性もある) が初現となる。

(1) 縄文時代中期

縄文時代中期では、前記したように熊ノ前遺跡と山形西高敷地内遺跡が大規模集落跡となっている。両遺跡は 3.4 km の位置関係にあり、扇頂部に位置する前者は大木 8a 式期に集落形成が始まり、大木 10 (中) 式期で終焉を迎える。扇端部の後者は大木 10 (古) ～同 10 (新) 式期に集落が形成されており、大木 10 (古) ～同 10 (中) 式期が並存の関係にあったことになる。それ以前の中期初頭大木 7a 式期の痕跡は、扇端部の山形城三の丸域内で僅かに散見されるのみで、中期前葉大木 7b 式期の山形盆地南部の主体は本沢川扇状地扇頂部の^{どどやま}百々山遺跡にあったと考えられる。

A. 熊ノ前遺跡

熊ノ前遺跡 (遺跡番号 201-082) は、1973 年に山形県庁周辺の土地区画整理と道路の工事で発見された新規の遺跡である。遺物の散布が東西 280 m、南北 200 m の範囲に見られ、遺跡の面積は約 40,000 m² と推定されている^(註4)。1974～1978 年に山形市教育委員会と山形県教育委員会により 4 次にわたる発掘調査が実施され、大木 8a～10(中)式期の住居跡が 65 棟 (検出 43 棟、炉跡のみ 15 基、確認 7 棟)、埋設土器 11 基、土坑 30 基以上が検出されている (佐々木ほか 1979、山形市教委編 1975・1978)。しかし調査区域の提示が明確でなく、各次のグリッドの整合性にも問題があり、全体の集落構成を復元することはできない^(註5)。遺跡は扇頂部南

寄りの西方に張り出した微高地端部の 200～210 m の等高線の範囲に位置し、南側は千歳山から流出した土砂による山麓堆積地形、北側は馬見ヶ崎川の旧河道に挟まれており、遺跡範囲の西側が発掘調査されている (図 5)。

図 6 は山形県教育委員会が調査した第 2・4 次調査区 (1975・1978 年調査) の集落構成図で、遺跡範囲の北西端に相当する。調査区の北側や西側には遺物の散布が認められず、地形の傾斜も強まり、住居の存在する可能性は低いと指摘されている。ほとんどの遺構は黄褐色粘質微砂土 (Ⅲ層) を掘り込んで構築され、住居跡の重複が著しく、北西―南東方向にかけて帯状の分布が見られるが、調査区北東側は暗黒褐色土 (一部グライ化層) になっていたため、炉跡のみが検出され、一見遺構が希薄な印象を受ける。

集落は大木 8a 式期に形成が始まり、大木 10 (中) 式期まで継続する。その期間を 4 期に分けた内訳は、大木 8a・8b 式期 12 棟、大木 9 (古・新) 式期 5 棟、大木 10 (古) 式 5 棟、大木 10 (中) 式期 3 棟で、その他に 2 棟 (ST132・134) が大木 9～10 式期、2 棟 (ST101・131) が大木 10 式期に比定される。住居棟数では大木 8a・8b 式期が最多となり、広範囲に分布する。しかし大木 8a 式と同 8b 式の区分は明確でなく、前者の住居跡は ST108・110・112、後者は ST122・123・124? を指摘するにとどまり、特に報告された後者の土器は少量となっている (図 2-12～18)。また大木 10 式期は複式炉のみが検出された例もあり、同式期の住居棟数は更に増えることが想定される。

同調査区の北側では、埋設土器 9 基 (SK 3～12) が 3 m の範囲で集中して検出されている (図 6 左下図)。重複した 7 基の埋設土器は径 50～65 cm、深さ 40～60 cm の円形・楕円形の土坑の集合体で、底部を欠いた深鉢形土器を倒置していた。土器棺として利用されたと考えられ、底部に扁平な石で蓋をした例 (SK 6) も認められた。時期的に近接し、大木 9 (古) 式 (図 2-21・22) に位置づけられるが、若干離れた SK11・12 は深鉢形土器が正位に埋設されていた。大木 9 (古) 式期には、調査区北側に墓域が形成されていたことになるが、同式期の確実な住居跡は、土器を埋設しない複式炉の特徴から ST129 を指摘するにとどまり、該期の主体的な居住域は調査区域外にあったと考えられる。なお大

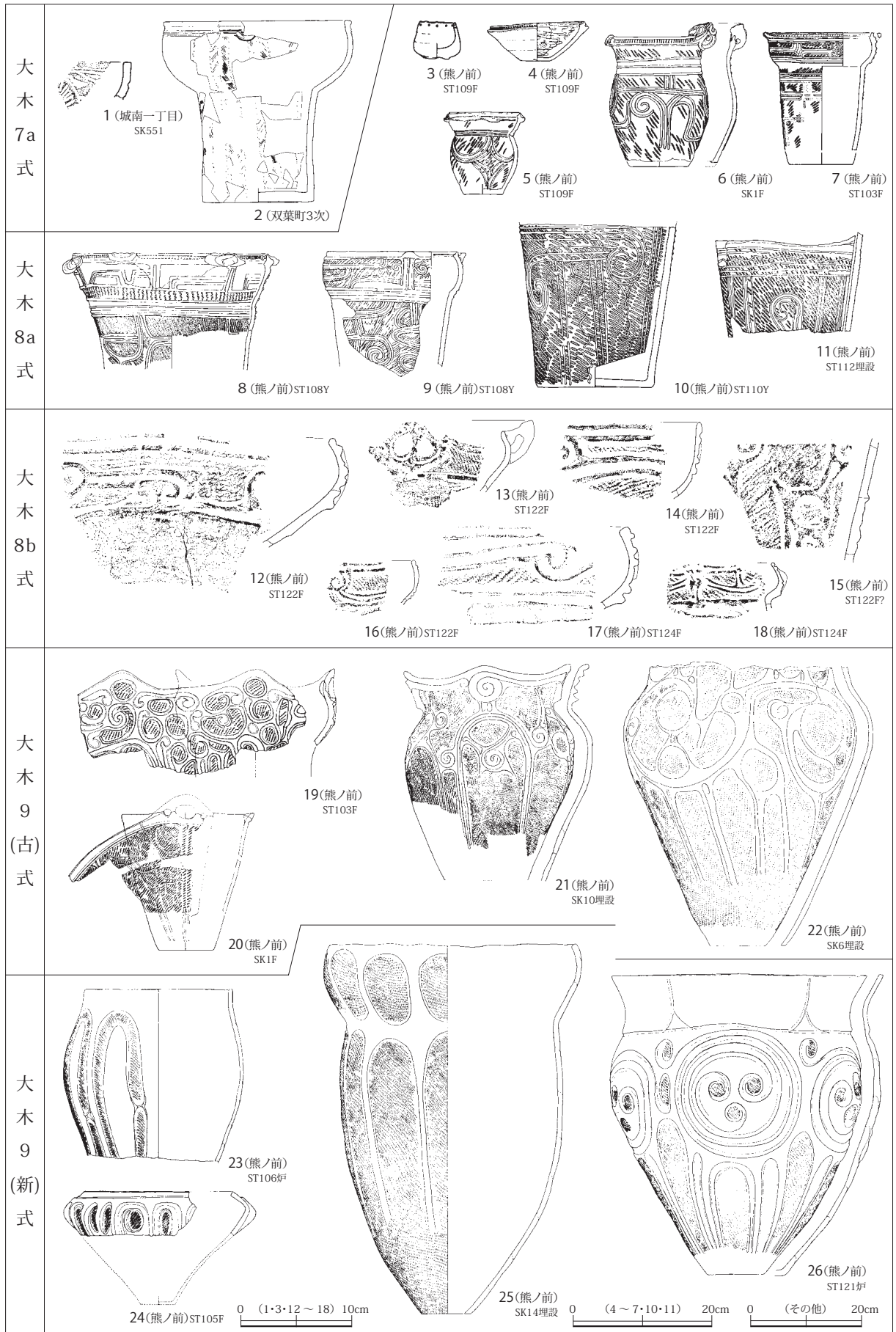


図2 山形盆地南部馬見ヶ崎川扇状地から出土した縄文土器(1)

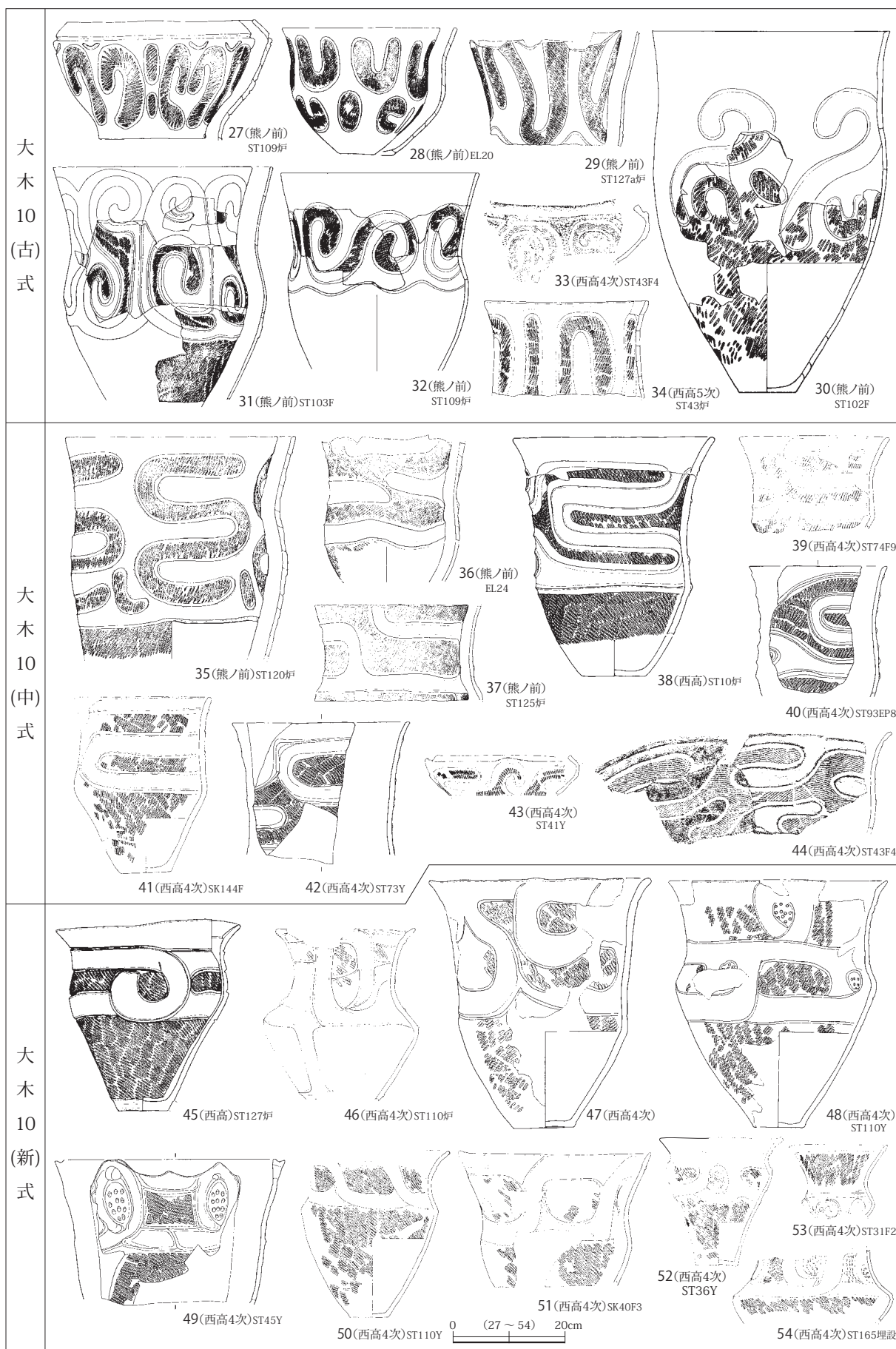


図3 山形盆地南部馬見ヶ崎川扇状地から出土した縄文土器(2)

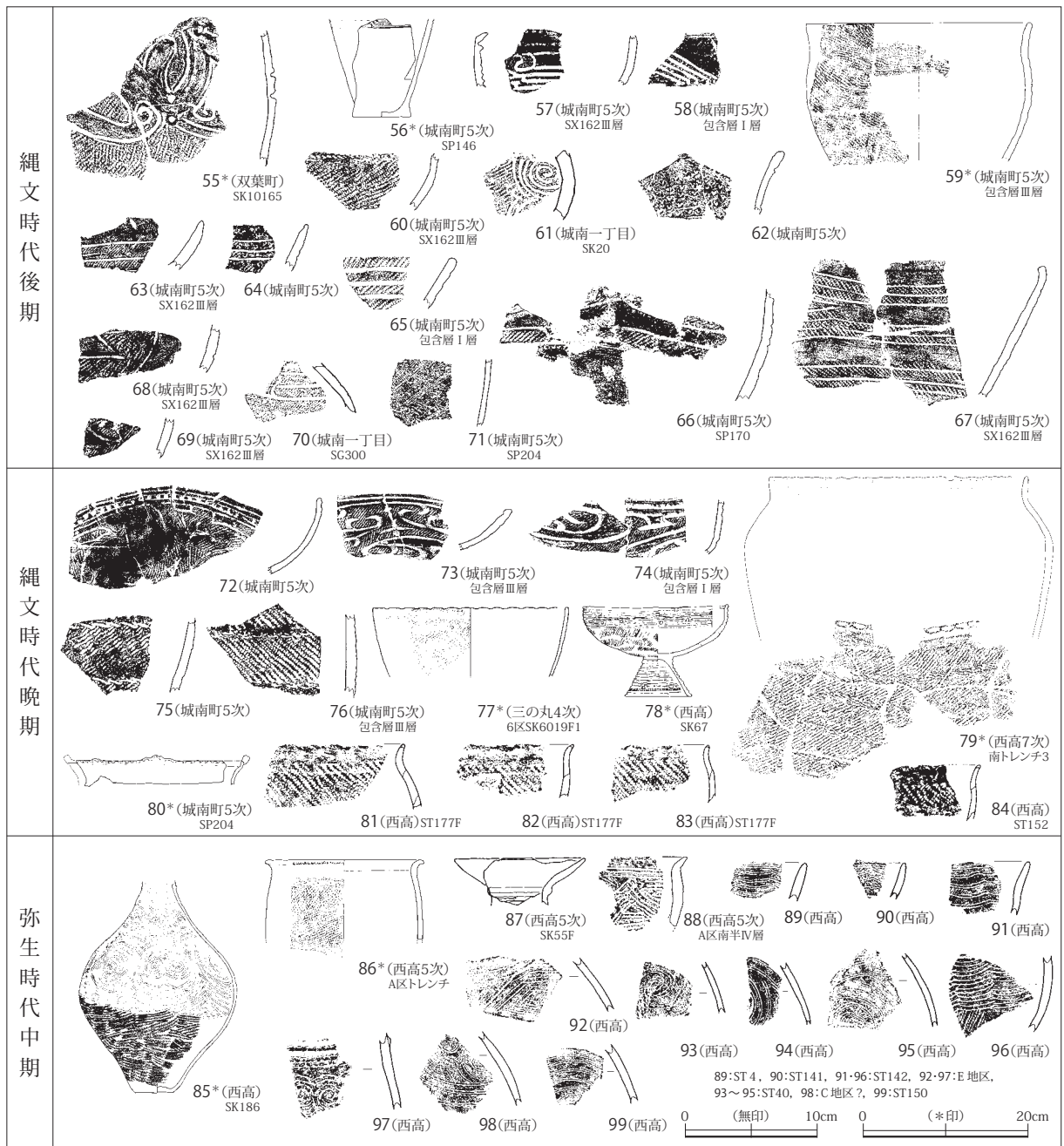


図4 山形盆地南部馬見ヶ崎川扇状地から出土した縄文土器 (3)

木9 (新) 式期の住居跡である ST121 (図2-26) を掘り込んだ埋設土器 SK14 は、SK 6 と同様に底部を欠いた深鉢形土器 (図2-25) を倒置し、扁平な石が乗せられていたが、前出の土器棺墓群に後続する大木9 (新) 式に位置づけられる。

熊ノ前遺跡の注目すべき成果として、ST125 (大木10 (中) 式期) の床面から石棒2点と石柱 (全長75cmの五角形の自然礫)、磨石がまとまって出土した点があげられる。西壁付近から石棒と石柱が東西方向、石棒が南北方向に横倒しの状態で検出され、その間に磨石が挟

まれていた。住居の奥壁に相当し、支柱穴に隣接することから、支柱に立て掛けられていたと推定されている。複式炉を持った住居内の祭祀を示す事例として特筆され、その他にも ST127a (大木10 (古) 式期) の張り出し部 (出入り口?) の床面から石棒が、そして山形市教育委員会の第3次調査のJ-2号住居跡の複式炉内から石柱 (全長70cm) が検出されており (山形市教委編1978)、大木10式期に屋内祭祀が盛行していた様相を窺わせる。

また大木9式期の ST102 の床面直下から、楕円形に

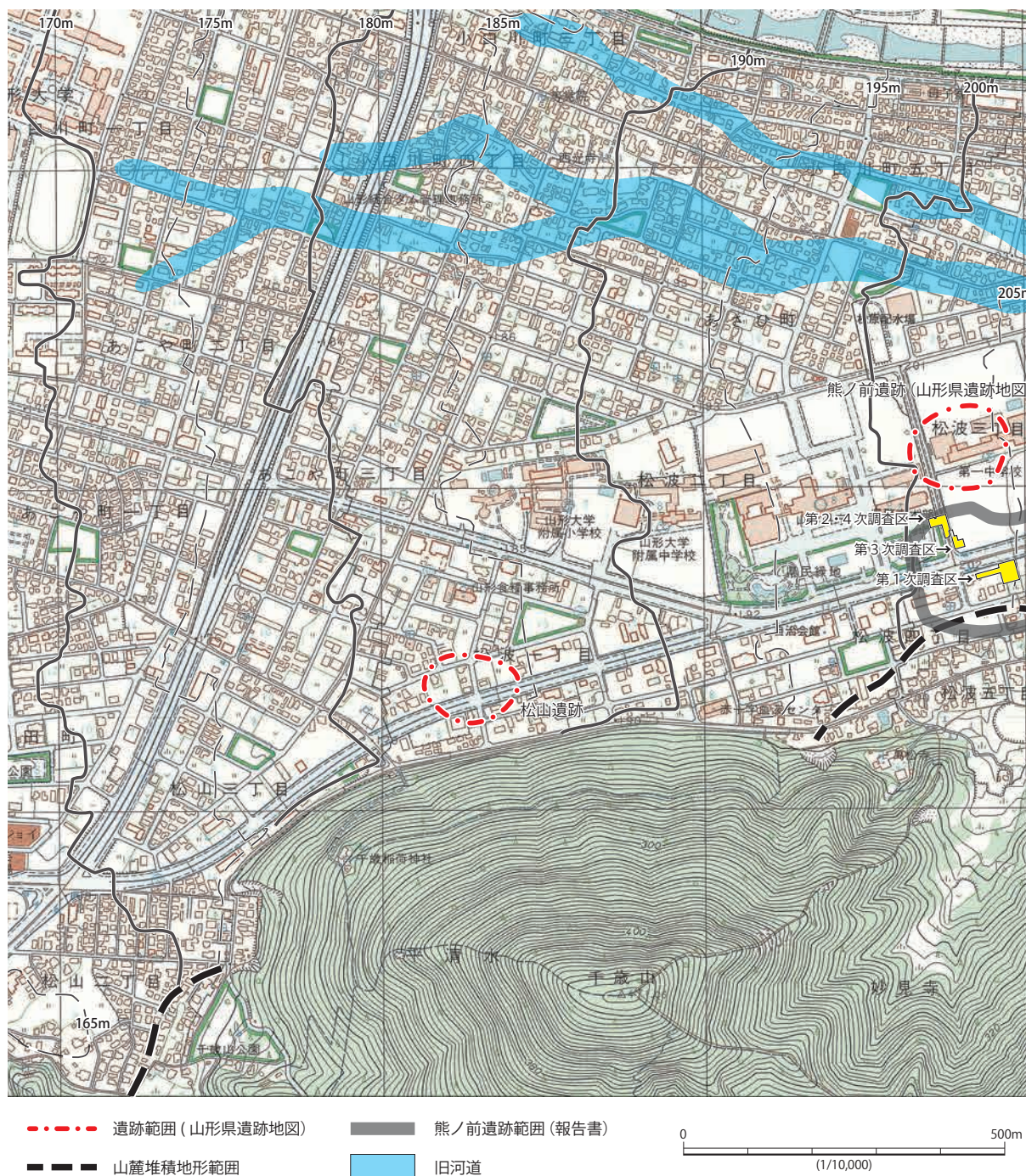


図5 熊ノ前遺跡の調査区と周辺の縄文時代遺跡

組まれた配石遺構 (SM 1) が検出されている。長軸 2.2 m、短軸 1.6 m、深さ 20 cm で、長軸は東-西方向にあるが、15 ~ 30 cm 大の扁平な河原石を用いて構築され、特に北側から東側と西側の一部で、石を縦に二重に巡らせており、中央部は 5 ~ 10 cm 大の自然礫で仕切られていた。土器片と石器の剥片が多量に出土し、大木 8 式期の所産とされ、覆土には炭化粒子が若干含まれるものの焼土は認められていない。遺構の性格は判然としな

いが、規模や形状から配石墓の可能性も否定できない。さらに山形市教育委員会の第 3 次調査区から、大木 8b 式期の礫を伴う土坑 8 基 (D-3 ~ 8・11・12 号土坑) が報告されている (山形市教委編 1978)。群在した集石土坑を土坑墓群と見なすならば、同式期の墓域が遺跡範囲のやや中央寄りに形成されていたことになろう。

熊ノ前遺跡は扇状地扇頂部に展開した大規模な集落跡で、背後に山並みが迫り、西流する馬見ヶ崎川またはそ

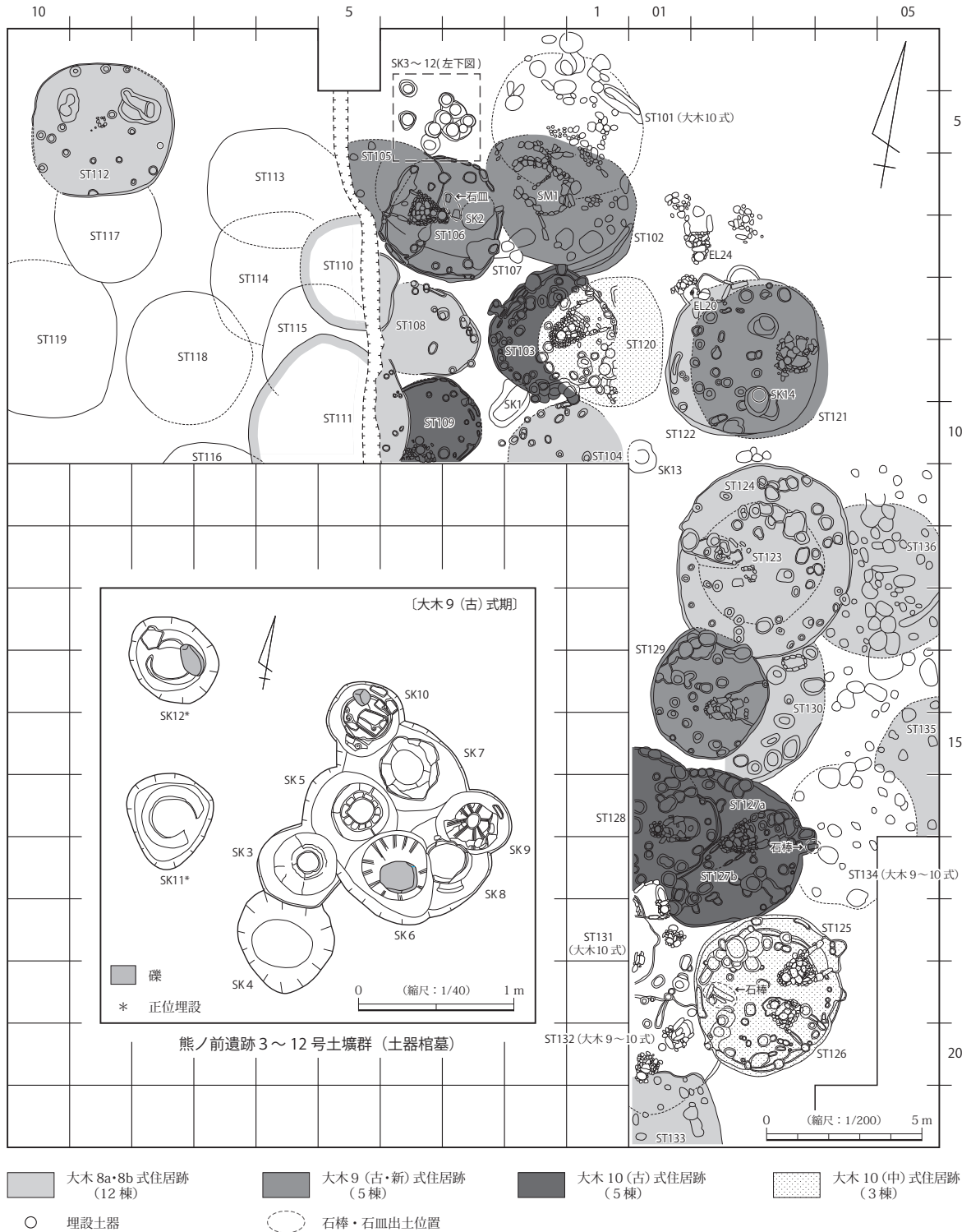


図6 熊ノ前遺跡第2・4次調査（縄文時代中期）の集落構成図

の支流にも近接した恵まれた環境下において、遺跡周辺を狩猟場に通年にわたって居住されていたと推定される。微高地に立地したため、水害の危険にさらされる頻度も少なく、集落は大木 8a～10（中）式までの長期間継続した。住居棟数や出土品の数量、遺跡の規模から推して、山形盆地南部の拠点集落であった可能性が高く、

大木 10（古）～同 10（中）式期は 3.4 km 離れた山形西高敷地内遺跡と並存の関係にもあった。また大木 8a～8b 式期には半径 5 km 圏内に松山遺跡、松見町遺跡、吉原 V 遺跡、にひやく寺遺跡、松留遺跡が並存しており、これ等の中核的な集落となっていた。調査範囲が限定的で、住居跡の重複も激しく、集落の全容を明確にするこ

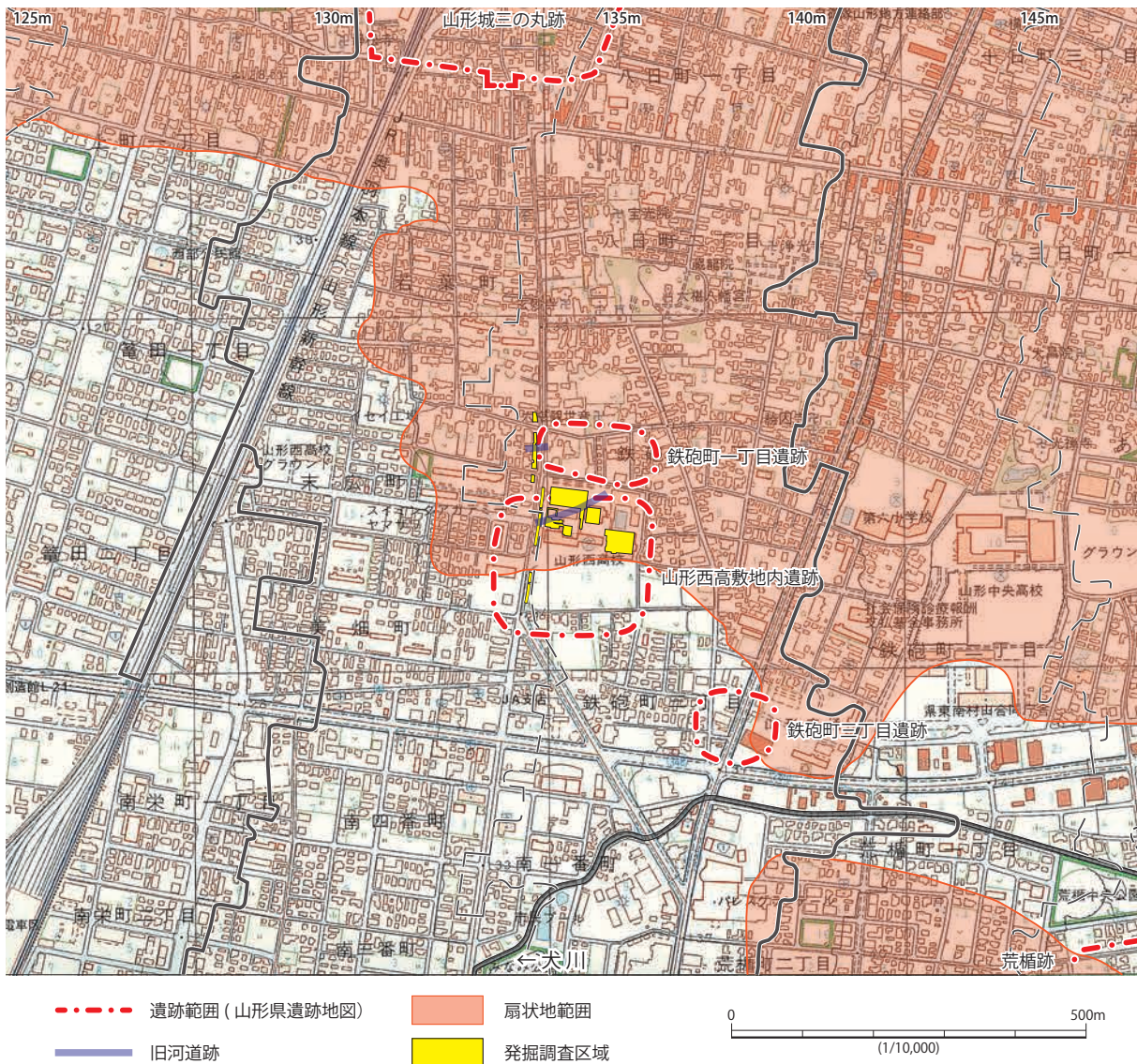


図7 山形西高敷地内遺跡の調査区と周辺の遺跡

とができないが、断片的ながら居住域と墓域の関係が暗示される時期も指摘される。また出土した石器は、磨石・凹石等の植物質食料の調理具類や石鏃等の狩猟具が多くを占めており、生業活動を反映していると考えられる。

B. 山形西高敷地内遺跡

山形西高敷地内遺跡（遺跡番号 201-141）は馬見ヶ崎川扇状地の扇端部に位置しており、遺跡の南方 400 m を須川支流の犬川が西流する。1976 年 1 月に校舎改築工事に際して発見された新規の遺跡で、同校は 1948 年に現在地に移転してきたが、それ以前は日本飛行機山形工場の敷地となっていた。1976 年に第 1 次調査（4 月）と第 2 次調査（7 月）が山形県教育委員会により実施され（佐藤庄一ほか 1979）、1984 年に第 3 次調査（佐藤庄一ほか 1985）、1989 年に第 4 次調査（佐

藤庄一ほか 1992）、1992 年に第 5 次調査（佐藤庄一ほか 1993）が実施された。さらに 2002 年に山形県埋蔵文化財センターによる第 6 次調査（植松ほか 2003）、2003 年に山形市教育委員会による周辺部の調査（桐谷ほか 2004）、2004 年に山形県埋蔵文化財センターによる第 7 次調査（高桑 2005）が実施されており、同遺跡の発掘調査は都合 8 回を数える（註 6）。

山形西高敷地内遺跡は河道跡両岸の自然堤防から後背湿地にかけて展開しており、現地表面の標高は 135 m 前後となる。山形県遺跡地図では、東西 220 m、南北 200 m の約 40,000 m² が遺跡範囲とされ、直ぐ北側には奈良・平安時代の集落跡である鉄砲町一丁目遺跡（2005 年度新規登録）が位置している。しかし山形市教育委員会による 2003 年調査で、縄文中期の集落が北側に 120

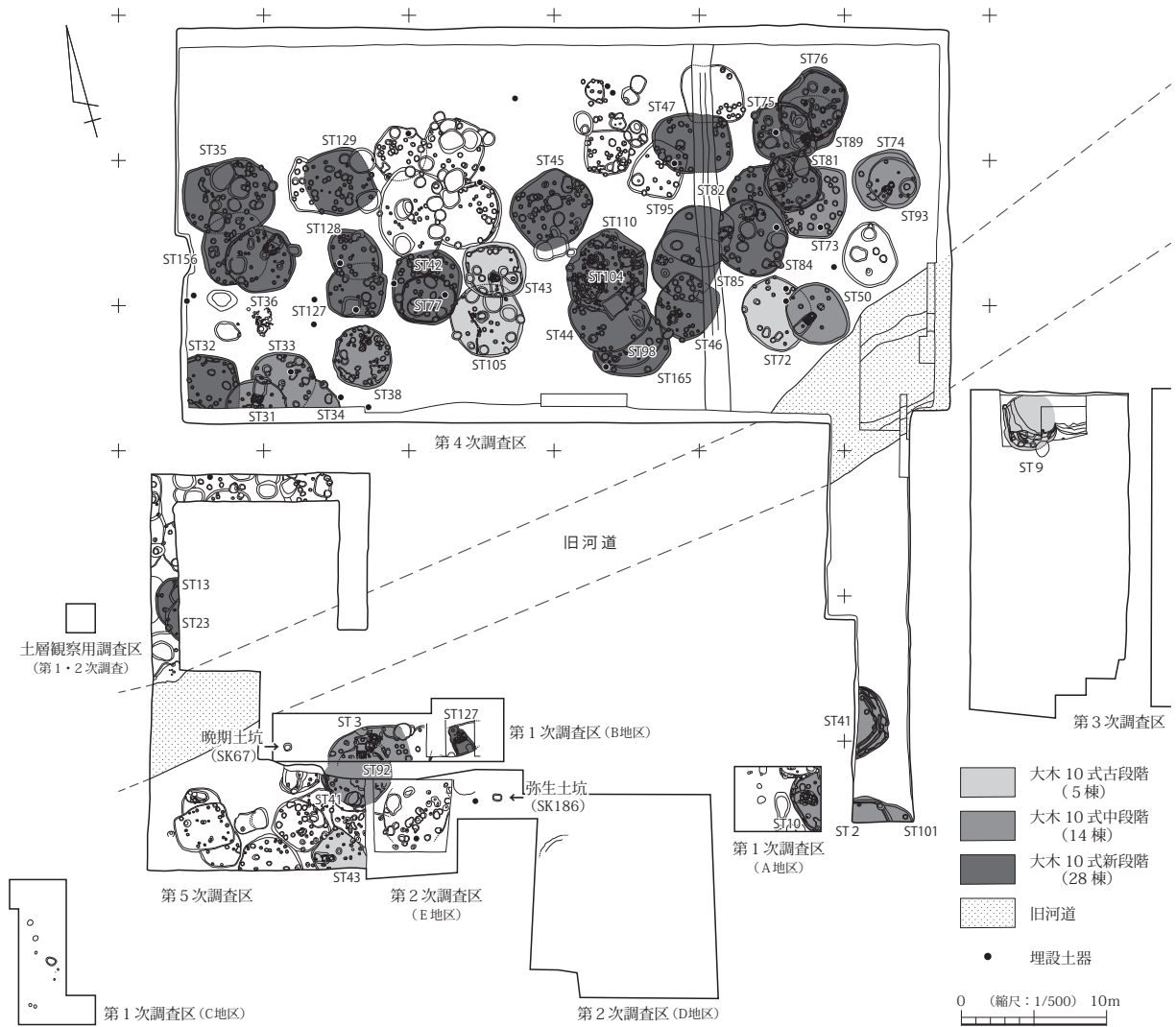


図8 山形西高敷地内遺跡縄文時代中期の集落構成図

m以上広がりを持つことが確認されており、鉄砲町一丁目遺跡を含めた遺跡範囲の再編が求められる(図7)。

これまでの調査で、縄文時代中期末葉、縄文時代晩期～古墳時代前期、奈良・平安時代の3面の文化層からなる重層的複合遺跡であったことが確認されている(図9)。集落内では北東-南西方向の河道跡が検出され、その両側の自然堤防上に集落が形成されていたが、自然堤防がやや高く、北に向かって低まる傾向が見られ、地表面から地山までの深度も河道から離れるに従い深まっている。図9左側が河道跡の北側、同右側が南側の層序区分の模式図である。両図とも河道跡に近接しているため、無遺物層を挟んだ整然とした堆積状況が観察されている。しかしやや上流の第3次調査区では古墳時代と縄文時代中期の間層の第V層が認められず、河道跡から遠く離れた山形市教育委員会調査区では、古代の遺物包含

層直下が縄文時代中期の包含層に推移しており、間層は認められない。古代と古墳時代の間層である第Ⅲc層は河川の氾濫に起因した砂礫層で、河道から離れるに従い薄くなり消失する。第Ⅴ層は茶褐色～灰褐色の砂質の粘土層で、同様に洪水による堆積層である。縄文時代中期末葉の包含層である黒褐色粘質土層(黒褐色微砂質粘土層)は、現地表面から1～1.9m下で検出され、層厚は10～55cmを測り、北側に広い範囲で観察される。

集落内を西流した河道跡は幅が最大8m以上、確認面からの深さは約2mを測る。流路は縄文時代中期の集落形成以前にほぼ固定し、それ以来ほとんど移動することなく、河川の氾濫と安定を繰り返しながら徐々に埋積が進んでおり、堆積層の下層に大木10式土器、下～中層に大洞A式土器、中層に古式土師器が少量含まれ、奈良・平安時代には完全に埋没している(佐藤・水戸1993、

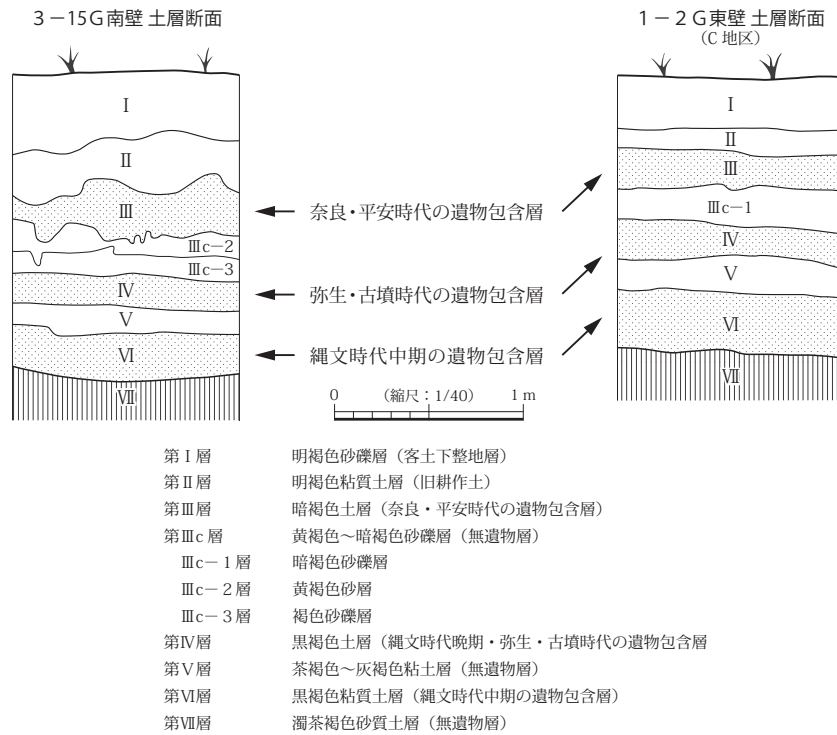


図9 山形西高敷地内遺跡第1・2次調査土層断面模式図

植松・吉田 2003)。縄文時代中期末葉は比較的安定していたものの、集落は度々水害に見舞われており、住居跡の覆土にも細砂粒の混入が観察される。特に大木 10 (中) 式期の ST31 ~ 34 の覆土層は埋積作用で包含層に完全に覆われており、集落がその都度再建を果たしてきたことは、顕著な住居跡の重複関係から暗示される。なお河道内に捨場は形成されていない。

山形西高敷地内遺跡は大木 10 (古) 式期に集落の形成が開始され、漸次住居棟数を増加させ、同 10 (新) 式期が最大数となる。しかし同式で集落形成が終焉し、後期には継続されない。河道跡両側の高燥地に沿って住居跡が構築され、激しく重複しているが、河道跡の南側で 23 棟、北側で 53 棟の住居跡が検出されている (図 8)。その内訳は大木 10 (古) 式期が 5 棟、同 10 (中) 式期が 14 棟、同 10 (新) 式期が 28 棟で、前二者では両岸に住居が構築されていたのに対し、大木 10 (新) 式期は南側が ST127 のみで、その他の 27 棟は北側に集中する (註 7)。図 8 の図郭外で、河道跡から北方に 60 ~ 150 m 離れた山形市教育委員会の調査区では、大木 10 (中) ~ 同 10 (新) 式期の住居跡 5 棟と掘立柱建物跡 2 棟が検出され、また前出の河道跡の北方約 100 m 付近で、流路幅 6.3 m、深さ 1.1 m の河道跡が検出されてい

る。該期の集落が北側の小河川に挟まれた自然堤防から後背湿地にかけた広い範囲に展開しており、扇端部では幾つかの小河川が扇状地を縫うように西流していた光景が想起される。

一方河道跡の南側は、調査面積が北側より狭いため不明な点が多いが、微高地の縁辺部に相当し、縄文時代中期の住居跡は河川に沿った高燥地に集中する。第 1・2 次調査では古墳時代前期の遺構検出面 (第 V 層上面) で、縄文時代晩期大洞 A2 式期の土坑 (SK67) と弥生時代中期後葉桜井式期の土坑 (SK186) が検出されており (図 8)、該期の生活の主体が河道跡の南側あったと考えられる。地形分類上は扇端部と前縁部の境界域に当たり、河道跡の南方 70 ~ 120 m にある第 7 次調査の南区では、地表下 1.2 ~ 1.6 m から、層厚 10 ~ 20 cm の縄文時代晩期後葉 (大洞 A2 式期) の包含層 (VI 層: 黒色粘質シルト層一部分的に粗砂混入-) が検出されており、調査区南端部ではその直下が礫層で、縄文時代中期の包含層は確認されていない (高桑 2005)。

山形西高敷地内遺跡は扇状地扇端部の小河川に沿って営まれた大木 10 (古) ~ 同 10 (新) 式期の集落跡で、当初は住居棟数が少なかったが、同 10 (新) 式期には 30 棟を超える大集落に発展した。しかし同式期をもっ

て集落は廃絶され、後期に引き継がれることはなかった。近年の大木 10 式並行期の炭素 14 年代の計測値 (4,540 - 4,395calBP) を参照するならば、存続期間は 200 年に満たなく、集落としては比較的短命であったと思われる。河川に沿った集落で、度々洪水に見舞われたが、集落は繰り返し維持されていた。ところが大木 10 (新) 式の段階に集落の解体を迫る居住システムの変化が生じたことになろう。複式炉の廃絶と共に中期集落が消失するのは、大木式土器分布圏に通用の事象であり、気候の寒冷化といった環境的要因が大きく作用していたと推定される。なお山形西高敷地内遺跡では大木 10 (新) 式期に住居棟数が急増したが、前出の熊ノ前遺跡が大木 10 (中) 式期で集落を終焉したのと符合しており、扇頂部の住民が 3.4 km 離れた扇端部の集落に移住した可能性も排除できない。また扇端部の立地環境を反映してか出土した石鏃が非常に少なく、植物質食料に大きく依存した生業活動が推定される。

C. 縄文時代中期のその他の遺跡

馬見ヶ崎川扇状地を代表する二つの縄文集落を概説したが、その他に扇端部の山形城三の丸域内で、縄文時代中期の生活の痕跡が確認できる。

城南一丁目遺跡は山形城三の丸域内の山形駅西口北側の霞城セントラルの建設工事に伴い、1998 年に山形県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、現在は^{じょうなんまち}城南町遺跡として包括されている (黒坂ほか 1999)。同遺跡では縄文時代中期初頭五領ヶ台 I a 式並行の土器 (図 2-1) が、調査区東側の時期不明の土坑 (SK551) から出土している。内彎した口縁部を乗せたキャリパー形の器形で、文様は沈線でドーナツ形の文様図形を描出し、区画内を短沈線で充填した五領ヶ台 I a 式の典型である。同遺跡ではその他にも、河道跡 (SG300) から大木 9 (古) 式 (報告書第 58 図 2)、溝跡や土坑から同 10 式の土器片 (同第 58 図 4・5) が出土している。なお河道跡は流路が南東-北西方向で、流路幅が 9~14 m、検出面からの深さが 1.4 m の小河川で、中世初期には埋没している。

^{ふたばちよう}双葉町遺跡は山形城三の丸域内の山形駅西口の南側の区画で、隣接する城南町遺跡と併せて、1997~2001 年にかけて山形市教育委員会により発掘調査が実施されている (齋藤 2005、須藤・齋藤 2006)。図 2-

2 は 1999 年の双葉町遺跡の第 3 次調査で、調査区北西隅の IX 層 (近世前の地山層) から出土したが、同調査区は遺跡の北東端で前出の城南一丁目遺跡に近接する。内彎した口縁部を乗せたキャリパー形の器形で、口唇の断面形が外側に突出したように図化されている。しかし写真図版を見る限りでは、括れ部の接合面から剥離した可能性が高く、円筒形の胴部の上端が球状に膨らみ、さらに内彎した口縁部が乗る 3 段構成の器形と思われる。従って図示された上端の文様は、本来胴部上端の文様であり、平行沈線文と貼付文は「胴部文様が帯をなさない懸垂文」(今村 2010: 199 頁) に相当する。胴部文様帯は弧状の貼付文を沈線で縁取っただけの簡略化した文様で、地文は装飾的な縄文 (縦位の羽状縄文・結節回転文) で構成される。同例は口縁部文様帯が不明で型式の特定はできないが、前期末葉大木 6 式 5 期または中期初頭五領ヶ台 I a 式並行期に位置づけられる。

(2) 縄文時代後期

縄文時代後期は、山形城三の丸域内の双葉町遺跡と城南町遺跡で確認できる。特に 2001 年の城南町遺跡第 5 次調査では、近世地山層 (III 層) 直下の IV 層 (灰褐色シルト層) ~ V 層 (黒色シルト層) で、縄文時代の柱穴群と共に後・晩期の遺物包含層が検出されている。

図 4-55 は、双葉町遺跡の 1999 年度の 5 区の調査で、土坑 (SK10165) の覆土から出土した。土坑は長軸 2.08 m、短軸 1.86 m、検出面からの深さ 25 cm の不整円形で、底面は平坦に作出されていた。55 は内彎した深鉢形土器の胴部資料で、幅の狭い無文帯による渦巻状や弧状の図形で構成され、LR を地文とする。文様の交点部分にボタン状貼付文が配され、沈線を基本に描出されるが、部分的に沈線に隆線を沿わせている。宮城県^{ものうちようさんきよ}石巻市桃生町山居遺第 VI 群土器 (相原・柳澤 2007) に対比され、後期初頭袖窪式に相当する。なお土坑は遺跡中央のやや東寄りで見出され、その北西方 30~40 m には並列した陥穴 3 基が見出されている。

56~71 は城南町遺跡の範囲から出土したが、61・70 が城南一丁目遺跡で出土したのに対し、その他は城南町遺跡第 5 次調査で出土した。57・58 は傾きに問題があるが、口内に文様を持つ加曾利 B1 式の浅鉢形土器で、56 は幅狭の横帯文を鉤状に区切る特徴から、同式の装飾深鉢形土器であろう。59・60 は頸部が括れ、口

縁部が外反した縄文施文の粗製の深鉢形土器である。59 は口頸部に無文帯を持たないが、60 は縄文原体の側面圧痕が観察され、口頸部の無文帯が推定される。いずれも南境 2 式～宝ヶ峯 1 式期に相当する。

61 は内彎した胴部破片で、LR を地文とする。渦巻文が沈線で描出され、その下に重弧状の沈線文様が垂下した多条沈線文の土器であるとすれば、南境 1 (新) 式期に相当する。62 は頸胴部界が屈曲した深鉢形土器である。大波状口縁で、器面に竹管状工具で刺突文が加えられ、宝ヶ峯 1 式期の十腰内 1 式系土器に相当する。63～67 は平行する縄文帯で構成された装飾の深鉢形土器で、宝ヶ峯 1 式期に相当する。特に 67 の体部上半には、三角形区画の一部が認められ、加曾利 B1 式の三角形単位文との関連が想定される。70 は天地逆に図示されているが、口縁部が開いた装飾深鉢形土器と思われ、横帯文が蛇行沈線で区切られており、宝ヶ峯 2 式期に相当する。

68・69 は左傾の大振りの入組帯状文 (LR 地文) で構成され、宝ヶ峯 3～西ノ浜式 (瘤付土器第 1 段階) に相当する。71 は櫛歯状工具で条線が斜位に交互に施文されており、後期後葉の粗製深鉢形土器であろう。

以上のように、山形城三の丸域内の調査成果から、縄文時代後期初頭から後葉までの断続的な生活の痕跡を窺うことができる。

(3) 縄文時代晩期

縄文時代晩期は、前葉が 2008 年の山形城三の丸跡の旅籠町調査区、中葉が城南町遺跡第 5 次調査区、後葉が山形西高敷地内遺跡で確認できる。

図 4-77 は、山形城三の丸跡第 4 次調査 6 区の時期不明の土坑 (SK6019) から出土した、晩期前葉 (大洞 B・BC 式期) の装飾深鉢形土器である。口端が刻まれた小波状縁で、口縁部は沈線で画され、無文帯となっており、胴部には LR が施文される。

72～74 は大洞 C1 式の椀形・浅鉢形土器である。72 は口縁部に 1 列の裁痕が巡り、体部は単一主要素を点対称に上下向かい合わせた構図の磨消文様が展開しており、大洞 BC2 式終末または同 C1 (古) 式に位置づけられる (小林 2010: 519 頁)。73・74 は胴部に複雑な雲形文が展開する大洞 C1 (新) 式である。80 は大洞 C2 式期の口縁部が外折した深鉢形土器で、口端は小波状縁で、一部に山形突起が配される。

山形西高敷地内遺跡から出土した晩期の土器は大洞 A2 式に限られ、遺構としては河道跡南側から土坑 (SK67) が検出されている (図 8)。土坑は第 1 次調査の B 地区で、第 VI 層 (縄文時代中期包含層) を切って掘り込まれていた。径 53 cm、深さ約 10 cm の円形の浅鉢形土器で、暗褐色粘質土の覆土から、大洞 A2 式の台付浅鉢形土器 (78) が破碎された状態で出土した。同例は幅狭となった頸部文様帯の上下対向の匹字文や丸味を帯び胴部の特徴から、大洞 A2 式に位置づけられる^(註 8)。また同一個体の可能性が高い、口縁部が短く外折した小波状縁の同式の粗製深鉢形土器 (81～84) が出土している。81～83 は第 2 次調査 D 地区の古墳時代前期の住居跡 (ST117)、84 は古代の住居跡 (ST152) の覆土から出土したが、両住居は重複関係にあり、覆土の判別が困難であったと報告されている。また第 7 次調査では遺跡の南側に該期の遺物包含層が確認され、深鉢形土器の大破片 (79) が出土している。晩期の集落の中心が、扇端部から前縁部に移行する現在のグランド部分にある可能性が指摘されている (高桑 2005: 5 頁)。

(4) 弥生時代中期

弥生時代は山形西高敷地内遺跡のみ確認されている。中期後葉桜井式期に位置づけられ、遺構は河道跡南側から土坑 (SK186) とピット群が検出されている (図 8)。

土坑は第 2 次調査の E 地区北西端で、第 V 層 (間層) 上面で検出され、長軸 61 cm、短軸 48 cm、深さ 15 cm の楕円形である。土坑内のやや東寄り、壺形土器 (図 4-85) が横位に埋置された状態で出土しており、土器棺墓であったと考えられる。85 は口縁部を欠いているが、体部中央に最大径を持つ細口の壺形土器で、口頸部に 2 条の隆帯を巡らし、体部上半に 2 本一組の細い平行沈線で渦巻文・同心円文が描出され、連弧文で区画された下半には撚糸文が施文される。

86 は同式の甕形土器で、短く外折した口縁の端部に縄文を加え、体部は LR を施し、その上端に結節文を巡らせている。87 は細口壺形土器の口縁部で、その他にも 2 本一組の細い平行沈線で渦巻文・連弧文等の文様を施した同式期の土器片 (88～99) が出土している。

弥生土器の大半が河道跡の南側から出土し、また第 2 次調査の E 区では前記した土坑やピット群が検出されていることから、河道跡南岸の高燥地に弥生時代中期の生

表1 馬見ヶ崎川扇状地の縄文時代遺跡の消長

	遺跡名	中期			後期			晩期			弥生時代			調査年	文献	備考
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前期	中期	後期			
馬見ヶ崎川上流域	関沢B遺跡			○								○		1987年	県133集	大木10式/桜井式
	向山遺跡						◎	◎		○				1987年	県133集	住居3(後2・晩1)
	下宝沢遺跡						○								山形考古7-1	窟付Ⅲ段階
	松留遺跡		◎					○	○	○	○			1971年	山形考古4-1/市史	中期住居?
	千葉屋敷遺跡						○	◎	○	○				1970年	市史	晩住1/妙見寺遺跡含
	釈迦堂裏遺跡			○											埋文紀要6	大木9式?
扇頂部	熊ノ前遺跡		◎	◎										1974~78年	県16集/市報告	住居65/埋設土器11
	松山遺跡		○												埋文紀要6	大木8b式?
扇端部	山形西高遺跡			◎						◎	◎			1976・84年他	県17・91・173集他	住居81/埋設土器26
	山形城三の丸跡 (双葉町遺跡)	○			◎									1997~01年	市24・25集	後期土坑1/陥穴11
	山形城三の丸跡 (城南町遺跡)	○		○	○	○	○		○					1998~01年	県埋文69/市25集	柱穴群/河道跡
	山形城三の丸跡 (旅籠町地内)							○						2008年	県埋文190集	

◎：遺構あり，○：土器のみ

活の主体があったと想定される。

(5) 小 結

馬見ヶ崎川扇状地では、縄文時代中期初頭に活動の痕跡が現れ、中期中葉から末葉にかけて、熊ノ前遺跡と山形西高敷地内遺跡が拠点集落となった。熊ノ前遺跡は大木8a～10(中)式まで長期にわたり継続したが、山形県内の中期の集落遺跡では、大木8b式前後に途絶する傾向が指摘され(小林2019)、その点で同遺跡は例外的な遺跡となっている。山形西高敷地内遺跡は大木10式期のみ継続期間が短い集落であったが、最終期に当たる大木10(新)式期に大規模な集落に発展した。熊ノ前遺跡の廃絶時期に符合して住居棟数を増加させており、熊ノ前遺跡の住民が移住してきた可能性も考えられる。

後期では、山形城三の丸域内に初頭から後葉までの土器が散発的に認められる。しかし遺物量は極めて少なく、後期前葉～中葉の中核となる遺跡は、須川対岸の谷柏地区や立谷川扇状地の前縁部に存していたと推定される。後期後葉～晩期中葉も三の丸域内で土器が少量認められる。この時期は馬見ヶ崎川上流域の向山遺跡や千葉屋敷遺跡で住居跡が検出されており、該域に生活の拠点があったことになる。但し大洞C1式期に限っては、非日常

的な優品の椀形・浅鉢形土器(図4-72～74)が城南町遺跡で出土しており、該期には扇端部にも居住のための集落が営まれていたと考えられる。

その後扇状地内で活動の痕跡が明確になるのは、晩期後葉の大洞A2式期と弥生時代中期後葉の桜井式期の二時期で、いずれも山形西高敷地内遺跡で確認されている。両期とも沖積低地で遺跡数が増加する時期となっており、歩調を合わせるように扇端部での活動を活発化させていたのであろう。

以上をまとめたのが、表1である。扇状地内では地点を移しながら、断続的に生活が営まれていたように窺える。しかし型式毎の消長を辿ったものではないので、連続していたのではなく、空白期も存したことが想定される。また現成の扇状地のため、洪水等で削平された可能性も否定できないが、埋没した遺跡の存在も予想され、今後の資料の蓄積が期待される。

なお山形市教育委員会が調査した双葉町遺跡では、時期の特定はできないが、陥穴が計11基検出されている。1999年度の5区の調査で3基、2004年の第7次調査で8基検出され、前者は遺跡中央のやや東寄り、後者は中央の西側で群在しており、特に前者では3基の陥穴が並列していた。城南一丁目遺跡(城南町遺跡)で河道跡

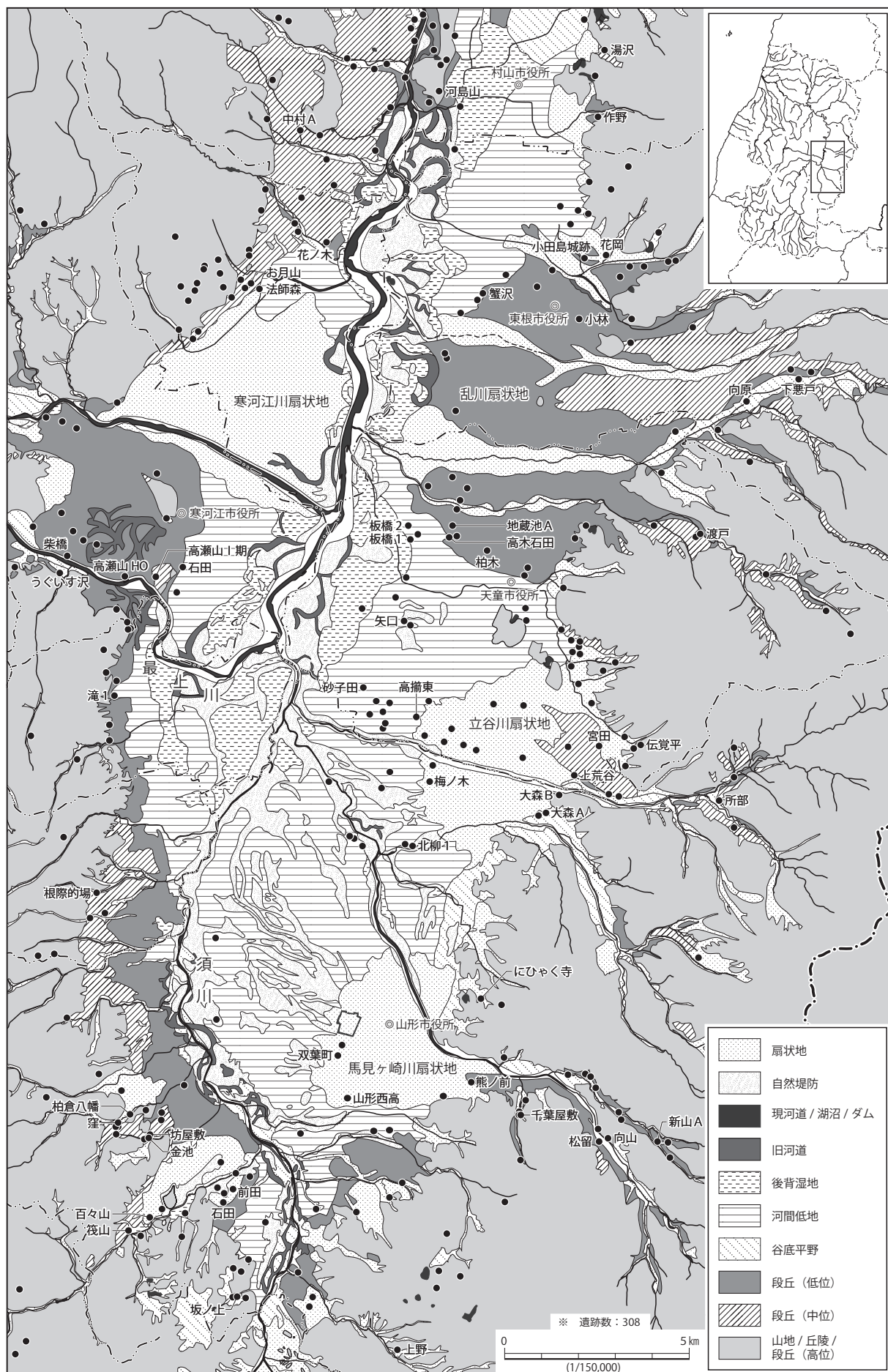


図 10 山形盆地の地形分類と縄文時代の遺跡分布

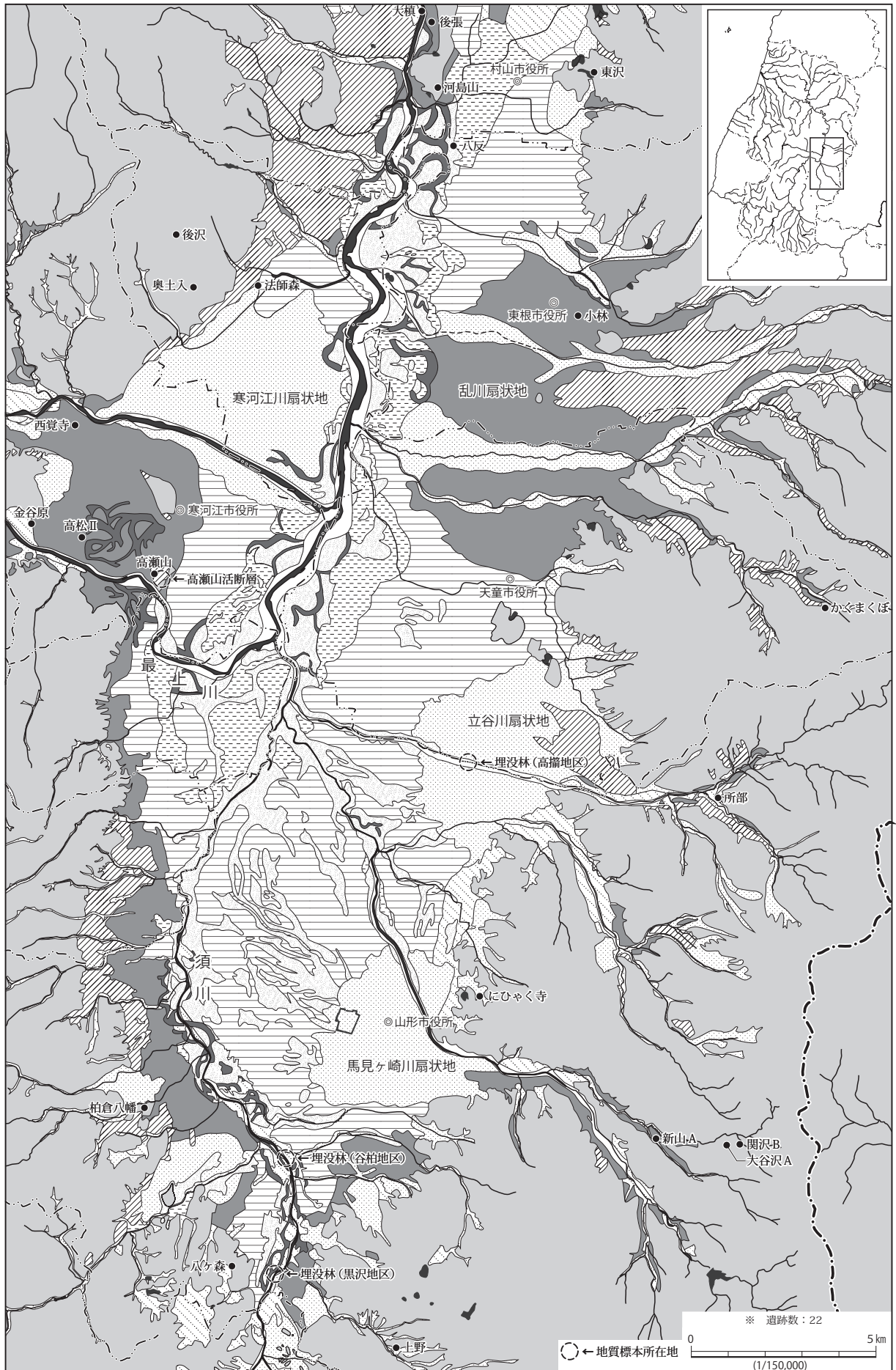


図 11 山形盆地の地形分類と旧石器時代末期～縄文時代早期の遺跡分布

が検出され、また湧水帯も近いことから、ある時期水辺に集まる動物の狩猟場として同遺跡が利用されていたのであろう。

4 山形盆地における遺跡動態

図10には、山形盆地及びその周辺の縄文時代の308遺跡をプロットしたが、行政区域では河北町・天童市の全域と、村山市・東根市・寒河江市・中山町・山辺町・山形市・上山市は一部が該当する。扇状地の地形が発達した地域では、山麓付近や扇頂部、また扇端部・前縁部に縄文時代の遺跡が多く分布し、表流水が地下に浸透し伏流する扇中央部では少ない傾向が指摘される。また段丘地形が発達した地域では、山麓付近と河川沿いに遺跡の分布が確認できる。

以下では、山形盆地における縄文時代の各期と弥生時代の様相を概観する。

(1) 縄文時代草創期～早期の遺跡動態

縄文時代草創期～早期は、地質年代の更新世が終了し完新世に突入した時期で、近年の炭素14年代法を用いた年代測定研究によると、較正年代が15,860～7,050年前(calBP)と推定され(小林謙一2017)、縄文時代の2/3の期間に相当する8,810年間を占める^(註9)。当該期は寒冷期から温暖期に移行し、急激な温暖化が進行し海面が急上昇しており、対馬暖流が日本海へ本格的に流入したことで、早期になって日本海側に多雪地帯が出現した。また最上地方大蔵村の肘折火山が12,000年前頃に火砕流噴火を引き起こし、尾花沢盆地に甚大な被害を及ぼしており、山形盆地の北部にも噴出物の降下が確認されている(豊島1980)。同火山の正確な噴火の年代は特定されていないが、寒の戻り期である「ヤングドリアス期」(Younger Dryas: 13,000 - 11,500calBP)にほぼ相当しており、当該域では肘折パミスが更新世と完新世を分ける鍵層となっている。

図11には、縄文時代草創期～早期の遺跡をプロットした。当該遺跡だけでは16遺跡と少数であったため、細石器や両面加工尖頭器を出土した旧石器時代末期の遺跡も含めている。その内訳は、細石刃石器群が出土した遺跡が、大楨(別称川口A)遺跡(村山市)、金谷原遺跡(寒河江市・大江町)、西覚寺遺跡(寒河江市)、高瀬山(L区)遺跡(寒河江市)、奥土入遺跡(河北町)の5遺跡、

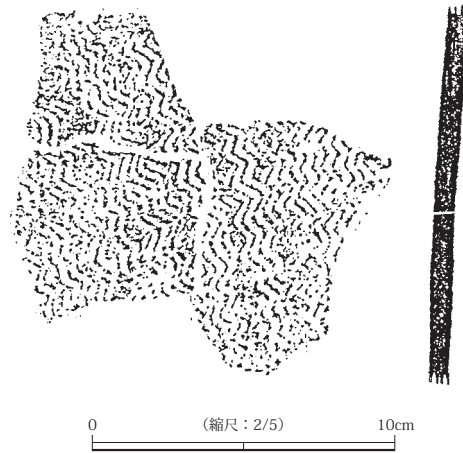


図12 山形県東根市小林遺跡A地点出土の押型文土器

両面加工尖頭器を出土した遺跡は、高瀬山(I区)遺跡(寒河江市)、高松II遺跡(寒河江市)、法師森遺跡(河北町)の3遺跡で、殆どが盆地北西部の段丘面に立地する。

扇状地の地形が発達した山形盆地では、早期の遺跡の多くが山間部に立地している。平野部では、乱川扇状地扇中央部に位置する小林遺跡(東根市)が唯一の遺跡となる。同遺跡は縄文時代前期中葉(A地点:大木1～3式期)と中期後葉(B地点:大木9～10式期)の遺跡として著名であるが、1968年のA地点の調査で、山形押型文土器片が1点出土している(図12)。山形文(凸山4重, 1周2山)は、縦位回転で密に配した全面施文と思われ、帯状施文にはならない。早期前葉であるとすれば、山形盆地における縄文土器の最古の事例となるが、単品のみであり、その評価は保留する^(註10)。

早期の遺跡は、函郭から外れた山形盆地北端から尾花沢盆地の丘陵や段丘面に集中するため、山形盆地内は散漫な分布状況にある。その多くの遺跡では早期後葉の条痕文系土器が出土しているが、山形市域では前記したにひやく寺遺跡で三戸式・田戸下層式並行の土器、山間部に位置する新山A遺跡と関沢B遺跡で田戸下層式並行の土器、天童市域ではかくまくぼ遺跡で田戸下層～子母口式並行の土器が出土している。

草創期～早期にかけては気候の温暖化が急激に進んでおり、盆地内の地形形成が安定していなかった可能性が考えられる。盆地底に完新世の堆積層が厚く堆積していることから、土砂の埋積作用が進行中で、一定の場所に定着しない遊動的な生活様式と相俟って、平野部に集落

を営む状況にはなかったと考えられる。

なお2010年の高瀬山遺跡の発掘調査で、高低差1～1.2mの活断層（高瀬山活断層）が確認され、土壌サンプルから測定された発生年代が、7,600年前（5,722～5,483calBC）と推定されている（今ほか2012:45頁）。早期後葉条痕文系土器群の時期に相当し、盆地内では該期に大規模な地震が発生したことになる。

（2）縄文時代前期の遺跡動態

縄文時代前期は、近年の炭素14年代法を用いた年代測定研究によると、較正年代が7,050～5,415年前（5,100～3,465calBC）の1,635年間と推定され、従来の年代観（約1,000年間）よりも600年ほど長期にわたっていた可能性が指摘されている（小林謙一2017）。この時期は完新世でも最も温暖な気候最温暖期（ヒブシサーマル期）で、現在よりも年平均で1～2℃ほど気温が高く、湿潤であったと推定されている。また海水面も現在より2～3mほど高くなり、海水が湾内の奥深くまで浸入した「縄文海進」の時期に相当し、そのピークは前期初頭～前葉にあったと想定されている。温暖な気候を背景に生活が安定し、それまでの遊動的な生活様式から定住的な生活に転換したと考えられ、大規模な集落が成立し、フラスコ状土坑のような貯蔵施設が発達し、集団墓地も形成されるようになり、縄文文化を構成した基盤が確立した時期と見なすことができる。

図13には38遺跡をプロットした。前期初頭上川名Ⅱ式期は、^{うしろざわ}後沢遺跡（河北町）や八ヶ森・八ヶ森南・^{うわの たかさわ うわだいら}新山A・上野・高沢・上平遺跡（山形市）のように山間部に遺跡形成が認められ、その多くは早期末葉から継続した小規模遺跡である。山形県内では前期初頭に遺跡数が多くなり、前葉から後葉にかけて減少し、末葉大木6式期に再び増加するが、山形盆地でも同様に推移している。

前期前葉になると、開析された扇状地（乱川・立谷川扇状地）で遺跡の形成が明確となる。^{かみあらや}上荒谷遺跡（天童市）は立谷川扇状地扇頂部付近の段丘面に立地した大木1～3式期の遺跡で、1959年に山形大学、1995年に山形県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施されている。県内最古となる前期前半期の土偶が採集されており^{註11}、前者の調査では安山岩の礫を組み合わせた石器製作跡、後者の調査では大木3式期の竪穴住居跡

（ST1）と大木2a式期の土坑墓（SK23）が検出されている（須賀井・高桑1996）。また立谷川を挟んだ南西方1.2kmの扇状地には、大森A（別称齊当）遺跡（山形市）が立地している^{註12}。同遺跡は安孫子昭二氏によって土器が採集され、保角里志氏が紹介しており（保角1977）、大木2b～3式を主体とする。上荒谷遺跡よりも継続期間が短い、両遺跡を併せると、前期前葉～後葉にかけて立谷川扇状地の扇頂部付近に有力な地域圏が形成されていたことになろう。

乱川扇状地では、扇央部北寄りの段丘面に小林遺跡（東根市）が立地している。同遺跡は1959年に用水路工事で発見され、1968・1974・1975年に発掘調査が実施されている。前期は大木1～3式期の遺跡となっており、前出の上荒谷遺跡と並存の関係にあった。住居跡が3棟検出されているが、その内の1棟（2号住居跡）は、長軸9.9m、短軸4.5mの大型住居跡（大木2a～2b式期）で、長軸線上に地床炉4基が並び、2回の建て替えの痕跡が認められた（佐藤鎮雄ほか1976）。大型住居跡が検出された同遺跡は、山形盆地北部の拠点集落に位置づけられ、この時期には盆地内の扇状地面が安定していたと考えられる。

山形盆地南端の丘陵上に位置する坂ノ上遺跡（山形市）でも、2001年の山形県埋蔵文化財センターの発掘調査で、大木2b式期の大型竪穴住居跡（ST21）が検出されている（伊藤・渡辺2006）。同住居は長軸18.6m、短軸6.1mの超大型で、長軸線上に地床炉7基が並び、2回の建て替えの痕跡が認められた。住居内からは剥片類が多く出土しており、その他に同時期と思われる小型住居跡も検出されている。遺跡全体では723点の縄文土器が出土したものの摩耗が著しく、文様判別が可能な土器は少ないが、概ね大木2b式に比定され、同式の単純遺跡と見なされる。同遺跡は大型住居跡の存在から、盆地南端の有力な集落となっており、石器製作に関わっていたと推定される。

低湿地遺跡で有名な^{おんだし}押出遺跡（高島町）の前期後葉大木4式期の東北中・南部は、遺跡数が最も少ない時期に相当するが、山形盆地では立谷川扇状地の扇端部に位置する柏木遺跡（天童市）が該当する。同遺跡では地表面下60～70cmから大木4式土器が出土している（赤塚ほか1978）。しかし別の文献（赤塚ほか1981:106頁）

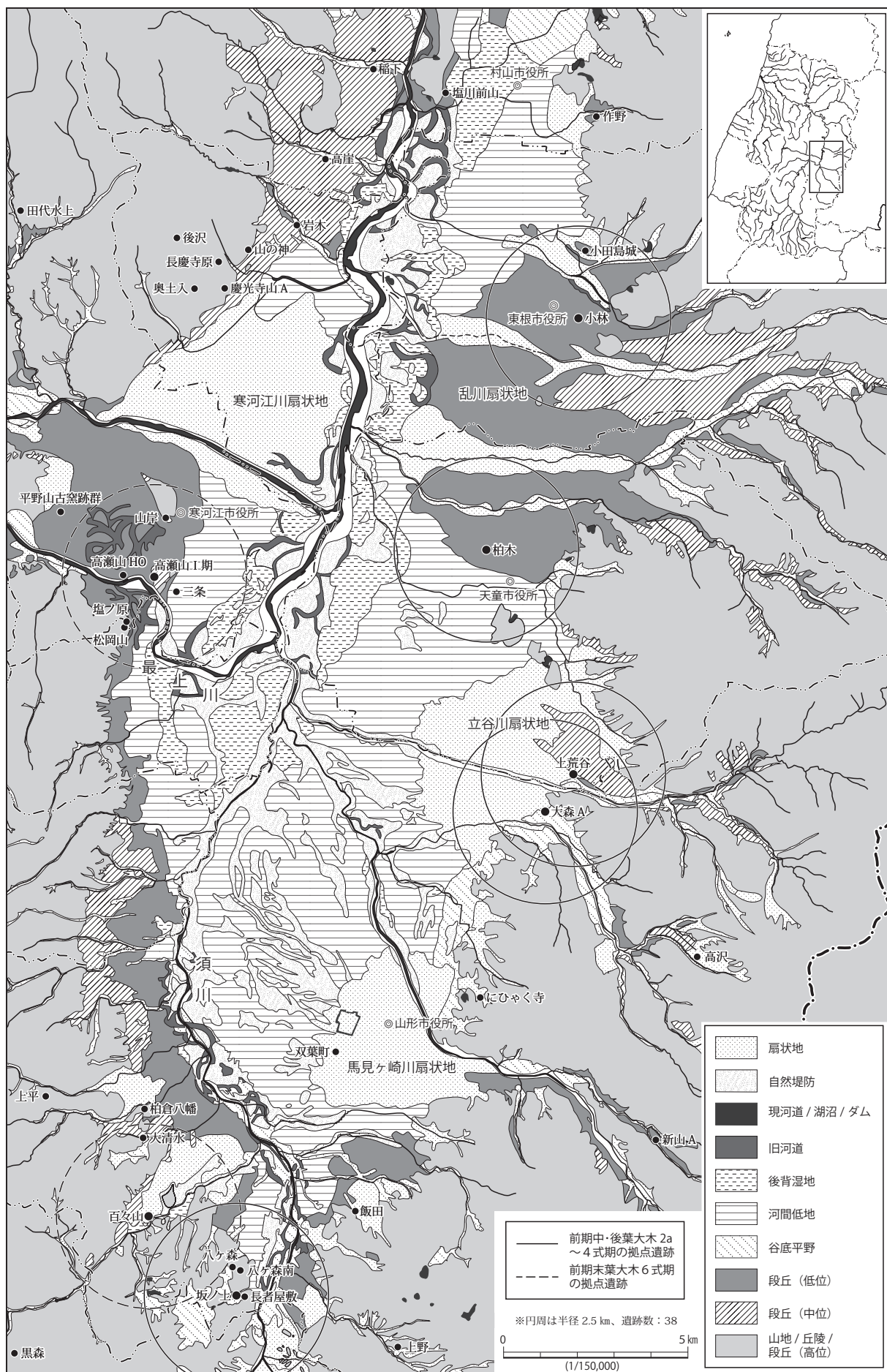


図 13 山形盆地の地形分類と縄文時代前期の遺跡分布

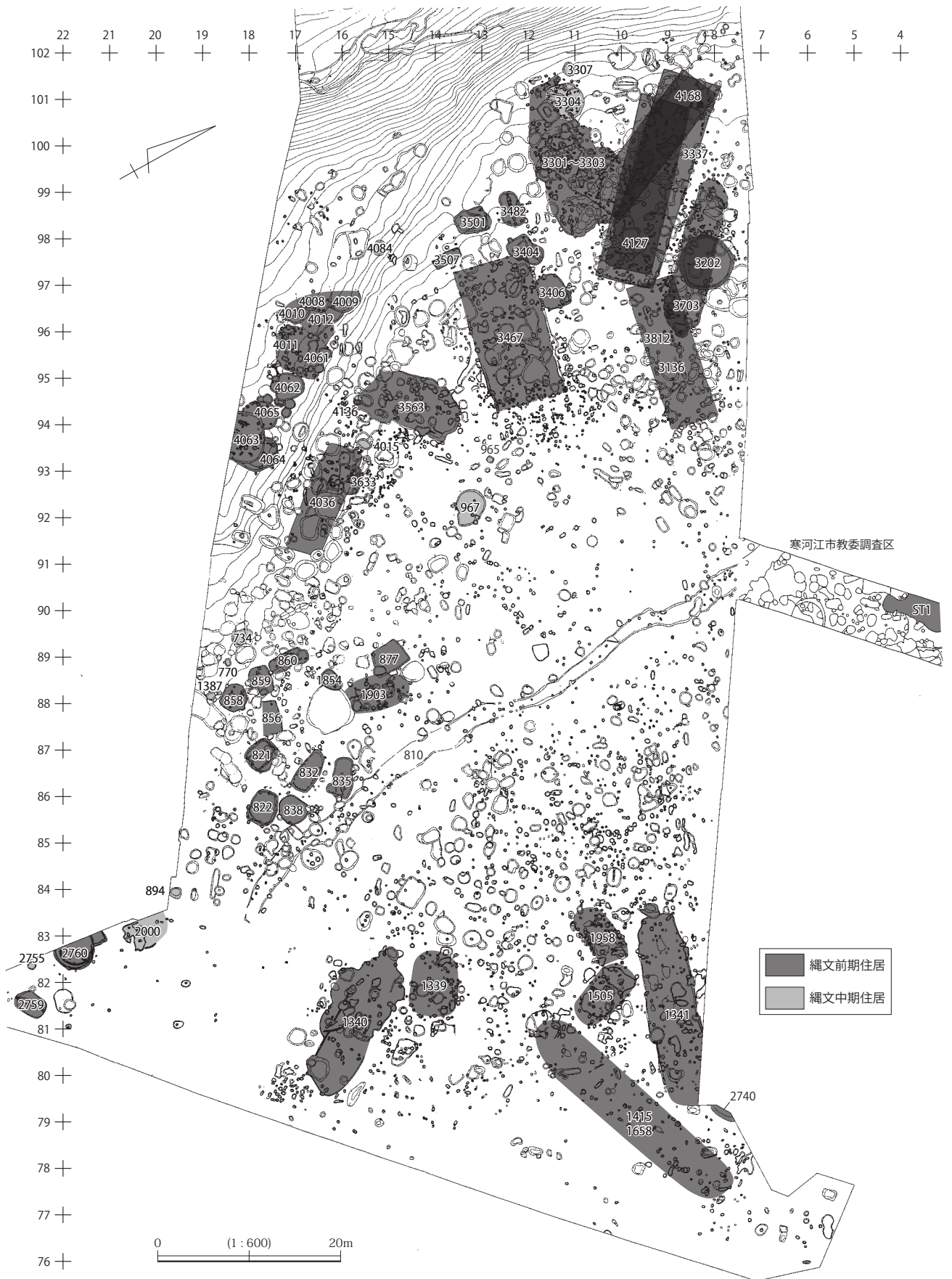


図 14 山形県寒河江市高瀬山遺跡の縄文時代前期の集落構成図

では、貯水池工事で地表下3mから土器・木炭片が出土したと紹介されており、部分的に河道跡が存し泥炭層を形成していた可能性も考えられる。また盆地北西部の稲^{いな}下^{くだし}(別称東原)遺跡(村山市)では、1961年の調査で大木5a式期の住居と思われる遺構(炉跡・柱穴)が検出されている(柏倉編1969)。

前期末葉大木6式期(厳密には大木5b～6式期)になって、山形盆地内に大規模集落が出現した。高瀬山遺跡(寒河江市)は、山形盆地西端の最上川左岸の河成段丘に立地した大規模な環状集落であり、同調査区(7・8区)は1995～1997年に山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査された(齊藤主税ほか2004)。遺構は直径120mの範囲内に住居群が配置され、その内側に土坑群が形成され、更に中央の直径30mの範囲は遺構密度が希薄となる(図14)。集落は大木5b～6式3期にかけて形成されており、竪穴住居は3～5mの標準的な住居(円形・楕円形・隅丸方形)37棟と、長軸15～20m超の大型住居12棟が検出されている。大型住居の多くは主軸を放射状にして配列されるが、主軸が円周方向を向く例もあり、大型住居同士の重複も認められる。小型住居には壁柱穴を巡らすものや不規則な柱穴のものがあ、り、地床炉を持つ例は少なく、床面中央の溝状の掘り込みを特徴とする。また斜面部の住居を除くと小型住居同士の切り合いは少なく、大型住居に切られた例が見受けられる。

高瀬山遺跡では大木5b～6式3期までの土器が多数出土している。しかし後続する大木6式4・5期や中期初頭(五領ヶ台I・II式並行)の明確な土器は見当たらず、大木6式3期をもって大規模集落が終焉したことが指摘される(小林2014)。それ以降調査区域外に集落を移した可能性も否定できないが、集落の再編成を迫る事態が生じたのであろう。庄内地方の吹浦遺跡(遊佐町)では、大木6式4・5期に北陸方面の影響を強く受けた様相が観察され、大きな転換期にあったと指摘されている(今村2010)。内陸部でも大木6式4期から中期初頭にかけた時期は衰退期に当たり、遺跡数が激減しており、増加に転じたのは中期前葉大木7b式期からである。

山形盆地の大木6式期の遺跡としては、高瀬山遺跡に近接した三条遺跡(寒河江市)^(註13)の他に、山形市域

では双葉町・飯田・長者屋敷・八ヶ森・百々山・上平・柏倉八幡遺跡が存している。平野部から山間部までの広い範囲に展開するが、殆どが大木6式前半期と思われ、特に百々山遺跡では大木6式2期の完形の長胴形土器が採集されており(佐々木1995)、盆地南部の中心的な集落であったと考えられる。大木6式4期から大木7a式期にかけては、遺跡が小規模化し減少するが、このような時期に馬見ヶ崎川扇状地の扇端部(双葉町・城南町遺跡)で生活の営みが開始されたことになる。拠点的な大規模集落が消失し、小規模集団による分散した居住システムに転換したことで、これまで生活の対象にならなかった新天地にも進出を果たしたのであろう。

(3) 縄文時代中期の遺跡動態

縄文時代中期は、近年の炭素14年代法を用いた年代測定研究によると、較正年代が5,415～4,490年前(3,465～2,540calBC)の925年間と推定されている(小林謙一2017)。各地で大規模な集落が形成され、遺跡数もピークを迎え人口が増大するなど、縄文時代を通じて最も安定し、繁栄を極めた時期と評価されている。しかし中期初頭は遺跡数が極めて少なく、遺跡数の増加と集落規模の拡大が観察されるのは大木7b式期以降で、遺跡数は中葉大木8b式期にピークを迎え、同9式期は減少に転じ、同10式期は更に減少する。

図15には129遺跡をプロットしたが、前期よりも遺跡の纏まりが明確になっており、菅原哲文氏は山形盆地の縄文時代中期を以下の6つの遺跡群に大別している(菅原2014b)。

- ① 山形盆地南西部(須川左岸・西側丘陵地)
- ② 馬見ヶ崎川流域(馬見ヶ崎川扇状地・須川右岸)
- ③ 山形盆地東部(立谷川扇状地・乱川扇状地)
- ④ 寒河江川流域
- ⑤ 山形盆地西部(山形盆地西部の寒河江周辺の地域)
- ⑥ 葉山南東麓(河北町内の古^{ふる}佐川・樽石川流域)

図15では④寒河江川流域が欠落するが、円周を描出した箇所がほぼ対応する。①は盆地南西部の須川左岸の本沢川扇状地と白鷹丘陵山麓部、②は須川右岸の盆地南東部、③は盆地東部の立谷川扇状地と乱川扇状地を合わせた広い範囲、⑤は最上川が盆地に流れ込む谷口部の段丘面、⑥は葉山南東麓と盆地北西部の段丘面が相当する。但しこれ等の遺跡群が顕在化するの、は、中期中葉大

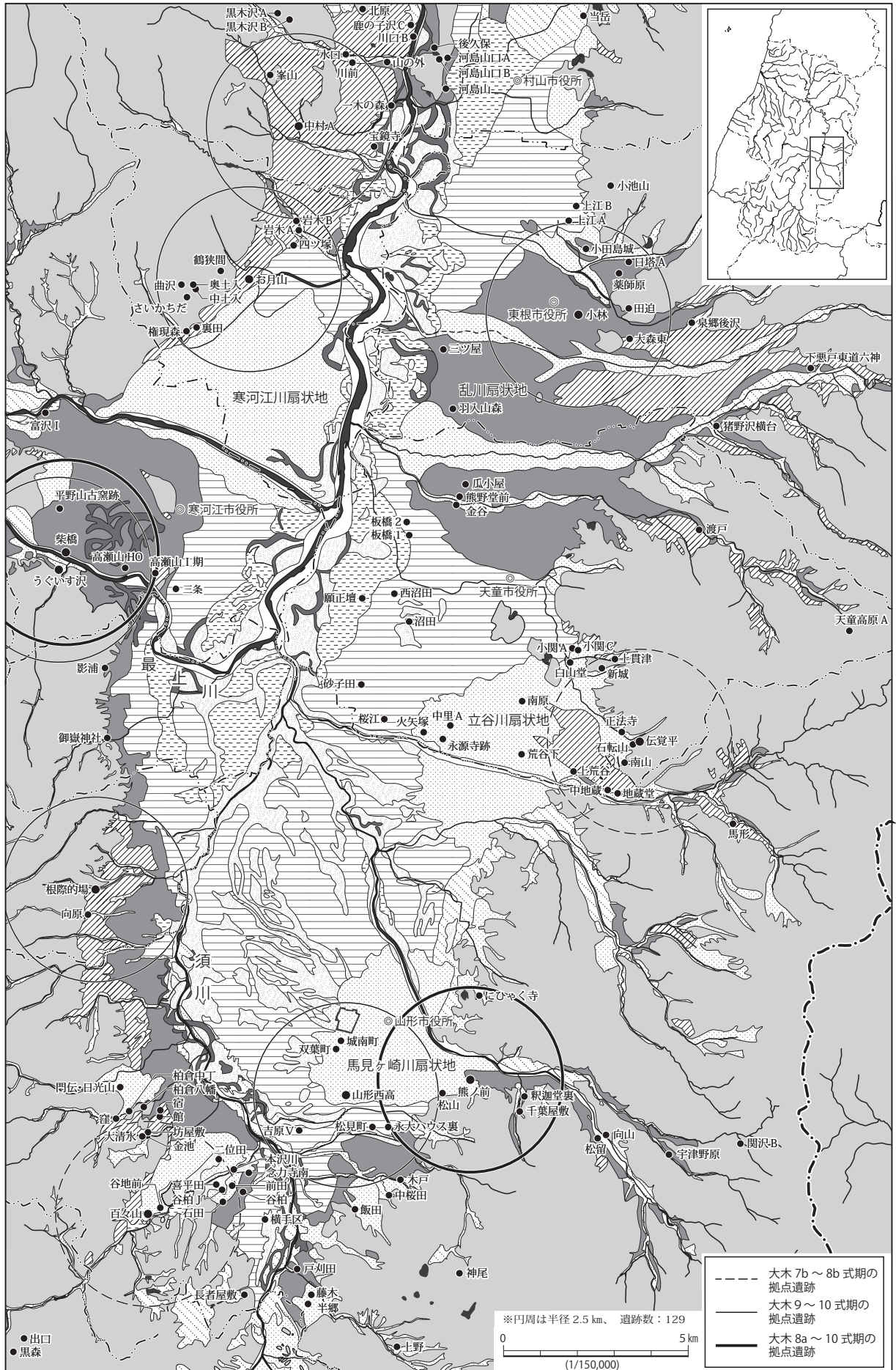


図 15 山形盆地の地形分類と縄文時代中期の遺跡分布

木 8a 式期以降で、同 7b 式期までは明確とは言いがたい。

中期初頭では、乱川扇状地南側の前縁部の板橋 1・板橋 2 遺跡(天童市)が特筆される。同遺跡は隣接しており、1998・1999 年に山形県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施された(齋藤健ほか 2004)。両遺跡とも遺構は認められていないが、板橋 1 遺跡では調査区南側 E 区のグライ化した砂層から、五領ヶ台 I 式並行や糠塚系の土器が纏まって出土した。また北側の板橋 2 遺跡でも調査区南側の古墳時代遺構面より下位のグライ化した包含層から、五領ヶ台 I～II 式並行の土器が出土した。最上川氾濫原に接した洪水の常襲地帯であるが、中期初頭に低地部での生活を開始したことを示す重要な成果となっている。

中期前葉大木 7b 式期は、本沢川扇状地扇頂部の百々山遺跡が山形盆地を代表する遺跡となる。同遺跡は白鷹丘陵が山形盆地に接する傾斜変換線上に立地し、1965 年の桑木の改植作業で、多量の遺物が掘り出されたが、その大半が大木 7b 式土器であった。大木 6～8b 式期の遺跡とされているが、主体は大木 7b 式期にあり、同式の完形土器の他に西ノ前型土偶や三脚土製品、三脚石器、石棒等も採集されており、遺物の量や内容から、山形盆地南部の拠点集落に位置づけられる。

中期中葉大木 8a 式期になると、上記した遺跡群が明確となる。以下遺跡群毎に中葉～後葉の様相を略述するが、②馬見ヶ崎川流域は既に詳述したので割愛した。

①山形盆地南東部の中期中葉では、本沢川扇状地の百々山遺跡の他に、^{とがみやま}富神山の麓の柏倉地区に金池遺跡等の纏まりが指摘される。更に凶郭外であるが、白鷹丘陵中腹の標高 680 m の小盆地には、^{たけぼらむかいさか}嶽原向坂(別称嶽原)遺跡(山辺町)が大木 7b～9 式期の拠点集落として位置している。中期後葉では盆地西縁の根際的場遺跡(山辺町)で、大木 10(古)～同 10(新)式期の竪穴住居跡が 4 棟検出されている(山形県教委編 2006)。本沢川扇状地扇端部の谷柏地区では、二位田遺跡や石田遺跡が大木 9・10 式期の遺跡となっており、後期前葉～中葉の核心地域となる下地が形成されていた。

③山形盆地東部の乱川扇状地では、中期の遺跡として小林遺跡(後述)や猪野沢横台遺跡が位置するが、大木 9・10 式期の遺跡であり、中期中葉の有力遺跡は指摘できない。立谷川扇状地扇側の山麓線には、^{でんがくだいら}伝覚平遺跡(天

童市)を中心に中期の小規模遺跡が点在する。いずれも詳細は明らかでないが、大木 8a～9 式期に位置づけられる^(註 14)。

⑤山形盆地西部は、最上川が盆地に流入する谷口部で段丘地形が発達するが、最上川左岸には高瀬山遺跡(寒河江市)と柴橋遺跡(寒河江市)が位置している。高瀬山遺跡(高瀬山 1 期・HO 地区・SA 地区)では大木 8a～10 式期の住居が 16 棟検出されているが、大木 8a 式(HO 地区 10 区 6 号住)と同 8b 式(1 期 ST1060)の住居が各 1 棟検出されたのみで、主体は大木 10(古・中)式期にある。柴橋遺跡では大木 10(古・中)式期の住居 9 棟と共に、大木 8b 式の長方形大型住居 1 棟が検出されている。長方形住居(ST10)の長軸の一端は未検出であるが、長軸の残存長 8.2 m、短軸 4.2 m を測り、4 対の柱穴配列と地床炉 3 基の配列が認められた。また深さ 3 m 超のフラスコ状土坑(SK 1)も検出され、同式期に帰属されている。掘方のしっかりした大型住居であることから、同遺跡が大木 8b 式期の拠点集落になっていた可能性が高い。また柴橋遺跡の対岸のうぐい沢遺跡(寒河江市)では大木 9・10 式期の住居跡 8 棟、^{むかいぼら}最上川をやや遡った凶郭外の向原遺跡(寒河江市)でも、大木 10 式期の複式炉が検出されている。該域には中期中葉～後葉にかけて有力な地域圏が形成されており、特に後葉は石刃技法を発達させた「頁岩原産地遺跡」群となっていた。

⑥葉山南麓では、詳細な内容は明らかでないが、お月山遺跡(河北町)が中期の有力遺跡となる。同遺跡は古佐川沿いの段丘面に位置した大木 7b～10 式期の遺跡で、1953 年の調査で石囲炉(複式炉?)を持つ住居跡が検出されている。葉山を源流とした千座川沿いには、中村 A 遺跡(村山市)が位置している(名和・渋谷 1983)。大木 10 式期の住居跡が 9 棟検出され、関東地方の加曾利 E IV 式の埋設土器(EU204)も出土している(図 16)。中期中葉大木 8a 式～後期中葉宝ヶ峯 2 式の土器が出土しており、継続期間の長い遺跡となっているが、住居跡は概ね大木 10 式期で、中期末葉の山形盆地北西端の拠点集落であったと思われる。

山形盆地では、中期になると沖積低地への遺跡の進出が顕在化する。中期初頭の板橋 1 遺跡・板橋 2 遺跡については前述したが、立谷川扇状地前縁部の^{すなごだ}砂子田遺跡(天

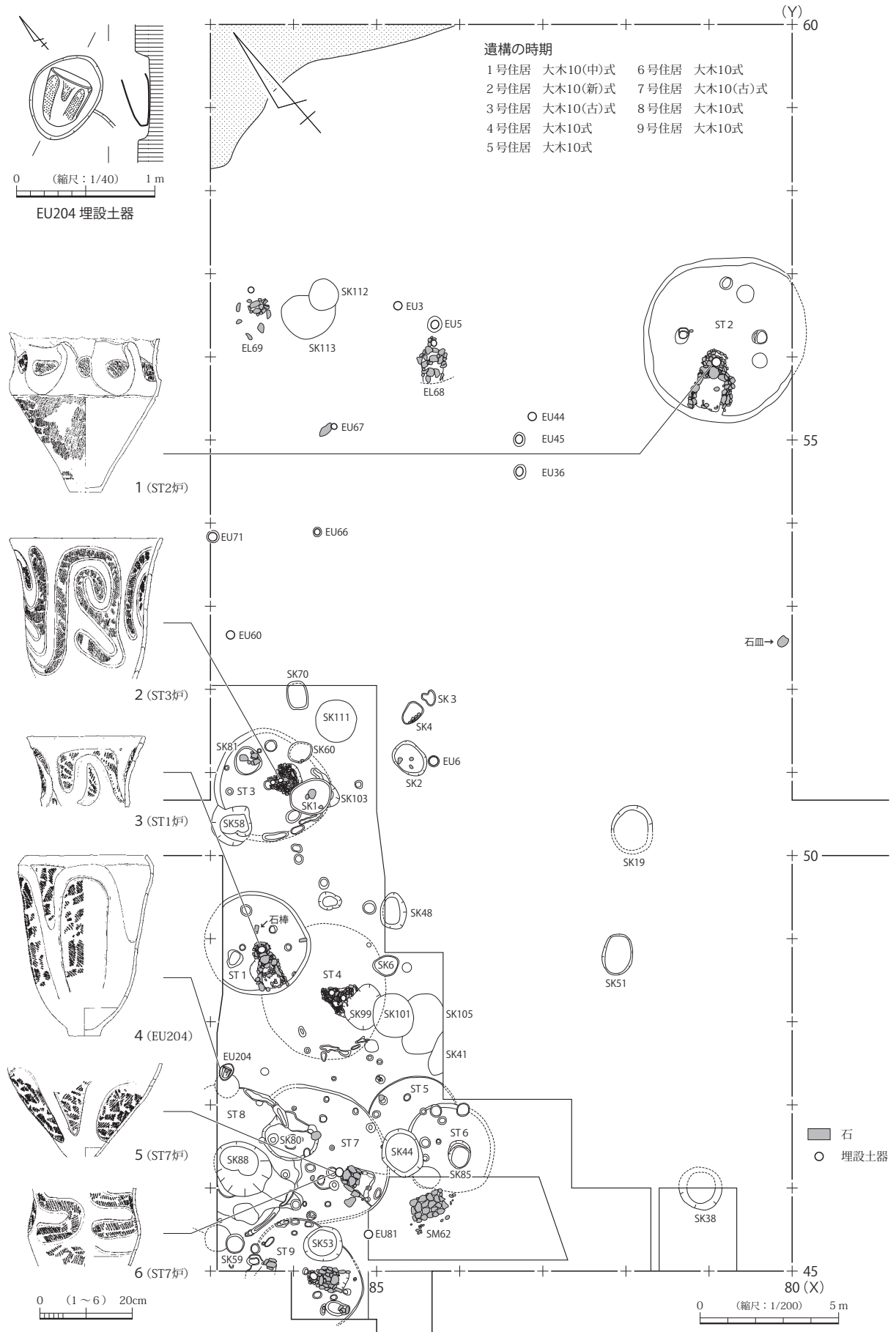


図 16 山形県村山市中村A遺跡の集落構成

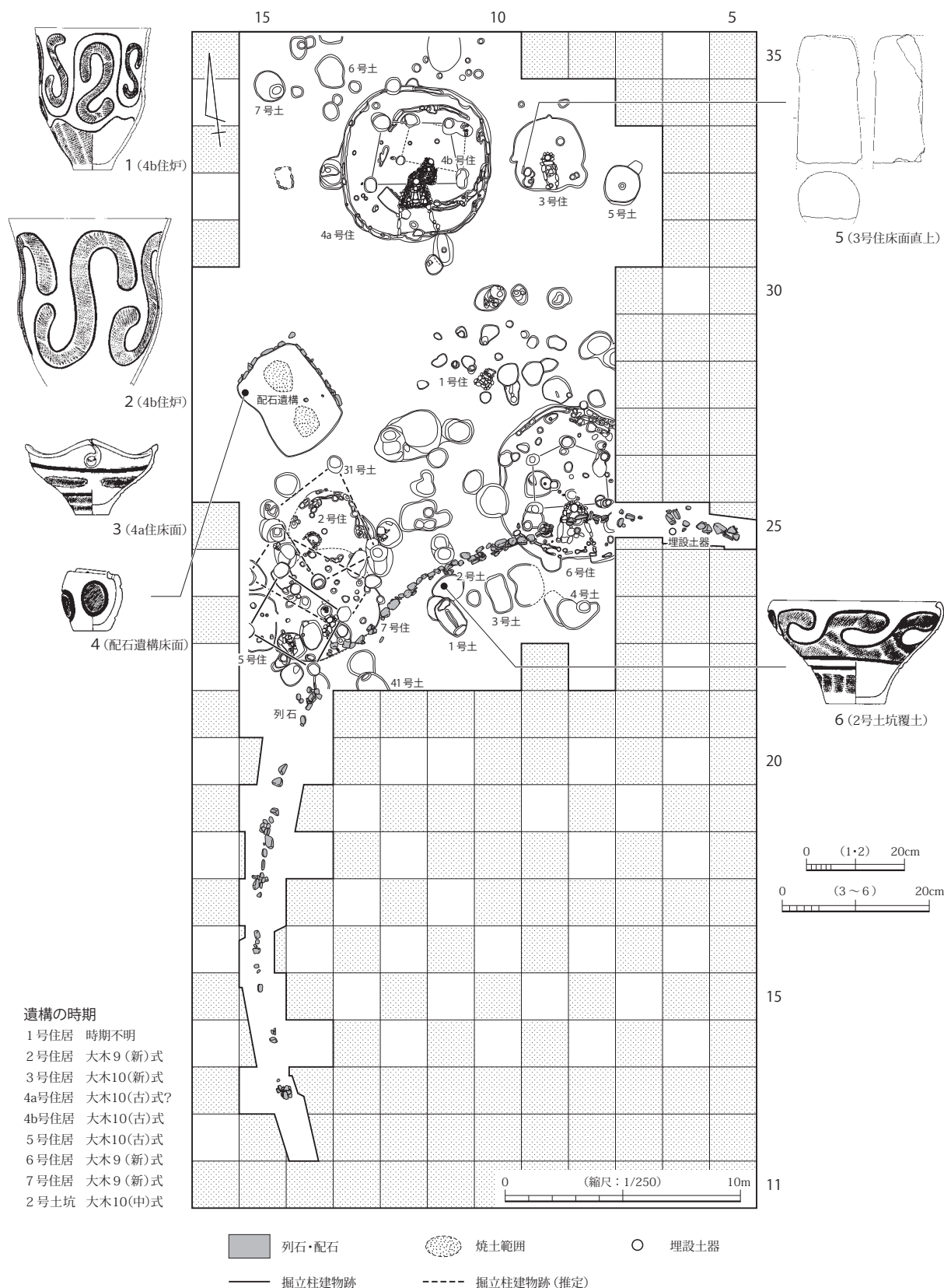


図 17 山形県東根市小林遺跡(縄文時代中期)の集落構成図

童市)では、大木 8a・8b 式の土器が地山面から出土している。その他にも天童市域には前縁部に願正壇遺跡(大木 8b~9 式)と沼田遺跡(大木 7b・9 式)、乱川扇状

地の扇端部には熊野堂前遺跡(大木 8a・8b 式)と瓜小屋遺跡(大木 9 式)が位置しており、いずれも大木 7b~9 式期の遺跡となっている。低地部の微高地にも中期

の小規模な集落が形成されていたと考えられるが、大木10式期まで継続した遺跡は少ないようである。

最後に、小林遺跡の列石遺構に触れておきたい。小林遺跡B地点では、住居跡8棟（大木9～10式期）、土坑48基、方形の配石遺構、弧状の列石遺構が検出されている（図17）。配石遺構は長軸4.4m、短軸3mの浅い掘方（10～16cm）を持ち、北辺と東辺に30～60cm大の石が配列されていた。遺構内には溝・柱穴等の付属施設は認められず、底面から有孔小型土器（大木9（新）～10（古）式）が出土し、焼土が2ヶ所で集中していた。列石遺構は長軸30m、幅20～100cmの規模で、30～60cm大の石が弧状に配列され、直径45mの円周を見立てた場合、その1/3の円弧に相当する。列石下部の施設は判然としないが、大木9（新）式期の住居（6・7号住）の覆土上面に構築され、また北西側の方形の配石遺構が、列石遺構に直交するように配置されることから、両遺構は関連を有していたと想定される。列石遺構の配列は両端で不規則になるが、中央付近は1.5～2.5mの間隔で扁平礫を横位、方形礫を縦位の状態で規則的に組み合わせている。部分的な調査のため列石の全容は明かでないが、外側の方形配石遺構とセットになった祭祀的な施設で、列石に沿って埋設土器1基が検出され、土坑墓（1・3号土坑等）も認められることから、列石周辺が墓域エリアになっていた可能性が推定される。また報告書に指摘はないが、列石遺構の外縁に4本柱の掘立柱建物跡群が確認できる。その性格は判然としないが、埋葬に関連した施設であったと考えられる。

（4）縄文時代後期の遺跡動態

縄文時代後期は、近年の炭素14年代法を用いた年代測定研究によると、較正年代が4,490～3,220年前（2,540～1,270calBC）の1,270年間と推定され、従来の年代観（約1,000年間）よりも四半世紀ほど長期にわたっていた可能性が指摘されている（小林謙一2017：176頁）。県内では、中期末葉から継続する遺跡が殆ど見られず、中期と後期の間に画期が存しており、後期初頭の遺跡も非常に少なく、遺跡数が増加するのは後期前葉（南境2式期）以降である。後期は磨消縄文で装飾された精製の土器に特徴付けられ、器種が多様化し、土偶等の精神文化を示す多彩な遺物類が製作され、また環状列石等の大規模遺構が造営されるなど、文化的に

成熟し、社会の構成が複雑化した様相が観察される。しかし一律に安定して推移したのではなく、東南北半では宝ヶ峯2式期をピークに後半期には遺跡数が急減しており、繁栄と衰退の経過を辿ったと考えられる。

図18には、縄文後期73遺跡をプロットした。山麓部や扇頂部に主要な遺跡が分布するが、乱川扇状地と立谷川扇状地の前縁部にも拠点となる集落が現れる。後期初頭榿式（称名寺式並行）期～後期前葉南境1式（堀之内1式並行）期までの遺跡は少なく、南境2式（堀之内2式並行）期～宝ヶ峯2式（加曾利B2式並行）期にかけて遺跡数が多くなる。北から中村A遺跡（村山市）、渡戸遺跡（天童市）、高瀬山遺跡（寒河江市）、高嶺東遺跡（天童市）、窪遺跡（山形市）、前田遺跡（山形市）、上野遺跡（山形市）が主要遺跡に位置づけられ、図18にはそれ等を中心に実線で半径2.5kmの円周を描出している。

山形市域の前田遺跡と上野遺跡について詳細は明かでないが、前者は後期前葉～中葉主体で谷柏地区の本沢川扇状地扇端部、後者は後期中葉主体で蔵王山系西麓の丘陵地帯に位置している。山形盆地南西縁の柏倉地区の窪遺跡では、弧状の列石遺構が検出されている（佐藤正俊ほか1981）。同遺跡は1977年に山形県教育委員会によって発掘調査され、南境1～宝ヶ峯2式の土器が出土したが、弧状列石遺構（SM4）と集石遺構（SM1～3）が検出されている（図19）。列石遺構は一部を確認しただけで、環状となるかは定かでないが、一辺約40m、幅0.8～1.5mの隅丸方形の一辺を切り取った構成で、両端は屈曲気味にカーブを描く。河原石（石皿1点）を雑然と配置しただけで、下部施設は不明で、構築時期は後期中葉宝ヶ峯1～同2式期と推定されている。列石の東側（内側？）には、長軸3.5～4.5m、短軸2.2～3.3mの楕円形の集石遺構が3基検出され、その一部（SM3）に15～30cmの礫が二重に配列されていた。これ等の集石の下位から掘方等の施設は確認できず、集石の性格は判然としないが、列石に付随した施設と考えられる。同遺跡の列石遺構は山形盆地における後期の唯一の事例であり、眼前に円錐形をなす富神山（標高402.2m）が聳え立っていることを付言しておきたい。

高瀬山遺跡は盆地中央西端の最上川左岸に位置するが、1997・1998年の山形県埋蔵文化財センターによ

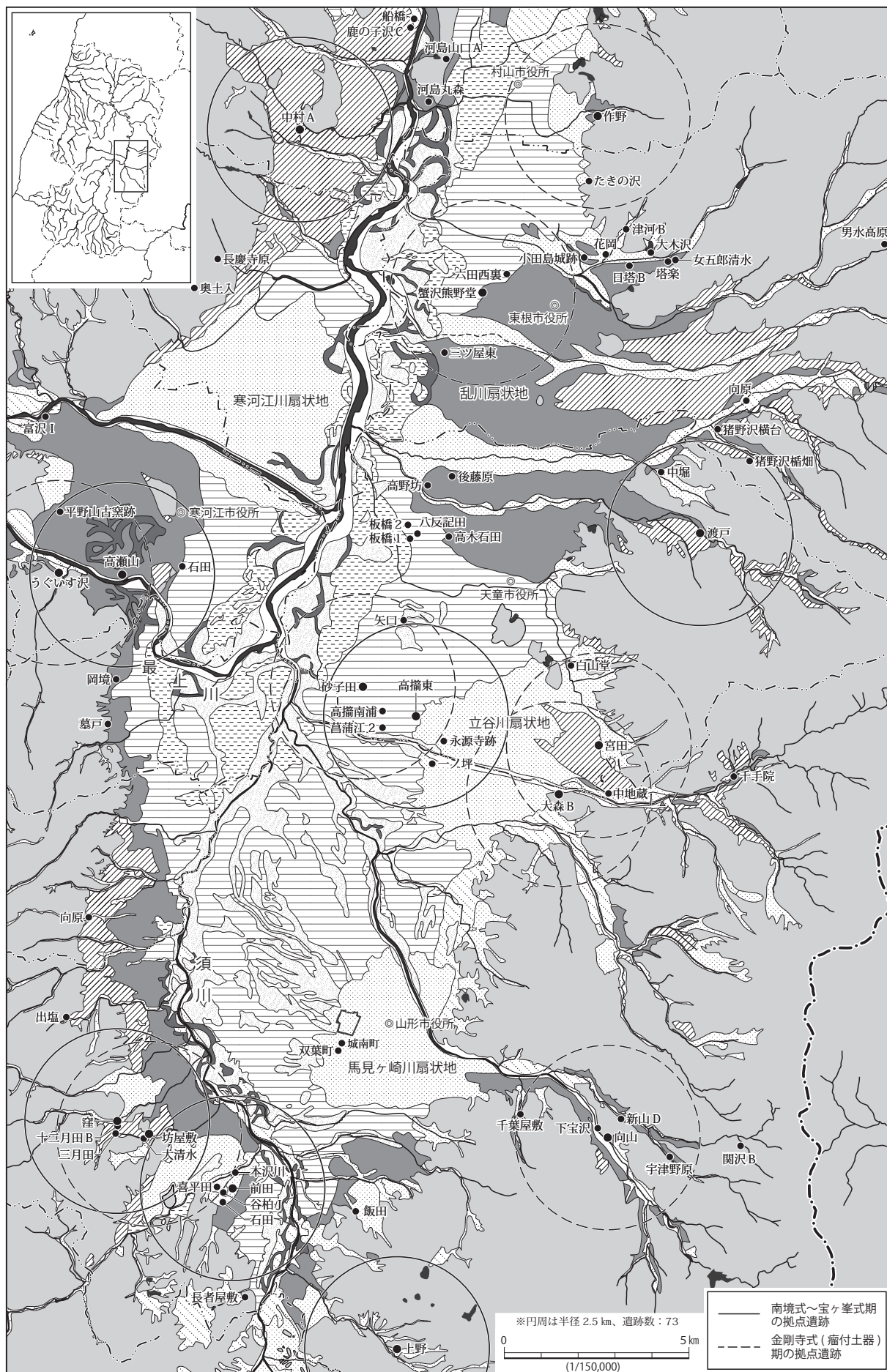


図 18 山形盆地の地形分類と縄文時代後期の遺跡分布

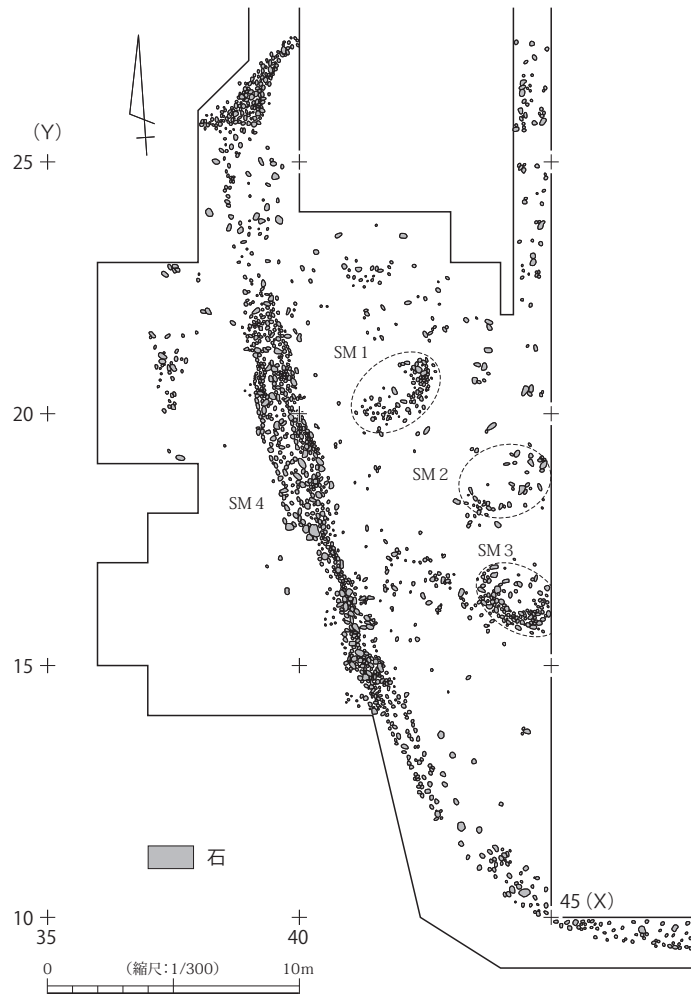


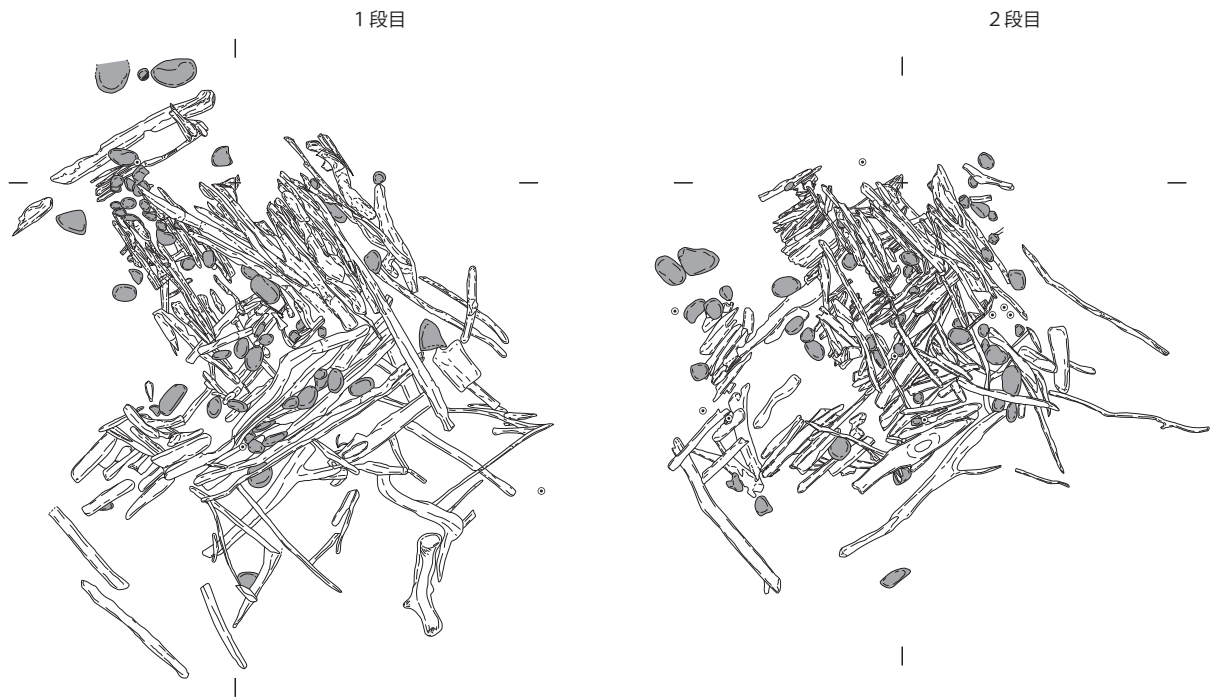
図 19 山形県山形市窪遺跡の列石遺構

る発掘調査で、最上川に接した低位段丘面から後期中葉（宝ヶ峯 1 式期）～晩期後葉（大洞 A2 式期）の水場遺構、中位段丘面からは後期中葉宝ヶ峯 2 式期の集落が検出されている（小林編 2005）。水場遺構は 5 基検出され、構築時期で見ると、宝ヶ峯 1 式期（後期 2 号木組遺構）、宝ヶ峯 2 式期（後期 1 号木組遺構）、大洞 B1～C2 式期（晩期石組遺構）、大洞 BC～C1 式期（晩期木組遺構）、大洞 A2 式期（西調査区湧水点木組遺構）に相当する。そのうち前三者の遺構は、同一地点に木組施設が構築されており、下層より「後期 2 号木組遺構→後期 1 号木組遺構→晩期石組遺構」の順で重層していた（図 20）。木組施設の周囲からはトチノキの種子が多量に出土し、最下層の後期 2 号木組遺構に明確な流水構造が確認されたことから、これらは水さらしに関わる作業施設であったと推定され、後期中葉におけるトチノキの積極的な利用が明らかになっている。集落は水場遺構の東方 150 m の中位段丘面に営まれており、宝ヶ峯 2 式期を主体に 15

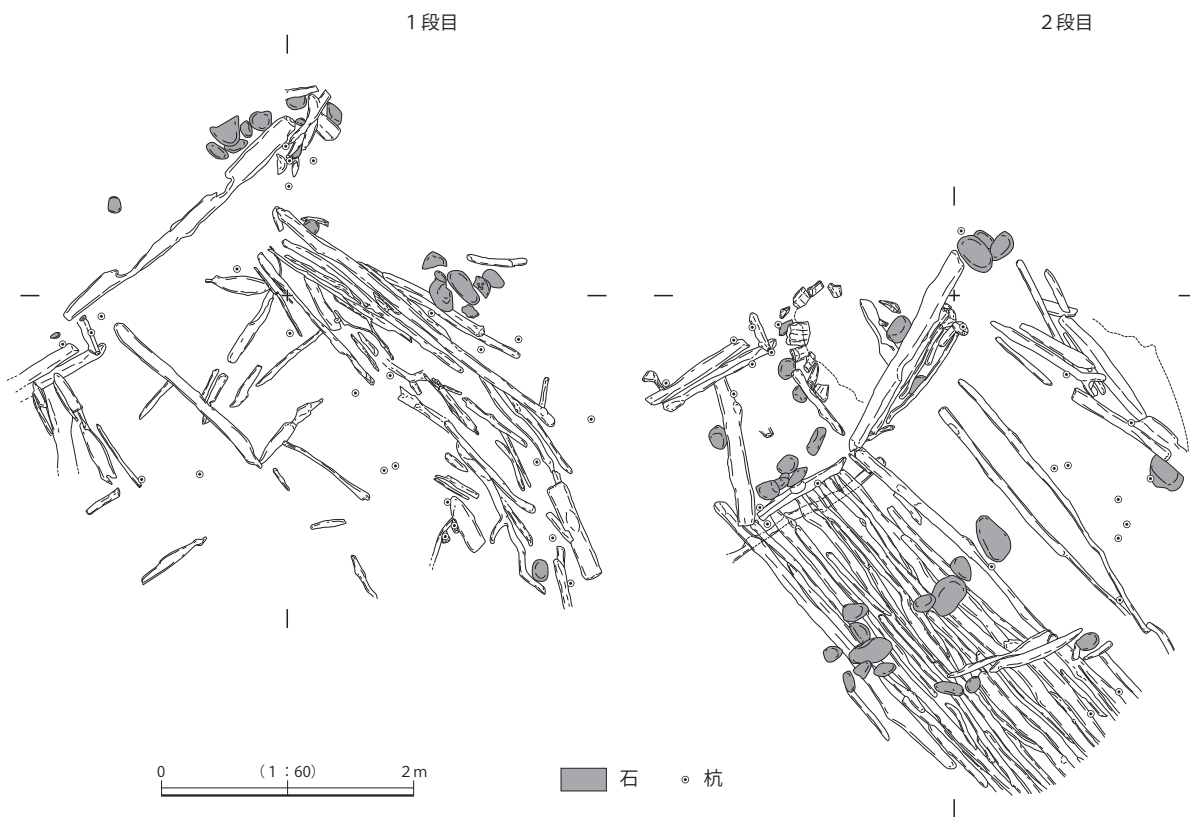
棟以上の竪穴住居で構成され、居住域に隣接して墓壙と思われる土坑と配石遺構も検出されている。作業場と居住域は明確に区別されていたが、墓域と居住域は集落内で共存していたことを示している。

高瀬山遺跡の水場遺構（後期 2 号木組遺構 2 段）の形成は、宝ヶ峯 1 式期に始まる。同式期に土砂の流入により一旦は埋没したが、その上面に木組施設（同 1 段）が再度構築され、その後宝ヶ峯 2 式期になって、後期 1 号木組遺構が二時期にわたり構築・使用された。その後の後期中葉以降は泥炭層が厚く形成される状況にあり、後期末葉まで水場や台地上での活動は低調となるが、晩期になって再び木組施設が構築・使用された。水場遺構の東側では、南境 2 式～宝ヶ峯 2 式期にかけて層厚 70～80 cm の遺物包含層が形成され、6 枚の文化層に区別されているが、該期に土砂の堆積を促した環境的要因と活発な人為的活動があったものと想定される。

高嶺東遺跡は立谷川扇状地の扇端部の湧水帯に立地



後期 1号木組遺構



後期 2号木組遺構

図 20 山形県寒河江市高瀬山遺跡 (HO地区) 縄文時代後期の木組遺構

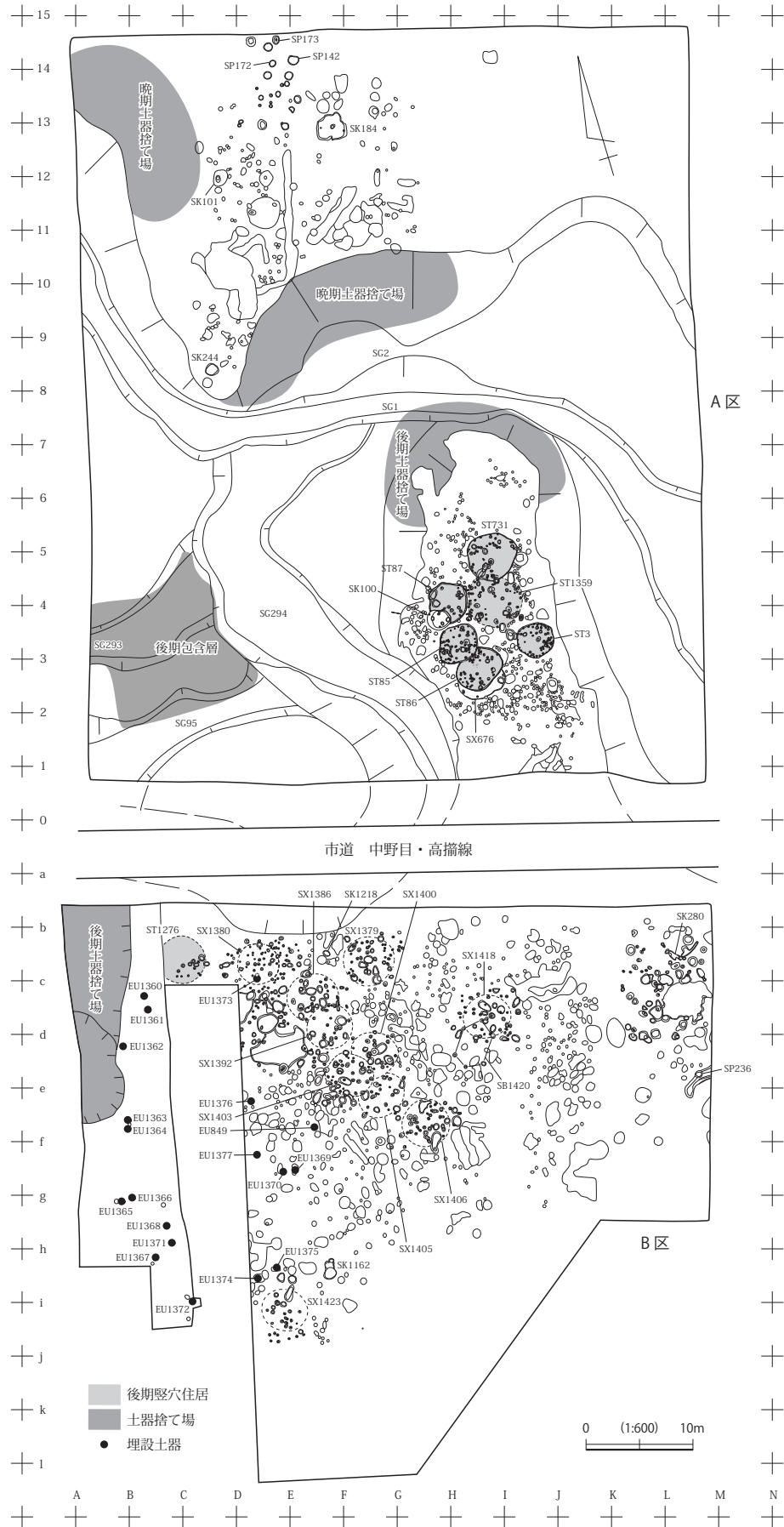


図 21 山形県天童市砂子田遺跡（縄文時代後期後葉・晩期後葉）の集落構成図

し、2015 年に隣接し一部重複した礼井戸遺跡^{れいいど}と併せて発掘調査が実施されており、本稿では両遺跡を包括して「高掬東遺跡」と総称した(渡邊ほか 2017)。同遺跡では、南境 1～宝ヶ峯 2 式期までの土器が出土したが、特に南区北東部で南境 2 式土器を主体とした遺物包含層 (V②層: 黒褐色・黄灰色粘土) が検出されている。住居跡は確認されていないが、土坑 19 基、ピット 122 基、埋設土器 4 基等が検出され、ピットには柱根(クリ材)が遺存した柱穴 6 基も含まれていた。遺物包含層は小河川跡(幅 5～7 m、深さ 50 cm 前後)に沿って約 10 m の範囲に広がっており、上面では被熱で赤化した焼け面が 2ヶ所検出され、周囲には多量の炭化物が分布していた。同遺跡は宝ヶ峯 2 式期で終焉を迎えており、北西方 1.5 km に位置する砂子田遺跡に引き継がれたようにも見受けられる。

渡戸遺跡は山形盆地の乱川扇状地南側の側扇、押切川左岸の段丘上に位置している。1995 年の山形県埋蔵文化財センターによる発掘調査で、南境 2～宝ヶ峯 2 式土器が出土したが、後期中葉宝ヶ峯 1～2 式に主体がある(山口・渡辺 1996)。旧河川跡脇に捨て場跡と礫を伴う土坑墓群が検出され、居住域は明確になっていないが、出土品の数量や内容から、山形盆地中央東側の拠点的な集落であったと考えられる。

宝ヶ峯 2 式期で遺跡が途絶し、同 3 式期の遺跡が極端に少なくなるのは、東北中・南部に通有の事象であるが、山形盆地においても同様の傾向が認められる。前記した渡戸遺跡と高掬東遺跡は宝ヶ峯 2 式期をもって一旦途絶え、高瀬山遺跡は規模を縮小しており、それに呼応したかのように沖積低地^{すなごだ}に砂子田遺跡(天童市)が出現する。

砂子田遺跡は山形盆地のほぼ中央の沖積低地に立地した、後期中葉宝ヶ峯 3 式～後期後葉金剛寺 2a 式期(瘤付土器第Ⅲ段階)までと、晩期後葉大洞 A2 式期の集落跡である(森谷ほか 2003)。1998・1999 年の 2ヶ年にわたって、山形県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、竪穴住居跡 7 棟、住居の可能性のある遺構 10 基、掘立柱建物跡 1 棟、埋設土器 19 基、土坑等が検出された(図 21)。居住域は沖積低地の微高地の限られたスペースに集中して営まれていたが、特に A 地区南側では金剛寺 1 式期(瘤付土器第Ⅱ段階)の住居跡が 6 棟検出された。また集落周縁の河道には土器捨て場が形

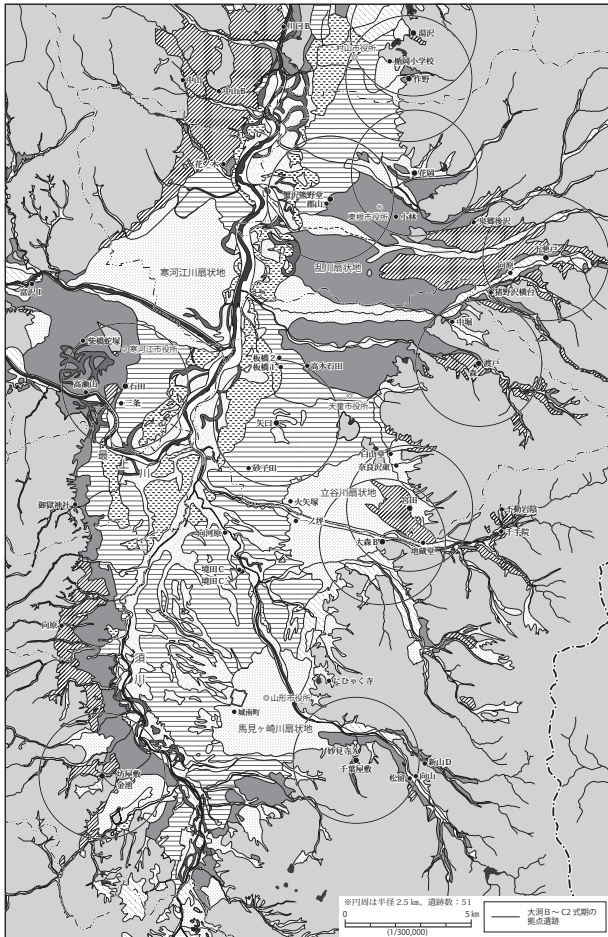
成されており、トチノキの種子と共に後期中葉～後葉の土器が多量に出土した。河道は頻繁に流路を変更しており、冠水の危機にさらされていたと推測されるが、同一地点に居住を繰り返したのは、豊富な水量を必要とした生活様式であったからと考えられる。河道からはトチノキの種子が多量出土しており、遺跡周囲でアク抜き処理が行われていたのであろう。同遺跡の主体は宝ヶ峯 3～金剛寺 1 式期(瘤付土器第Ⅱ段階)にあり、遺跡数が激しく減少した時期に相当する。その後大洞 A2 式期に再び興隆したが、その間は晩期初頭の大洞 B1 式土器が目につく程度で、低地部の主体が北方 2.2 km の矢口遺跡(天童市)の方に移ったと推定される。

後期後葉瘤付土器期になると、立谷川扇状地の扇頂部に宮田遺跡^{みやでん}(天童市)と大森 B 遺跡(山形市)、乱川扇状地南側の扇端部に高木石田遺跡(天童市)、北側の扇端部に蟹沢遺跡(東根市)、楯岡盆地扇頂部に作野遺跡(村山市)が現れる。いずれも晩期に継続し有力遺跡となるが、晩期に見られる扇頂部の遺跡と扇端部・前縁部の遺跡との相補関係が、瘤付土器の段階に成立したことになる。

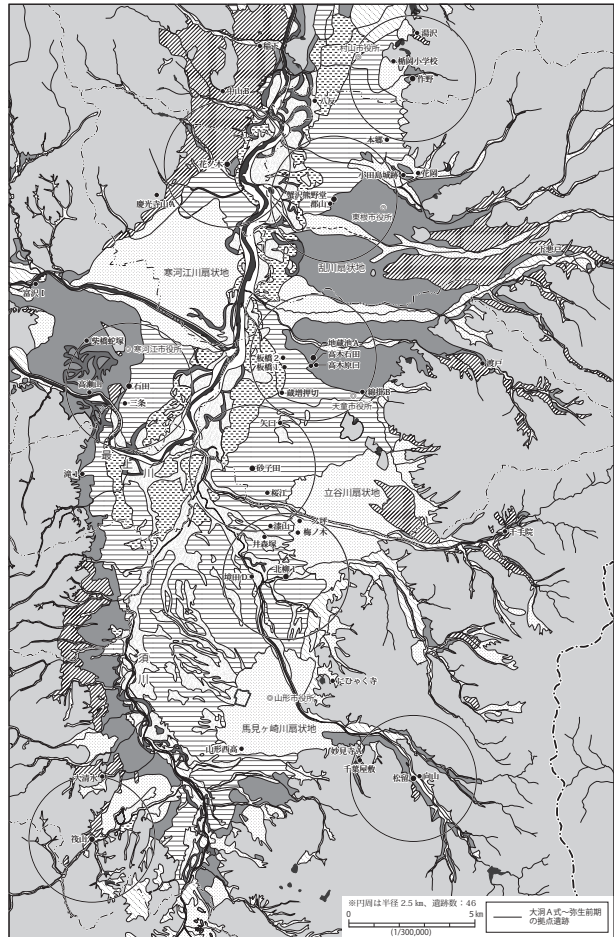
上記したように、後期は宝ヶ峯 2 式期に途絶する遺跡が多く、それ以降の宝ヶ峯 3 式・西ノ浜式(瘤付土器第Ⅰ段階)期は急減する。この時期が後期の転換期となっており、関東地方では加曾利 B2 式から同 B3 式にかけた時期に相当する。該期の遺跡の小規模化と遺跡数の減少は、東北南半から関東にかけて東日本に通有の現象となっており、環境的要因が作用していた可能性も考えられる。

(5) 縄文時代晩期の遺跡動態

縄文時代晩期は、近年の炭素 14 年代法を用いた年代測定研究によると、較正年代が 3,220～2,385 年前(1,270 - 435calBC)の 835 年間と推定されている(小林謙一 2017: 176 頁)。ただし晩期後葉から弥生前期にかけた時期は、炭素 14 年代の「2400 年問題」の時期に該当し、較正曲線の BC750～400 年に至る水平な部分に入るため、正確な年代を絞り込むことが困難である。また北部九州では大洞 C2 式並行期に弥生早期、近畿以西では大洞 A2 式並行期に弥生前期に移行しており、西日本の晩期の年代幅はより短期となる。晩期は華麗な装飾を持った亀ヶ岡式土器に象徴されるように文化



① 縄文時代晩期前葉～中葉の遺跡分布



② 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の遺跡分布

図 23 山形盆地における縄文時代晩期の時期別遺跡分布図

的の高揚が著しく、活力に溢れると共に、遮光器土偶等の祭祀具の発達から、呪術・祭祀性の強い社会であったと想定されている。しかし居住域としての集落構成が明確になった遺跡は少なく、社会の実態の解明が立ち後れてきたのが実情である。

図 22 には、縄文晩期 81 遺跡をプロットした。山麓線に沿った区域と扇端部から前縁部に遺跡の分布が認められるが、型式特定が可能な遺跡では、晩期前葉～中葉(大洞 B～C2 式期)が 51 遺跡(図 23-①)、晩期後葉(大洞 A 式～弥生前期)が 46 遺跡(図 23-②)を数える。

晩期前葉～中葉は、盆地北東部に遺跡が多く分布する。扇状地の扇頂部に立地する遺跡と、扇端部に立地する遺跡とに分化しており、扇中央部には全く見られない。特に立谷川扇状地以北の山麓線には、1～3 km 間隔で遺跡が濃密に分布しており、扇頂・扇側部の山際の遺跡と、扇端・前縁部の遺跡の間で、緊密な交流関係が存していたと想定される。また開析の進んでいない馬見ヶ崎川扇状

地と寒河江川扇状地には遺跡が少なく、河川を遡った山間河谷に遺跡の分布が認められる。

図 23-①には山形盆地の大洞 BC～C2 式期の有力な遺跡に、半径 2.5 km の円周を描き、それぞれの領域の推定を試みた。盆地北東部に 7 遺跡群が設定されるが、みやでん宮田遺跡と大森 B 遺跡を除くと、若干の重なりを有しながら、山麓線に沿って連続している様相が看取される。有力遺跡がほぼ 5 km 間隔で位置していたことを示しており、これ等の遺跡は盆地底を見渡せる扇頂部に位置する例が多い。また乱川扇状地の北側の扇端部(蟹沢遺跡)と南側(高木石田遺跡)にも、有力遺跡の領域が設定される。この地域は湧水帯に当たり、豊富な水量が得ることができる。山麓部と扇端・前縁部では異なった生態系にあり、獲得可能な資源に異同が存したと推定され、相互に資源を補完し合うような対応関係が存していたと考えられる。具体的には花岡遺跡(東根市)と蟹沢遺跡、渡戸遺跡と高木石田遺跡、宮田遺跡と矢口遺跡の関係が

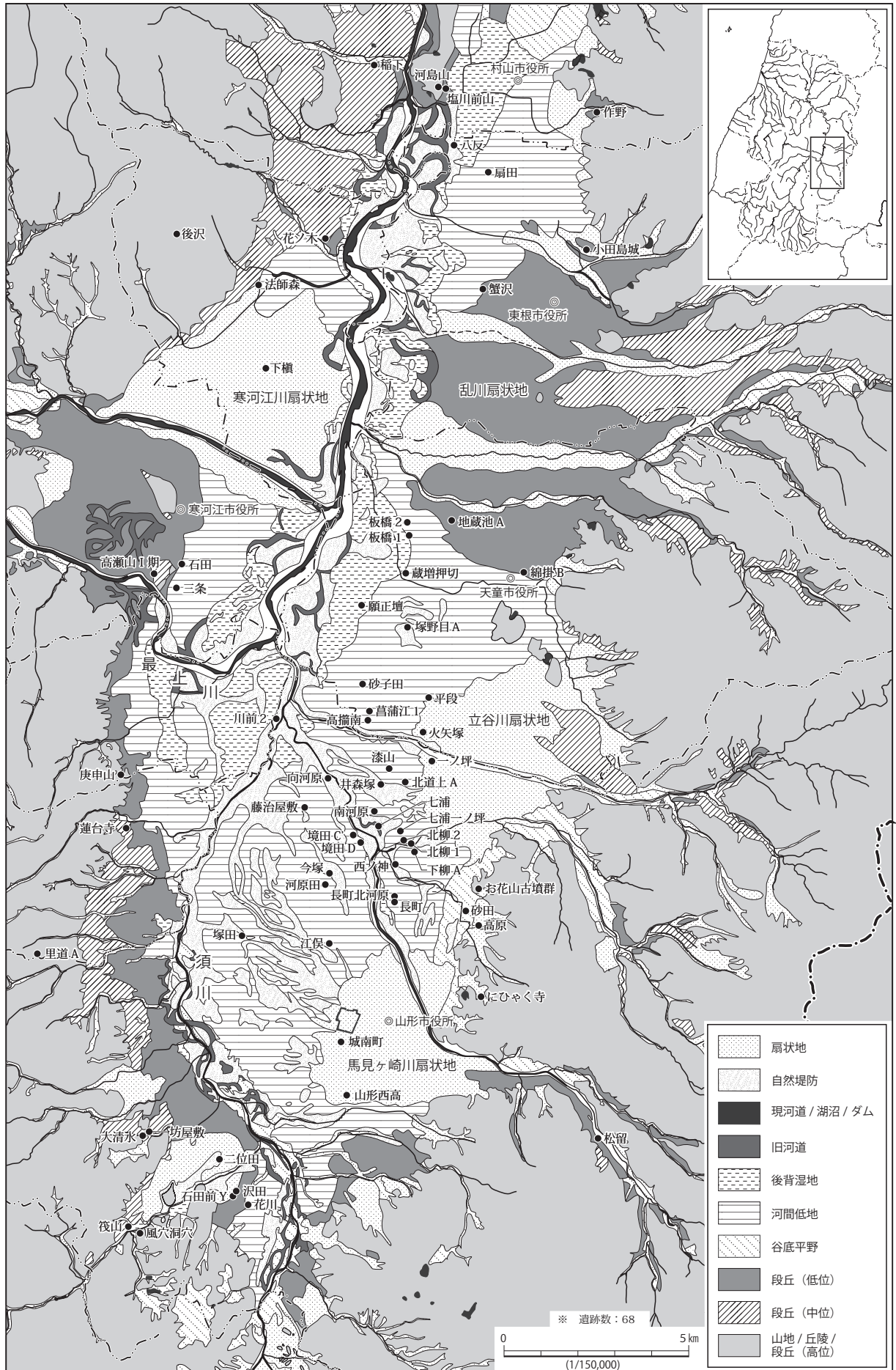


図 24 山形盆地の地形分類と弥生時代の遺跡分布

想定される。

山形盆地では晩期末葉大洞 A2 式期になると、前記した山麓部の遺跡が規模を縮小させたのとは対照的に、扇端・前縁部に位置する蟹沢遺跡、高木石田遺跡、砂子田遺跡、北柳 1 遺跡 (山形市) 等が盛行しており、弥生時代の稲作受容に先行して沖積低地に主体が移行した様相が観察される (図 23 - ②)。後・晩期の水場遺構が検出された高瀬山遺跡では、該期にこれまでとは地点を異にして大型の水場遺構が構築され、トチノキのアク抜き処理が一段と活発化したと考えられる。このことから、遺跡の沖積低地への進出に、湧水帯での食料加工作業が深く関わっていた可能性が推定される。

馬見ヶ崎川から滑川沿いの山間河谷を遡ると、新山 D 遺跡等の小規模な遺跡が点在する。それぞれの遺跡の詳細は明かでないが、特に八丁平遺跡 (山形市) は宮城県境の標高 900 ~ 950 m の笹谷峠に位置しており、脊梁山脈東側 (宮城県) の名取川水系の北川沿いには、晩期の遺跡として日向遺跡 (川崎町) が存している。この笹谷峠が山形盆地と仙台平野をつなぐ主要なルートとなっており、これ等の遺跡は中継地としての役割を担っていたと考えられる。

(6) 弥生時代の遺跡動態

東北地方の弥生時代前期 (砂沢式・青木畑式土器段階) は、近年の炭素 14 年代法を用いた年代測定研究では、較正年代が 2,400 ~ 2,305 年前 (450 - 355calBC) と推定されている (小林謙一 2017: 175 頁)。古墳時代の開始期が AD250 年頃と見込まれることから、東北地方の弥生時代の年代幅は、縄文晩期より短い 700 年間であったと考えられる。

弥生時代は水稻耕作が開始された時代であるが、庄内地方の酒田市生石 2 遺跡では、炭化米や粃圧痕土器の出土から弥生前期に稲作の受容が確認されている。山形盆地において稲作の痕跡が明確になるのは、中期中葉 (榊形圃式並行期) 以降のことで、石包丁が出土した遺跡は、花ノ木遺跡 (河北町)、江俣遺跡 (山形市)、七浦遺跡 (山形市)、今塚遺跡 (山形市)、石田前 Y 遺跡 (山形市)、境田 D 遺跡 (山形市) の 6 遺跡で、特に七浦遺跡では石包丁 3 点が出土している。また江俣遺跡では中期中葉 (桜井式並行期) の粃圧痕土器、向河原遺跡 (山形市) では同期の炭化米が出土している (註 15)。

図 24 には弥生時代の 68 遺跡をプロットしたが、縄文時代の遺跡分布 (図 10) に比べると、沖積低地に偏在する。弥生中期前葉までは縄文晩期後葉から継続した遺跡が多く存し、立地に大きな変化は認められないが、中期中葉から後葉にかけて遺跡数が増加し、沖積低地の遺跡が大半を占める。なお凡例に隠れているが、馬見ヶ崎川上流域の関沢 B 遺跡 (山形市) では、山間部にもかかわらず中期中葉の土器が出土している (佐藤・布施 1988)。

弥生前期~中期前葉 (原式並行期) の主要な遺跡としては、北から作野遺跡、花ノ木遺跡、蟹沢遺跡、地蔵池 A 遺跡 (天童市)、石田遺跡 (寒河江市)、北柳 1 遺跡、松留遺跡、筏山遺跡 (山形市) が点在する。山形市域の松留遺跡は山間河谷に立地する他は、作野遺跡と筏山遺跡が扇頂部、花ノ木遺跡が中位段丘面、その他は扇端部から前縁部の湧水帯に立地する。作野遺跡では大洞 A' (新) 式~青木畑式並行期の竪穴住居跡 (ST40) が検出され、地蔵池 A 遺跡 (別称成生遺跡) では原式並行期の住居柱穴群、小田島城跡 (東根市) では同期の合口土器棺墓 (SK533)、石田遺跡で青木畑式並行期? の再葬墓 (1 号土壙) が検出されている。山形盆地では現在のところ遠賀川系土器が明確でなく、水稻耕作の痕跡も判然としない (註 16)。

弥生中期中葉~後葉は上記したように遺跡数が急増し、水稻耕作が明確となる。ほとんどが低地部の遺跡で、特に天童市・山形市域の立谷川・馬見ヶ崎川扇状地の扇端部から前縁部にかけての地域や、本沢川扇状地 (谷柏地区) に集中しており、湧水帯の微高地に集落が営まれ、その周囲で小規模ながらも本格的な水稻耕作が開始されていたと考えられる。中期中葉 (桜井式並行期) の竪穴住居跡が向河原遺跡、住居柱穴群が河原田遺跡、土器棺墓が山形西高敷地内遺跡 (SK186)・境田 D 遺跡 (EU205)・河原田遺跡 (SK10)・南河原遺跡 (3 基)、木棺墓が河原田遺跡で 5 基検出されており、平野部での集落形成が可能な安定した環境下にあったことが推定される。

弥生後期 (天王山式並行期) は、口縁部下の刺突文や胴部の撚糸文地文の土器に特徴付けられるが、遺跡数は中期に比べ減少する。これまで後期の遺跡は、河島山遺跡 (村山市)、後沢遺跡 (河北町)、風穴 (別称隔間場) 洞穴 (山形市) のように、丘陵や台地上の高所に立地す

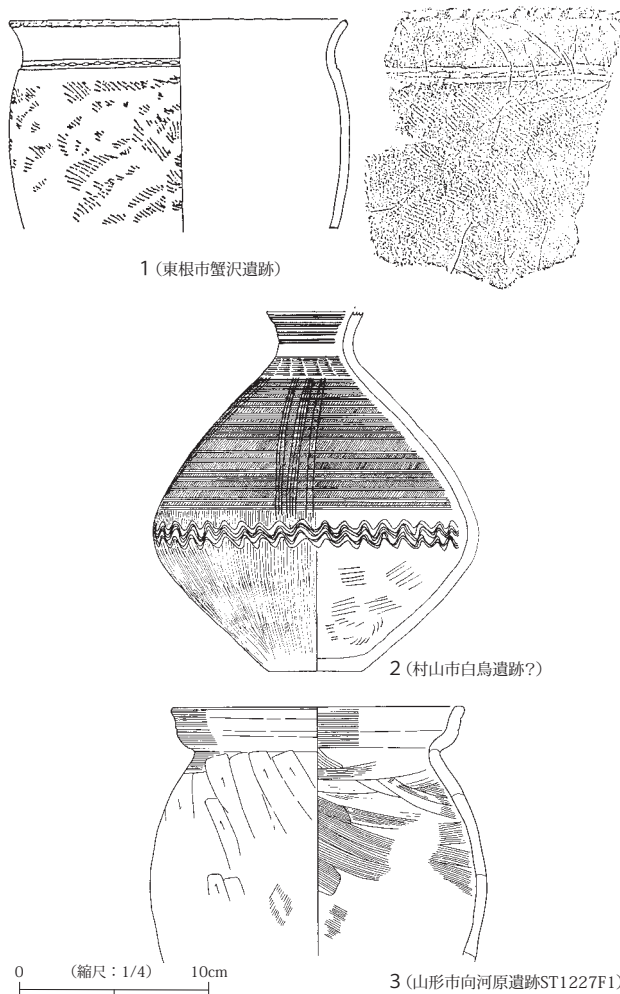


図 25 山形盆地の弥生土器参考資料

ることが指摘されていたが、近年向河原遺跡や高嶺南遺跡（天童市）のように平野部での遺跡の発見も相次ぎ、特に向河原遺跡では後期の竪穴住居跡が4棟検出されている。該期の拡散化した遺跡立地は、多様な生業活動を反映しているであろう。また向河原遺跡では後期後半の北陸系の有段口縁甕（法仏式・月影式：図25-3）が出土し、石田遺跡では続縄文時代の後北D式が採集されており、広汎な地域間交流が存していたことを窺わせる^{（註17）}。

5 結 語

馬見ヶ崎川扇状地の縄文時代遺跡の検討を通して、扇状地における縄文時代の生活活動の推移を垣間見てきた。縄文時代中期初頭に扇状地面での生活の営みが開始され、中期後半（大木8a～10式期）には熊ノ前遺跡と山形西高敷地内遺跡が、山形盆地南部の中核遺跡となり、有力な地域圏が形成されていた。しかし後期以降は

他地域に主体が移り、扇端部に断続的な痕跡が認められたのみで、晩期大洞A2式期と弥生中期桜井式期に限り、やや活発な状況が看取された。

山形盆地における縄文時代遺跡の推移を見ると、一律に安定していたのではなく、繁栄期と衰退期を繰り返した経過が観察される。特に前期以降では、前期末葉～中期初頭と中期末葉～後期初頭に遺跡が途絶え遺跡数も急減する。また後期中葉（宝ヶ峯2式期）と晩期後葉（大洞A2式期）にも、遺跡の継続性や遺跡立地の観点から転換期が推定される。馬見ヶ崎川扇状地では上記した衰退期の中期初頭に活動が始まり、中期末の遺跡の途絶は山形西高敷地内遺跡の終焉に象徴される。後期以降の活動は断続的で低調となるが、晩期大洞A2式期と弥生時代中期桜井式期は、山形盆地の沖積低地部における顕著な活動と連動して、山形西高敷地内遺跡にやや活発な生活の痕跡が確認された。扇状地は常に氾濫の危険にさらされていたが、河道が比較的安定した時期に、生活の場として選地されたと推定される。

しかし馬見ヶ崎川扇状地内の発掘調査は、一部の区域に限られるため、扇状地全域の内容はまだ不明瞭と言わざるを得ない。特に扇端部は土砂が比較的厚く堆積しており、縄文時代の生活面の遺存も期待されるが、これまで山形西高敷地内と山形城三の丸跡の区域が調査されたに過ぎない。放射状に伸びた河道跡も随所に埋もれており、この区域外にも縄文時代の活動の痕跡が予想される。今後縄文時代の探求に配慮した発掘調査が求められるよう。

精緻な土器型式編年に基づいて、一定の地理的範囲の遺跡動態を跡づけることは、地域社会の究明には必須の手続きである。それには地域編年の構築とベースとなる正確な地図、詳細な遺跡情報が前提となる。しかし山形県内でそれ等の条件を満たす地域は限られており、山形盆地はその数少ない地域に該当する。今後隣接地域にも対象を広げ、事例を蓄積することで、最上川流域の縄文文化の研究を深化させたいと考えており、本稿はその序章となるものである。

最後に、菅原哲文氏には縄文時代中期に関して様々なご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

註

- 1) 馬見ヶ崎川河道改修の契機となった1623(元和3)年の氾濫から終戦(1945年)までの322年間で、『山形市史 年表・索引編』(山形市1982)には、馬見ヶ崎川の氾濫が35回記録されており、そのうち半数の17回が明治期以降の氾濫である。なお同書には1835(天保6)年7月の大洪水の記述がなく、(国土地理院1985)から補ったが、それを含めると36回を数える。
- 2) 旧石器時代末期に相当するが、山寺地区の所部(ところぶ)遺跡(遺跡番号201-095)で両面加工の尖頭器、柏倉地区の柏倉八幡遺跡(遺跡番号201-165)で片刃石斧が採集され、前者は旧石器時代として遺跡登録されている。旧石器時代の遺跡が確認されないのは、沖積平野の占める割合が高く段丘地形があまり見られない点があげられるが、当該域における第四紀の地形発達史が解明されていないのも要因の一つであろう。
- 3) 山形県ホームページの山形県遺跡地図(2018年度版)に示された飯田遺跡の位置に誤りがあるため、1966年発行『全国遺跡地図(山形県)』に基づき変更した。同遺跡は山腹に位置する縄文前期(大木6式)・中期(大木7b式)・後期の集落跡として登録されている。
- 4) 図1は山形県ホームページの山形県遺跡地図(2018年度版)に基づいて作成したが、熊ノ前遺跡の位置と範囲が発掘調査報告書(佐々木ほか1979)に合致しない。報告書の遺跡範囲を図1に破線で併記したが、山形県遺跡地図では発掘調査区域が遺跡範囲から除外され、面積もほぼ半減している(図5)。
- 5) 熊ノ前遺跡の第1次調査(1974年:山形市教育委員会調査主体)では住居跡9棟(検出9棟、炉跡のみ2基)、第3次調査(1976年:山形市教育委員会調査主体)では、住居跡7棟(検出4棟、炉跡のみ3基)、土坑20基、第2・4次調査(1975・78年:山形県教育委員会調査主体)では、住居跡47棟(検出30棟、炉跡のみ10基、確認7棟)、土坑14基(埋設土器11基)、配石遺構1基が検出された。なお第4次調査(1978年)の表土除去で重機(ブルドーザー)が使用されている。
- 6) 山形西高敷地内遺跡の1976年7月の第2次調査(D・E地区)では、重機やベルトコンベアを使って粗掘りと包含層の掘り下げが行われたと記録されている。具体的な内容は判然としないが、山形県内の発掘調査に重機が導入された初めての事例であろう。
- 7) 山形西高敷地内遺跡住居跡の時期特定については、菅原哲文氏の研究(菅原2014a:第12図)に従った。但し住居跡の床面から出土した土器から、ST45は大木10(中)式→大木10(新)式(図3-49)、ST73は大木10(新)式→大木10(中)式(図3-42)に変更した。
- 8) 山形西高敷地内遺跡から出土した台付浅鉢形土器(図4-78)は、『縄文土器大成 4 晩期』(鈴木・林編1981:63頁)に写真が掲載され、「192 台付浅鉢 山形県的場遺跡 高さ10.8cm」と注記されているが、遺跡名は誤記である。
- 9) 隆線文以前と考えられる無紋土器段階(S0期:約320年間)を含めた年代である。隆線文土器段階(S1期)と隆線文以降の爪形紋(新时期)・押圧縄紋・多縄紋・無紋土器段階(S2期)を合わせた草創期に限ると、較正年代が15,540~11,345年前(13,590~9,395calBC)の4,195年間、早期は較正年代が11,345~7,050年前(9,395~5,100calBC)の4,295年間と推定されている(小林謙一2017:175頁)。従って両者を合わせた年代幅は8,490年間となる。
- 10) 縦位回転の山形押型文土器は、縄文時代晩期大洞C2~A式期にも認められる。晩期押型文は山形県南西部(置賜・庄内地方の5遺跡)と福島県会津地方、新潟県下越地方に局所的に分布しており、山形盆地は分布圏外となる。また小林遺跡から出土した晩期の土器は大洞BC2式のみで、押型文土器の時期である大洞C2~A式土器は認められていない。図12が中部地方に主体がある早期の山形文であるとすれば、最北の

事例として極めて重要であるが、晩期の可能性も否定できない。

- 11) 上荒谷遺跡から採集された土偶は、頭部と体部からなる十字形の土偶で、長さ7.5cm、幅5cmを測る。粘土塊を人形にこね上げて作出され、顔面は目・口が刺突で表現されている。顔面表現を持つ点で、前期には特異な土偶であるが、所有者が故人となり、所在が不明となっている。『山形県史 資料篇11 考古資料』(柏倉編1969:図版393)と『天童市史 別巻上 地理・考古篇』(赤塚ほか1978:269頁第2図)に掲載された不鮮明な写真でしか確認できないのは、遺憾と言わざるを得ない。
- 12) 山形県遺跡地図では、後・晩期の大森B遺跡(別称入与田遺跡)が「大森A遺跡」(遺跡番号201-086)、前期の大森A遺跡(別称齊当遺跡)が「大森B遺跡」(遺跡番号201-238)と登録されている。逆に登録された経緯は承知していないが、本稿では安孫子・保角両氏の学史的業績を尊重し、両氏の呼称を踏襲した。
- 13) 高瀬山断崖直下の三条遺跡(寒河江市)では、大木6式2・3期の長胴形土器のほかに、ドーナツ形貼付文に刻目を入れた大木6式5期または五領ヶ台I a式並行の土器(高桑弘美ほか2001:第151図2)が出土しており、高瀬山遺跡の環状集落解体後も、小集団がその周囲で生活を営んでいた様相が窺われる。
- 14) (赤塚ほか1981)によると、石転山(いしころばしやま)遺跡は大木8b~9式、正法寺遺跡は大木8b~9式、南山遺跡は中期末、新城遺跡は大木8a~8b式、小関A遺跡は大木8b式、中里A遺跡は大木9式とされている。
- 15) 図郭外となるが、寒河江川を遡った稲沢遺跡(西川町)でも石包丁が採集されている(宇野ほか1994:140頁)。弥生時代固有の石器としては、扁平片刃石斧が河北町花ノ木遺跡・山形市江俣遺跡・境田D遺跡、大型蛤刃石斧が山形市宮町地内と山形市境田D遺跡・東根市小田島城跡で出土している。また弥生時代後半期に特有のアメリカ式石鏃は、北から河島山遺跡、花ノ木遺跡、綿掛B遺跡、砂子田遺跡、川前2遺跡、向河原遺跡、藤治屋敷遺跡、境田D遺跡、北柳1遺跡、お花山古墳群、江俣遺跡等で出土している。
- 16) 蟹沢遺跡(東根市)で出土した甕形土器(図25-1)が、「遠賀川系土器」として紹介されている(加藤ほか1989)。口端が刻まれ、頸部の平行沈線間に列点が巡らされ、体部に縄文(RL?)が施された土器片で、生石2遺跡の「甕A類14d」に類似する。しかし出土経緯が示されず時期特定が困難であることから、その評価は保留する。また前期主体の筏山遺跡(山形市)で靱痕の付いた土器が出土したと報告されている(山形市教委編2004)。しかし資料の確認ができないので、判断は保留する。
- 17) 弥生時代中期末葉に関して、村山市白鳥(しろとり)地内から櫛描文の壺形土器が採集されている(図25-2)。『村山市史 別巻 1 原始・古代編』(加藤ほか1982:694-695頁)に新規の「白鳥遺跡」として位置が明示されているが、山形県遺跡地図では「トウボウ遺跡」(遺跡番号208-102:縄文時代中期散布地)として登録されている。図24の図郭外で山形盆地北端の山麓部に位置するが、当該地は土地整備のためブルドーザーが入り、原形を留めていないという。櫛描文土器は東海地方(三河方面)の中期末葉「長床式」に位置づけられ、彼の地からの搬入品で、直接的な関係を示す希有の資料とされていた(加藤ほか1982:613-617頁)。ところが1991年刊行の『村山市史 原始・古代・中世編』では、同じ加藤稔氏が執筆したにもかかわらず、当該土器に関する記述が見当たらない。その背景には、当該土器の出土経緯が不明瞭で、往時の将来品とする評価に疑念が生じた可能性が推定される。

引用文献

- 相原淳一 2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年—宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から—」『東北歴史博物館研究紀要』10 pp.1-10 東北歴史博物館
- 相原淳一・柳澤和明 2007 『山居遺跡（縄文時代編）ほか—三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅹ—』（宮城県文化財調査報告書第214集）宮城県教育委員会・国土交通省東北地方整備局
- 赤塚長一郎・川崎利夫ほか 1978 『天童市史 別巻上 地理・考古篇』（天童市史編さん委員会編）天童市
- 赤塚長一郎・名和達朗ほか 1981 『天童市史 上巻 原始・古代・中世編』（天童市史編さん委員会編）天童市
- 伊藤邦弘・渡辺淳一 2006 『小松原窯跡・長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第147集）山形県埋蔵文化財センター
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』同成社
- 植松暁彦 2014 「縄文文化から弥生文化へ」『山形の縄文文化小論集～今、山形の縄文時代はどこまでわかったのか～』pp.81-101 放送大学山形学習センター・山形県埋蔵文化財センター
- 植松暁彦・吉田江美子 2003 『山形西高敷地内遺跡第6次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第117集）山形県埋蔵文化財センター
- 宇野修平ほか 1994 『寒河江市史 上巻 原始・古代・中世編』（寒河江市史編さん委員会編）寒河江市
- 押切智紀ほか 2005 『向河原遺跡第5・6次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第141集）山形県埋蔵文化財センター
- 柏倉亮吉編 1969 『山形県史 資料11篇 考古資料』山形県
- 加藤稔ほか 1982 『村山市史 別巻1 原始・古代編』（村山市史編さん委員会編）村山市
- 加藤稔ほか 1989 『東根市史 別巻上 考古・民俗篇』（東根市史編集委員会編）東根市
- 加藤稔ほか 1991 『村山市史 原始・古代・中世編』（村山市史編さん委員会編）村山市
- 桐谷優ほか 2004 『山形西高敷地内遺跡—都市計画道路美畑天童線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—』（山形市埋蔵文化財調査報告書第18集）山形市教育委員会・山武考古学研究所
- 黒坂雅人ほか 1999 『城南一丁目遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第69集）山形県埋蔵文化財センター
- 国土地理院 1985 『土地条件調査報告書（山形地区）』（国土地理院技術資料D-2-No.39）建設省国土地理院 <<https://www1.gsi.go.jp/geowww/landcondition/report/d2039.pdf>> (2019/02/27 アクセス)
- 小林圭一 2001 「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第7巻第1号（通巻31号）pp.21-81 山形考古学会
- 小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究—東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式—』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
- 小林圭一 2012 「富並川流域の縄文時代の遺跡動態—西海湖・川口・宮の前遺跡の検討を通して—」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 研究成果報告書Ⅰ』pp.125-198 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2014 「吹浦遺跡出土の縄文土器—今村啓爾氏の研究に学ぶ山形県内の縄文前期末葉の土器群—」『研究紀要』13 pp.3-51 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2019 「山形県北東部における縄文時代中期の遺跡動態—西海湖遺跡と西ノ前遺跡を中心として—」『研究紀要』第11号 pp.33-60 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一編 2005 『高瀬山遺跡（HO地区）発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集）山形県埋蔵文化財センター
- 小林謙一 2017 『縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—』同成社
- 小林謙一 2019 『縄文時代の実年代講座』同成社
- 今正幸・大場正善・安部将平 2012 『高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第200集）山形県埋蔵文化財センター
- 齋藤健・犬飼透・黒坂広美 2004 『板橋1遺跡・板橋2遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第125集）山形県埋蔵文化財センター
- 齊藤主税・須賀井明子ほか 2004 『高瀬山遺跡（1期）第1～4次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集）山形県埋蔵文化財センター
- 齋藤 仁 2005 『双葉町遺跡（山形城三の丸跡）発掘調査報告書 縄文時代～中世編』（山形市埋蔵文化財調査報告書第24集）山形市・山形市教育委員会
- 佐々木亜貴子 1995 「山形市百々山遺跡出土の土器—尚古館所蔵資料の紹介—」『山形考古』第5巻第3号（通巻25号）pp.1-18 山形考古学会
- 佐々木洋治・佐藤正俊ほか 1979 『熊ノ前遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第16集）山形県教育委員会
- 佐竹弘嗣・伊藤純子 2010 『山形城三の丸跡第4・6次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第190集）山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤鎮雄・佐藤正俊 1976 『小林遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第8集）山形県教育委員会
- 佐藤庄一・尾形典典・阿部明彦 1979 『山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第17集）山形県教育委員会
- 佐藤庄一ほか 1985 『山形西高敷地内遺跡第3次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第91集）山形県教育委員会
- 佐藤庄一ほか 1992 『山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第173集）山形県教育委員会
- 佐藤庄一・水戸弘美 1993 『山形西高敷地内遺跡第5次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第192集）山形県教育委員会
- 佐藤正俊ほか 1981 『山形市柏倉地区遺跡群発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第33集）山形県教育委員会
- 佐藤正俊・布施明子 1988 『向山・関沢B遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第133集）山形県教育委員会
- 須賀井新人・高桑登 1996 『上荒谷遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第37集）山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2014a 「山形の発達した縄文中期ムラの様子」『山形の縄文文化小論集～今、山形の縄文時代はどこまでわかったのか～』pp.43-57 放送大学山形学習センター・山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2014b 「最上川中流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第6号 pp.27-48 山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2018 「扇状地に栄えた縄文ムラ—小林B遺跡の中期縄文集落—」『北村山の歴史』第17号 pp.37-53 北村山地域史研究会
- 鈴木公雄・林謙作編 1981 『縄文土器大成 4 晩期』講談社
- 須藤英之・齋藤仁 2006 『双葉町遺跡・城南町遺跡（山形城三

の丸跡) 発掘調査報告書』(山形市埋蔵文化財調査報告書第 25 集) 山形市・山形市教育委員会

高桑弘美ほか 2001 『三条遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 93 集) 山形県埋蔵文化財センター

高桑 登 2005 『山形西高敷地内遺跡第 7 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 143 集) 山形県埋蔵文化財センター

豊島正幸 1980 「山形盆地東縁部における洪積世末期のテフラと河成段丘の形成時期」『東北地理』32-4 pp.203-210 東北地理学会

名和達朗・渋谷孝雄 1983 『中村 A 遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 73 集) 山形県教育委員会

森谷昌央ほか 2003 『砂子田遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 113 集) 山形県埋蔵文化財センター

山形県教育委員会編 1985 『にひやく寺遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 92 集) 山形県教育委員会

山形県教育委員会編 2002 『分布調査報告書(28)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 202 集) 山形県教育委員会

山形県教育委員会編 2006 『分布調査報告書(32)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 206 集) 山形県教育委員会

山形県埋蔵文化財センター編 1999 『東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書(2)』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 68 集) 山形県埋蔵文化財センター

山形市教育委員会編 1975 『山形市熊ノ前遺跡-第 1 次調査報告書-』 山形市教育委員会

山形市教育委員会編 1978 『熊ノ前遺跡 第 3 次発掘調査報告書』(山形市埋蔵文化財調査報告書) 山形市教育委員会

山形市教育委員会編 2001 『山形市埋蔵文化財調査年報-平成 5~11 年度-』 山形市教育委員会

山形市教育委員会編 2004 『図説 山形の歴史と文化』 山形市教育委員会

山形市史編さん委員会・山形市史編集委員会編 1973 『山形市史 上巻 原始・古代・中世編』 山形市

山形市史編さん委員会編 1982 『山形市史 年表・索引編』 山形市

山口博之・渡辺薫 1996 『渡戸遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 35 集) 山形県埋蔵文化財センター

渡邊泰伸ほか 2017 『天童市礼井戸遺跡・天童市高楯東遺跡-市道清池南小畑線道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(天童市埋蔵文化財調査報告書第 39 集) 天童市・(株)三協技術

図版出典

図 1 : 国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図「山形北部」・「山形南部」に相当する『電子地形図 25000 (オンデマンド版)』(2018 年 3 月 15 日調整) を 50% 縮小した地図をベースに、国土地理院ホームページで公開する『治水地形分類図更新版 (2007~2016 年)』(<<https://maps.gsi.go.jp>> (2019/02/22 アクセス)) を参照して作成した。なお遺跡位置は山形県ホームページで公開する『山形県遺跡地図』(<<https://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700015/isekimap/isekimap.html>> (2018/11/09 アクセス)) に基づいている。

図 2-1 : (黒坂ほか 1999)、2 : (須藤・齋藤 2006)、3~26 : (佐々木ほか 1979)

図 3-27~32・35~37 : (佐々木ほか 1979)、33・39~44・46~54 : (佐藤ほか 1992)、34 : (佐藤・水戸 1993)、38・45 : (佐藤ほか 1979)

図 4-55 : (齋藤 2005)、56~60・62~69・71~76・80 : (須藤・齋藤 2006)、61・70 : (黒坂ほか 1999)、77 : (佐竹・伊

藤 2010)、78・81~85・89~99 : (佐藤ほか 1979)、79 : (高桑 2005)、86~88 : (佐藤・水戸 1993)

図 5・7 : 国土地理院発行『1 万分の 1 地形図 山形』(2001 年 4 月 1 日発行) をベースに、国土地理院ホームページで公開する『治水地形分類図更新版 (2007~2016 年)』と『ベクトル地形分類 (自然地形)』(<<https://maps.gsi.go.jp>> (2019/02/22 アクセス)) を参照して作成した。遺跡位置については図 1 に準じる。

図 6 : (佐々木ほか 1979 : 第 4 図) をベースに、同書所収の個々の遺構図を合成し再トレースした。

図 8 : (佐藤・水戸 1993 : 第 4 図) をベースに、(佐藤庄一ほか 1979)・(佐藤庄一ほか 1985)・(佐藤庄一ほか 1992)・(佐藤・水戸 1993) 所収の個々の遺構図を合成し再トレースした。住居跡の帰属時期は (菅原 2014 : 第 12 図) を参照した。

図 9 : (佐藤庄一ほか 1979 : 第 3 図) を改変した。

図 10・11・13・15・18・22~24 : 国土地理院発行『電子地形図 25000 (DVD 版) -山形県-』(2017 年 11 月 24 日作成) をベースに、山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 左沢/楯岡/関山峠/川崎/荒砥/山形』を参照して作成した。遺跡位置については図 1 に準ずる。

図 12 : (加藤ほか 1989 : 図 328-31)

図 14 : (齊藤・須賀井ほか 2005 : 本文編 1 第 50 図) を改変した。

図 16 : (名和・渋谷 1983 : 第 4 図) をベースに、同書所収の個々の遺構図を合成し再トレースした。

図 17 : (佐藤鎮雄ほか 1976 : 第 5 図) をベースに、同書所収の個々の遺構図を合成し再トレースした。

図 19 : (佐藤正俊ほか 1981 : 第 36 図) を改変した。

図 20 : (小林圭一編 2005 : 本文編第 32・33 図) を改変した。

図 21 : (森谷ほか 2003 : 第 6 図) をベースに、同書所収の個々の遺構図を合成し再トレースした。

図 25-1 : (加藤ほか 1989 : 図 401)、2 : (加藤ほか 1982 : 図 714)、3 : (押切ほか 2005 : 第 100 図 1)

村山地域から出土した 7 世紀の土器

渡辺和行

1 はじめに

山形県内における 7 世紀に属する遺物は少ない。しかし、近年の調査において、今まで出土していなかった形式の土器が散見されるようになった。それらは本県の編年による前後の土器や近県出土の土器から概ね 7 世紀にあたるものと理解されるようになった。

本稿ではそういった 7 世紀に属するであろう土器群の内、主に土師器について、宮城県域の編年や本県における編年及び報文の年代観を元に分類と時期の検討をおこなったものである。対象とした地域は近年遺物量が増加している村山地域としている。古代の行政区画では最上郡の範囲となる。

なお、遺物量が増加していると述べたが、それでも遺跡・遺物数ともに少ない。現時点での分類と整理という観点で捉えて頂きたい。

2 対象とする遺跡

現在当地域において当該期の遺物が確認されているのは、山形市に位置する双葉町遺跡、山形城三の丸跡第 4・6 次、川前 2 遺跡の 3 遺跡と東根市に位置する八反遺跡の計 4 遺跡である。このうち、山形城三の丸跡第 4・6 次の出土遺物は 8 世紀前半と報告されたものを器形を含めた筆者の判断により 7 世紀に属するものを抽出し、掲載したものである。

他の 3 遺跡は報文中において本稿に掲載した資料の年代を 7 世紀後半以降、7 世紀末から 8 世紀初頭としている場合が多い。または、7 世紀と記載しているものもあり、比較的広い時期幅で捉えられていることが確認できる。以下に遺跡の特徴について記載する。

双葉町遺跡

山形市双葉町 1 丁目に所在する遺跡で縄文時代及び古墳時代から近世の遺物・遺構が確認された遺跡である。山形市域は馬見ヶ崎川が作る扇状地の扇中央から先端あたり、遺跡が立地する場所は扇端にあたる。

当遺跡からは関東系土師器が出土しており、村田晃一（村田 2005）が日本考古学会の福島大会において指摘している。

川前 2 遺跡

山形市と中山町に跨いで位置する。山形市側は中野目字赤坂、中山町は長崎文新田地内である。立地は須川左岸の自然堤防上である。この場所は最上川と白川や立谷川が合流場所に近い。このような立地のため、増水時には冠水しやすい場所となっており、発掘調査においても洪水の痕跡が確認されている。調査は 5 次調査まで行われており、古墳時代と古代の遺物・遺構が検出されている。今回掲載した遺物は 1・2 次調査のものである。古代は 7 世紀後半から 9 世紀前半まで集落が営まれていた。その中で 8 世紀中葉から後半が集落の主体となる時期である。

調査面積は 1・2 次で 8,500 m²で 126 棟もの竪穴住居が確認されており、大規模な集落であったことがわかる。このような立地と出土遺物から河川を利用した交通や物流を担った遺跡と考えられている。

山形城三の丸跡第 4・6 次

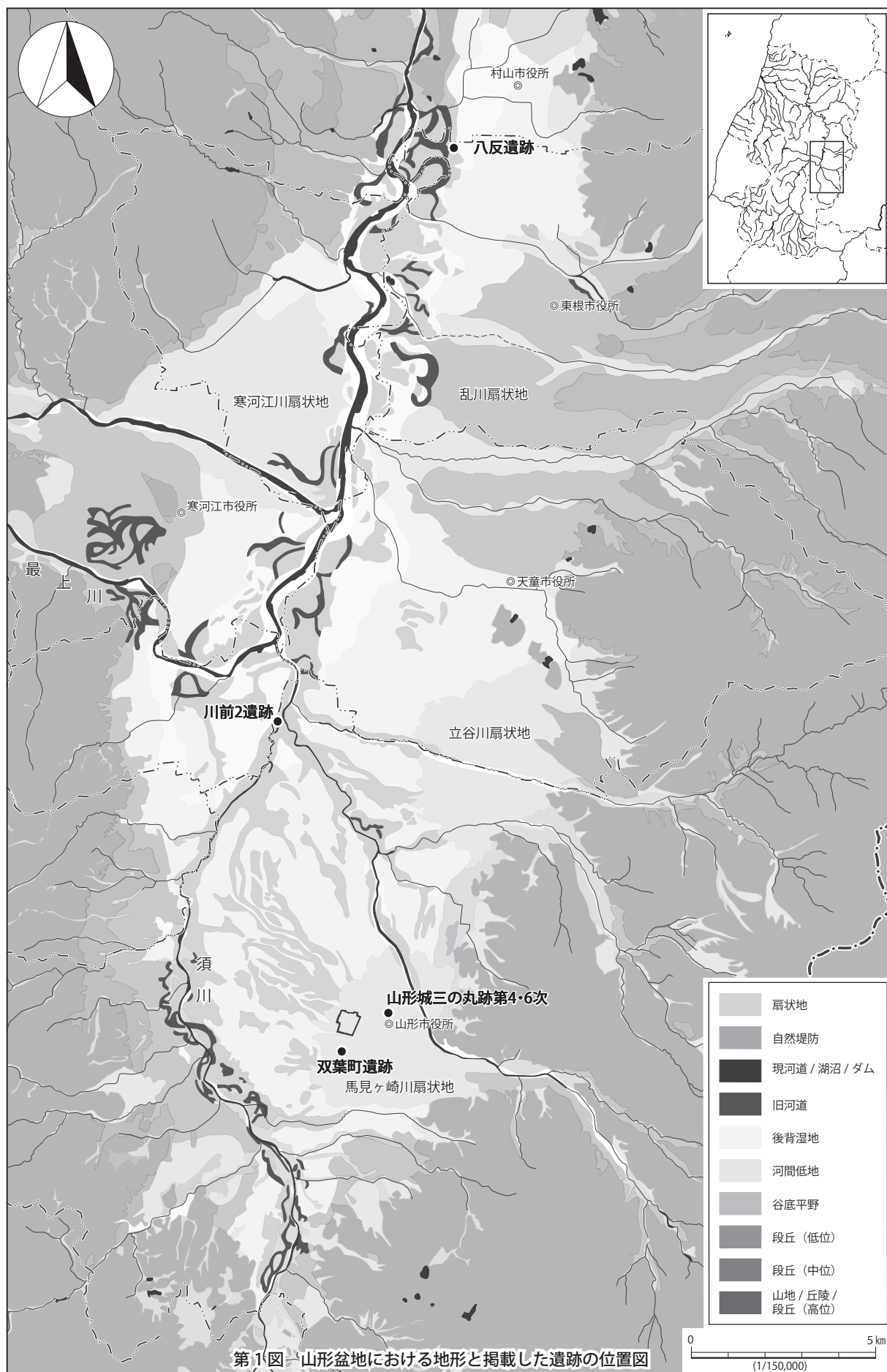
山形市旅籠町一丁目にかかる国道 112 号の拡幅工事に伴い行われた調査である。調査では古代から近世まで幅広い年代の遺物が出土している。遺構は竪穴住居や溝跡、土坑などが主体を占めている。ただ、拡幅に伴う工事のため、調査範囲が狭く、遺構全体を把握するのは難しい。出土した遺物の中には関東系土師器も含まれている。

八反遺跡

東根市長瀬地区に位置し、北側の村山市に隣接する。東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に伴い調査が行われた。

調査の結果、遺構面が 3 面確認された。古代の遺構が確認されたのは第 2 面であり、竪穴住居や河川跡が検出されている。今回の図に掲載したものは竪穴住居からの出土遺物がほとんどである。

注目されるのは、東北北部に系譜を持つと考えられ



第1図 山形盆地における地形と掲載した遺跡の位置図

る多条沈線文土器が出土していること、子持ち須恵器が出土していることがあげられる。

3 出土した遺物の分類と時期

上記4遺跡で出土した7世紀に該当するであろう遺物の内、主に坏と碗、長胴鍋について分類と時期検討を行なった。なお、長胴鍋としたものは元来長胴甕と呼ばれているものである。本稿においては使用方法を重視し名称を長胴鍋とする。坏と長胴鍋は竪穴住居における出土率が高い。そのため、時期検討に適していると判断した。時期検討は当県と近県の編年を参考としている（植松2005、吉田2011、村田2007、佐藤2007、高橋2007）。なお、7世紀代に同じ陸奥国域であった宮城県域を主に参考とし、類似器形が確認されないものに対して範囲を広げ、岩手県域なども参考とした。

本県では植松暁彦の検討により坏は①有段から無段へ、②段の位置が中位から下位へ、③口縁部が外反から内湾へ、④底部が丸底から平底へ、⑤器高が高いものから低いものへ、などの変化が指摘されている（植松2005）。長胴鍋は宮城県域などの状況をみると、体部における最大径の位置や、頸部の形状、頸部と体部の接続部の形状、底部の厚さなどで変化がみられる。①体部の最大径が古いものから新しいものにかけて下位から中位、上位となる。②頸部から口縁部までの立ち上がり角度が広角から鋭角になる。③体部と頸部の接続部の形状が無段から有段もしくは明確な屈曲になり、次に無段の曲線を描く屈曲となる。④底部が厚いものから薄いものとなり、底部面積が広がる。などの傾向がみられる（村田2007・佐藤2007を参考）。これらはあくまでも全体的な傾向であり、分類によって変化に差異がみられる。なお、はじめにでも述べたように本県における当該時期の遺物は非常に少ない。そのため、多くを特に近県の編年によっている。特に2007年に東北学院大学文学部から発行された『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』を参考とし、本稿中の分類に記載している地域区分もこれによっている。

7世紀に該当すると考えられる土器を第2～6図に掲載している。一部8世紀に帰属する遺物も含まれる。第2・3図に坏や碗を掲載し、第4～6図に長胴鍋を掲載している。

坏・碗

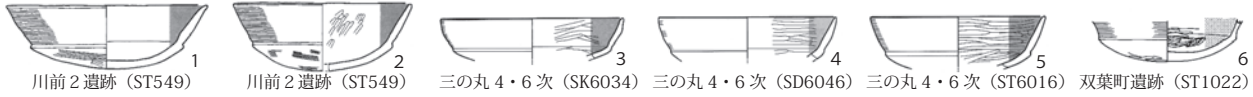
坏は調整より器形を優先してA～Pまで分類した。日常の使用方法に関連した土器製作は、器形に重点をおいていたと考えるためである。調整は各分類の中で記述する。碗も同様である。碗はAとBに分類している。この分類ごとに時期を検討していきたい。以下に分類の内容と時期について記述する。

坏Aは底部が丸底で体部の中段より若干下に段をもち、段から口縁部にかけて外傾する形状のものとした。外面の調整は底部から体部の段までケズリ、上部は横ナデである。内面はミガキが施されたのち、黒色処理がなされる。川前2遺跡の報文中で行った吉田満の検討によれば、住居一括資料をもとに共伴関係から時期を7世紀後半と想定している。一方、宮城県域の編年においては、7世紀前半から中葉頃に位置付けられている。器形に対する段の位置などを考慮すれば、器種単体では7世紀中葉頃の遺物と考えられる。

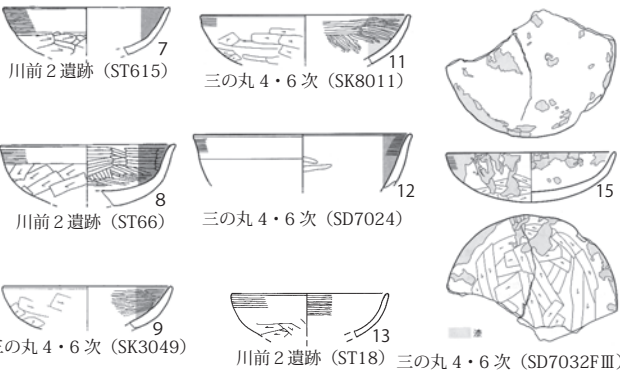
坏Bは底部丸底で緩やかに内湾しながら口縁に至る。一部口縁の先端付近が外反するものもある。外面の調整は底部から体部までケズリ、口縁部は横ナデである。これらは明確な段や変換点を持たないものである。9に関しては口縁部までケズリを施す。10は底部から体部までミガキを施す。内面はミガキと黒色処理がみられるが7はミガキの痕跡が判然としない。12～14には横ナデがみられる。15は内外面とも漆が付着している。この器形は宮城県北部・沿岸部では7世紀後半から8世紀中葉までみられる。宮城県中・南部では7世紀後半から8世紀初頭までみられる。傾向として時期が新しくなるにつれ扁平になり、口縁が外傾するとみられる。7・8・10は器高等から7世紀後半、その他は7世紀末から8世紀初頭とみられる。13～15にかけては黒色処理が施されていない。

坏Cは底部が丸底で体部中段から上段で屈曲し、屈曲部から口縁にかけて直立するものと若干外傾するものがある。外面の調整は不明なものもあるが確認できるものは底部から屈曲部までケズリ、屈曲部から口縁までが横ナデである。内面は外面同様に不明瞭なものが多いが確認できるものには口縁に横ナデ、体部と底部にミガキが施される。黒色処理はされるものとされないものがある。この器形は宮城県中・南部の6世紀

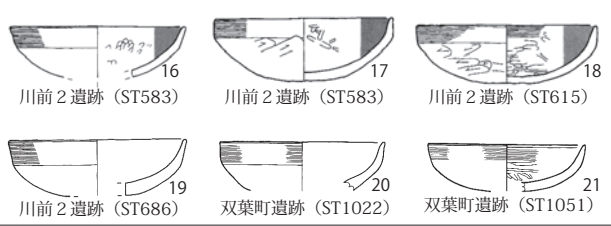
坏 A



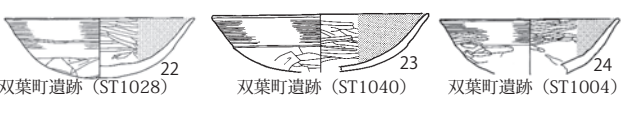
坏 B



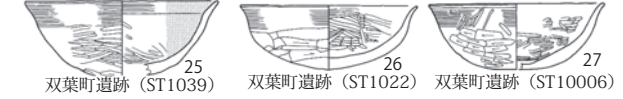
坏 C



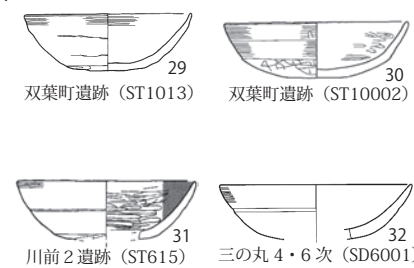
坏 D



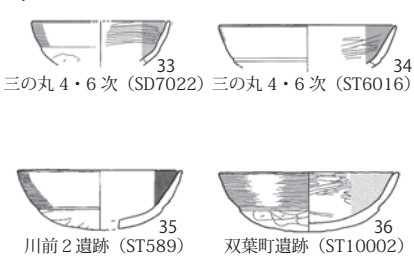
坏 E



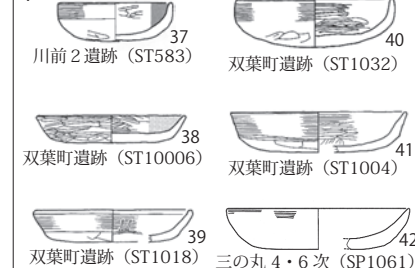
坏 G



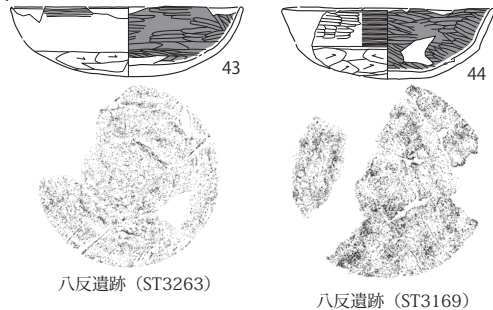
坏 H



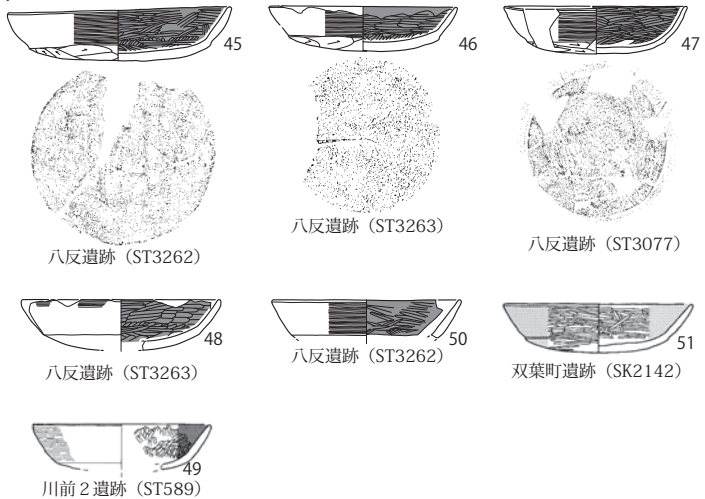
坏 I



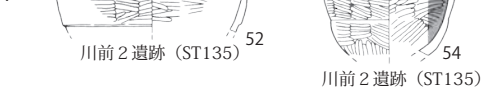
坏 J



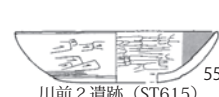
坏 K



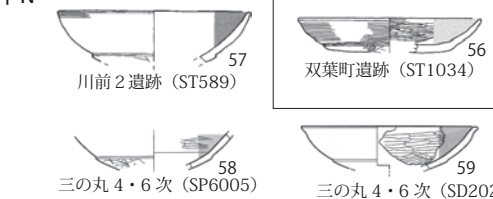
坏 L



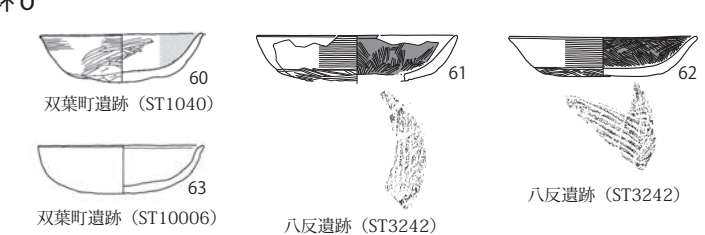
坏 M



坏 N

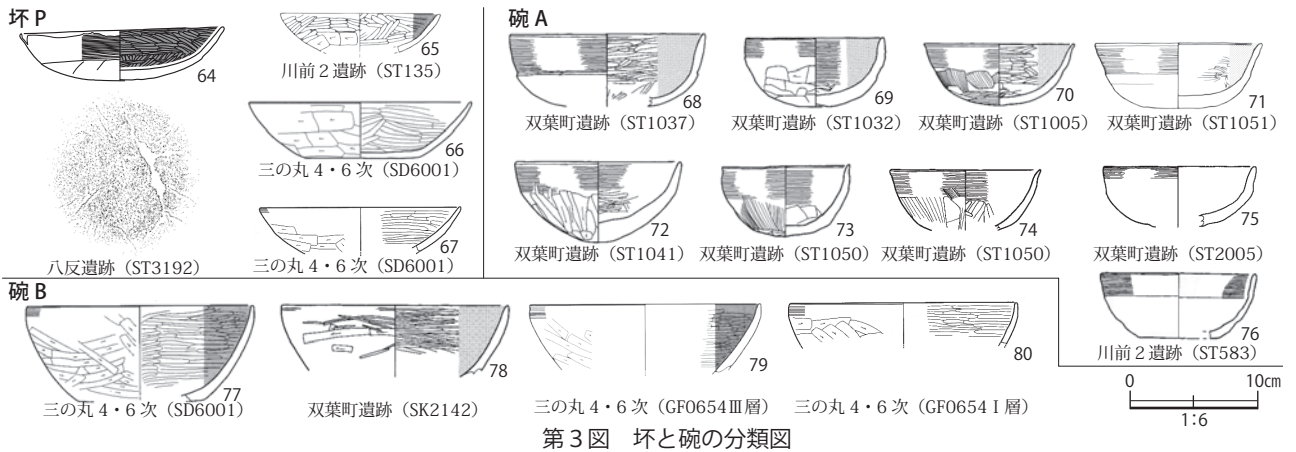


坏 O



第 2 図 坏の分類図 1





第3図 坏と碗の分類図

初頭と宮城県北部・沿岸部の7世紀前葉に類似のものがみられる。だが、川前2遺跡や双葉町遺跡から出土している他の遺物の状況を考えれば6世紀初頭や7世紀前葉と考えるのは難しい。なお、関東系土師器には類似の器形がみられ、宮城県域でも出土している。時期は7世紀後半でも中葉よりである。関東系土師器は本稿で掲載した遺跡でも出土しているため、坏Cもその範疇と考えたい。時期も同様と推定する。

坏Dは底部丸底で緩やかに外傾しながら口縁まで至るもので口縁先端が若干外反する。外面の調整は底部から体部下端もしくは中段までがケズリ、それより上部が横ナデである。内面はミガキと黒色処理が施される。宮城県中・南部における7世紀中葉ごろの土器に類似する。北部においては7世紀後半に類似器形がある。本稿では7世紀後半ごろと考えておきたい。

坏Eは坏Dより器高の高いもので、口縁部の外反がより強い。調整もほぼ同様である。25は底部から体部はミガキが施され、口縁部内面の屈曲より上端に横ナデを施す。これは屈曲を作り出す際の痕跡と思われる。黒色処理は行うものも行わないものがある。宮城県中・南部にはみられず北部・沿岸部の8世紀初頭にみられる。

坏Fは一点のみ確認された。坏Mと同様の系統と思われるが、より器高が高い。底部は平底に近い丸底で体部下端に緩やかなS字状の屈曲をもち、外側に開きながら口縁まで至る器形である。調整は底部から屈曲部までがケズリ、屈曲から口縁部までが横ナデである。内面はミガキと黒色処理が施される。この器形は宮城県中・南部では7世紀中葉にみられ、北部・沿岸部では7世紀後半に確認できる。吉田は7世紀後半の年代を推定しており、本稿でも同様の時期と考える。

坏Gは坏Bの後続器種と考えられる。底部が平底に近い丸底で、内面は緩やかに内湾しながら口縁まで立ち上がる。外面は外傾しながら口縁まで至る。体部の中段に沈線が施されるものや粘土紐の巻き上げ痕が顕著なものもみられる。調整は底部から体部下端にケズリ、体部に横ナデを施すものもあるが、調整が不明なものも多い。口縁は横ナデが施される。内面の調整は体部がミガキであり、口縁に横ナデを施すものがある。黒色処理は行うものも行わないものがあり、掲載した資料では行わないものの方が多い。近県の資料に類似する器形はあるものの明確なものはない。時期については検討を要する。

坏Hは底部丸底で体部中段よりやや下に段をもち、緩く内湾しながら口縁までいたり、口縁先端は外を向く。調整は底部から段までがケズリ、段から口縁までが横ナデである。内面はミガキと黒色処理が施される。宮城県中・南部には類似の器形が見当たらず、北部・沿岸部の7世紀末にみられる。吉田満は坏が出土した遺構について8世紀前半の年代を推定している。段の位置が体部中央からやや下で器高が高いことから7世紀末から8世紀初頭頃と考えておきたい。

坏Iはかわらけに似た器形である。底部は平底か、平底に近い丸底のものがある。調整は底部がケズリ、体部から口縁部までを横ナデするものが多い。38は内外面全体にミガキを施す。黒色処理はするものもしないものがある。この器形は宮城県中・南部にはみられず、北部・沿岸部には類似のものがみられるがそれらは体部中央付近に屈曲があり、明確に類似しているとは言い難い。時期は一括資料から検討したいが、底部が丸底のものと平底のものや口縁が外傾するものと上を向くもの、

黒色処理の有無などの差があることから同分類の中で時期差が存在すると思われる。

坏Jは底部丸底で体部中段もしくは中段よりやや下に屈曲を持ち、屈曲部から口縁まで緩やかな内湾、もしくはわずかに外反するものである。43が坏Bの7、44が坏Hに類似する。ただ、いずれとも扁平であり、全体的に大きい。内面はミガキと黒色処理が施される。相対的に坏Hと類似する。しかし段の有無から坏Hより新しい時期の所産と思われるがその他の変化はあまりみられない。現状では8世紀初頭と考えておきたい。

坏Kは坏Hが扁平になり、底部が平底に近くなったものである。また、坏Hにあった体部の段が緩やかになり、体部下端に移っている。51は両面黒色処理されたもので内外面ともミガキが施される。坏Kは扁平化が進行しつつも底部付近に若干の屈曲部を持つ。これらの特徴から坏Hや坏Jより新しいものと捉えられ、8世紀前葉から前半と考えておきたい。

坏Lは底部丸底で体部中段からやや上に段を形成し、全体的に緩く内湾して頸部にいたる。口縁部付近はわずかに外側へ開く。外面調整は全面にケズリもしくはミガキを施す。内面はいずれもミガキを施す。黒色処理はするものとしなないものがある。坏Lは宮城県域ではみられず、岩手県南部でみられる器形である。8世紀後半頃の所産と考えられる。

坏Mは坏Fをより扁平にしたものである。外面の調整は底部をケズリ。体部はケズリのものと、横ナデを行うものがある。内面はミガキと黒色処理を施す。坏Mは坏Fに後続する器形と考えられ、さらに坏Kより扁平になっていることから8世紀前半でも中葉よりと考えられる。

坏Nは底部丸底で径の小さいものである。体部下端に段をもつ。段より上部は内湾しながら口縁までいたるが口縁部は上を向くものとわずかに外反するものがある。調整は底部から段までケズリ、段から口縁部までは不明瞭のものが多い。口縁部付近に横ナデを施すものがある。内面はミガキと黒色処理が施される。この器形は宮城県では北部・沿岸部のみにみられ、7世紀後半の時期が与えられている。岩手県南部では8世紀前半から9世紀初頭まで確認されている。提示した資料は底径が小さく、口縁部が緩やかに内湾し、広がる形

状である。この形状は岩手県南部の8世紀前半代によくみられる形状であり、同時期と考えたい。

坏Oは底部がほぼ平底のもので、緩く内湾しながら口縁までいたり、口縁部が外反するものと上を向くものがある。いずれも扁平である。外面の調整は底部が目の粗いハケメ、体部に横ナデを施す、一部はミガキを施す。内面はミガキと黒色処理を施す。63は黒色処理を行っていない。坏Oは坏Kより扁平化が進んでいることから坏Mと同時期と考えられ、8世紀前半でも中葉より、8世紀第2四半期頃と捉えたい。

坏Pは底部が平底もしくは平底に近い丸底で体部から口縁部まで外傾しながら到達する。坏Gの後続器種とみられる。いずれも扁平である。外面の調整は底部から体部下端までがケズリ。体部から口縁部の調整は2通りに分かれる。横ナデのもの。そして、体部から口縁付近までがケズリ、もしくはミガキで口縁先端のみ横ナデを施すものである。内面は横方向へのミガキが施され、黒色処理はするものとしなないものに分かれる。この器種は坏B・Gがより扁平になり、平底が平底に近くなったものと理解される。宮城県域でも8世紀前半に位置付けられている。本稿のものも同様の年代であると考えられる。

碗は口縁径と底部径の差が坏より少ないものとして分類した。

碗Aは底部が丸底もしくは平底に近いもので底部から体部中段まで内湾しながら立ち上がり、体部中段から上へ延び口縁に至るものと、わずかに外傾しながら口縁に至るものがある。外面調整は底部から体部中段もしくは中段よりわずかに上までハケメやケズリ、それより上部が横ナデである。内面は上部に横ナデを施し、中段から下段にミガキやケズリを施すものとミガキのみを施すものに分けられる。黒色処理については施すものと施さないものに分けられる。碗Aは分類の中でも器形の差異がみられる。体部に段をもつものと持たないもの、底部から口縁までが外傾するものと上に延びるもの。底部が丸底のものや平底に近いものなどが指摘できる。68は宮城県中・南部においては7世紀前半にみられ、北部・沿岸部ではみられない。69は68の後続器種とみられるため、7世紀中葉から後半以降のものと考えられる。72から74は内面黒色処理を施していな

い器種である。72は坏Cと形状的に似ていることもあり、同様の年代が想定される。70・74は黒色処理の施工の有無はあるが器形は類似するため時期的にも同じ頃と想定される。器形的観点からいえば71・75・76も同様である。器形の差異が大きいため、分類の中で時期差を想定できる。時期は検討を要す。

碗Bは底部が破損しており全体の器形が不明な資料が多い。77などから平底と推定される。体部はわずかに内湾し、口縁付近までいたる。口縁が垂直に近い形で短く成形される。外面調整は体部が全面ケズリ、口縁が横ナデである。内面は横方向のミガキと黒色処理がなされる。碗Bは宮城県北部・沿岸部の7世紀末から8世紀初頭にみられる。ただし、器形は同じだが調整に違いがあり、それらは内外面ともミガキを施す。掲載資料と同様の調整を持つものは宮城県加美町の壇の越遺跡SI1280 竪穴建物から出土しており、8世紀中葉から後半に位置付けられている。その他に時期を検討する要素がない。そのためから広く7世紀末から8世紀後半として捉えておくこととする。

長胴鍋

続いて、長胴鍋の検討を行う。長胴鍋は竈に設置して使用する。東日本の6～8世紀にかけては竈への嵌め殺しが一般的だったとされている（小林2017）。嵌め殺しという観点から竈の使用開始時を検討できる資料となる。また、その鍋の器形や調整により、使用した住民のルーツを検討できる要素を含んでいる。上記の特質を加味すれば住居廃絶に伴う一括資料の中でも供膳具が鍋より後続する資料となる。ただし、一棟の住居使用期間の中で竈の作り直しも考えられるため、一括出土資料のもと時期の決定には慎重を要する。

長胴鍋はA～Hまで分類した。以下に特徴を記し時期を検討する。

長胴鍋Aは底部が不明のものが多く、体部も全体を把握出来るものが少ないため、口縁付近の形態で分類している。器形は体部から頸部への変化が少なく、若干内湾したのち、口縁部へは僅かな外反をみた上で端部に到達する。外面の調整は上下方向のハケメかケズリ、口縁は横ナデである。内面は口縁が横ナデ、体部は横方向のハケメが多く、6のように上下方向の調整が施されるものがある。長胴鍋Aは全体像がはっきりしないが頸

部の形状と頸部から体部にかけての屈曲などから宮城県中・南部では7世紀前半から7世紀末に類似器種があり、宮城県北部・沿岸部では7世紀前半にみられる。

長胴鍋Bも底部が不明の資料が多い。体部から口縁部の形態で分類した。頸部と体部の境に段もしくは明瞭な屈曲をもち、体部の最大径が中央もしくは中央よりわずかに上部にくるものである。また頸部から口縁部は外傾もしくは外反する。調整は長胴鍋Aとほぼ同様である。外面体部が上下方向のハケメ、頸部から口縁部が横ナデである。内面は頸部から口縁部が横ナデ、体部が横方向のハケメである。宮城県中・南部では6世紀末から7世紀前半にみられる。宮城北部・沿岸部でもほぼ同様に7世紀前半に位置付けられる。その中でも9・10・12・15に関しては7世紀前半の時期が推定される。13・14は頸部が上記のものより短く、最大径が上記のものより上部にあることからより新しいものと考えられる。7世紀中葉から後半以降と推定する。

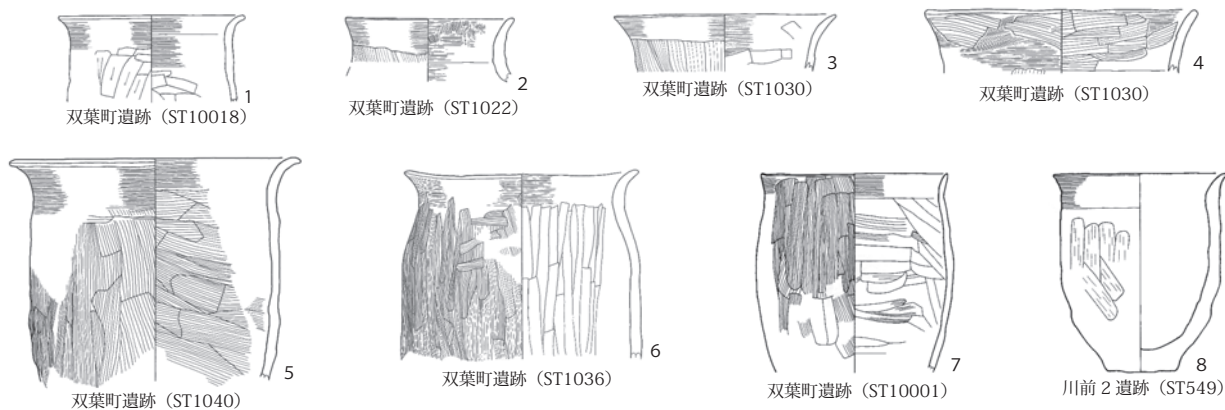
長胴鍋Cは底部が不明のものが多く残存しているものは平底である。体部の最大径は頸部よりやや下にくる。体部と頸部の境は段か明確なS字状の屈曲を有する。屈曲部から口縁までは外傾しながら到達する。また、口縁の径が体部最大径より大きい。調整は上記と同様である。長胴鍋Cはその器形から報文で7世紀末から8世紀初頭と報告されている。宮城県中・南部ではみられず、宮城県北部・沿岸部や、岩手県南部でみられる。時期は同様の位置付けである。

長胴鍋Dも底部の形状がはっきりとしない。体部下端から体部上端までほぼ直線的に緩やかに広がりながら頸部に到達し、頸部との間にくの字状の屈曲を有する。頸部から口縁部までは上記AからCと違い鋭角になる。調整は同様である。

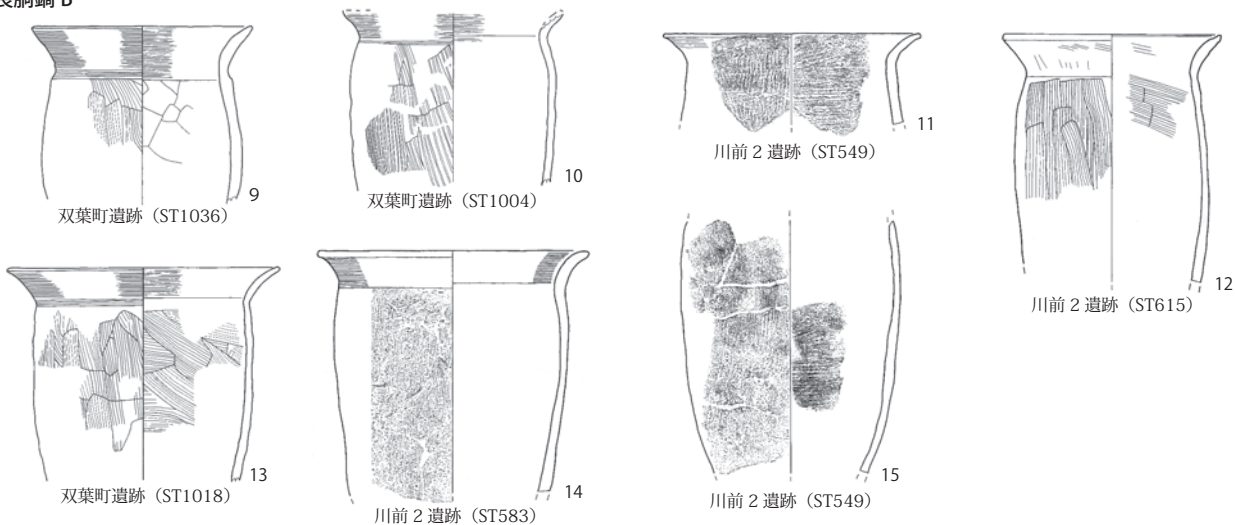
長胴鍋Eはほぼ長胴鍋Dと同様であるが、体部から頸部への内面の屈曲が丸みを帯びる。長胴鍋D・Eはあまり近県ではみられない形状である。在地性の強い器種の可能性がある。そのため、この器種のみで時期の決定は難しく、一括資料から検討を加えたい。

長胴鍋Fは底部平底で緩やかな曲線を描きながら体部中段からやや上で最大径に到達し径を縮めながら頸部にいたる。頸部の屈曲は明瞭であるが長胴鍋Eと同様に丸みを帯び、直線的に開き口縁へ至る。外面調整は体部

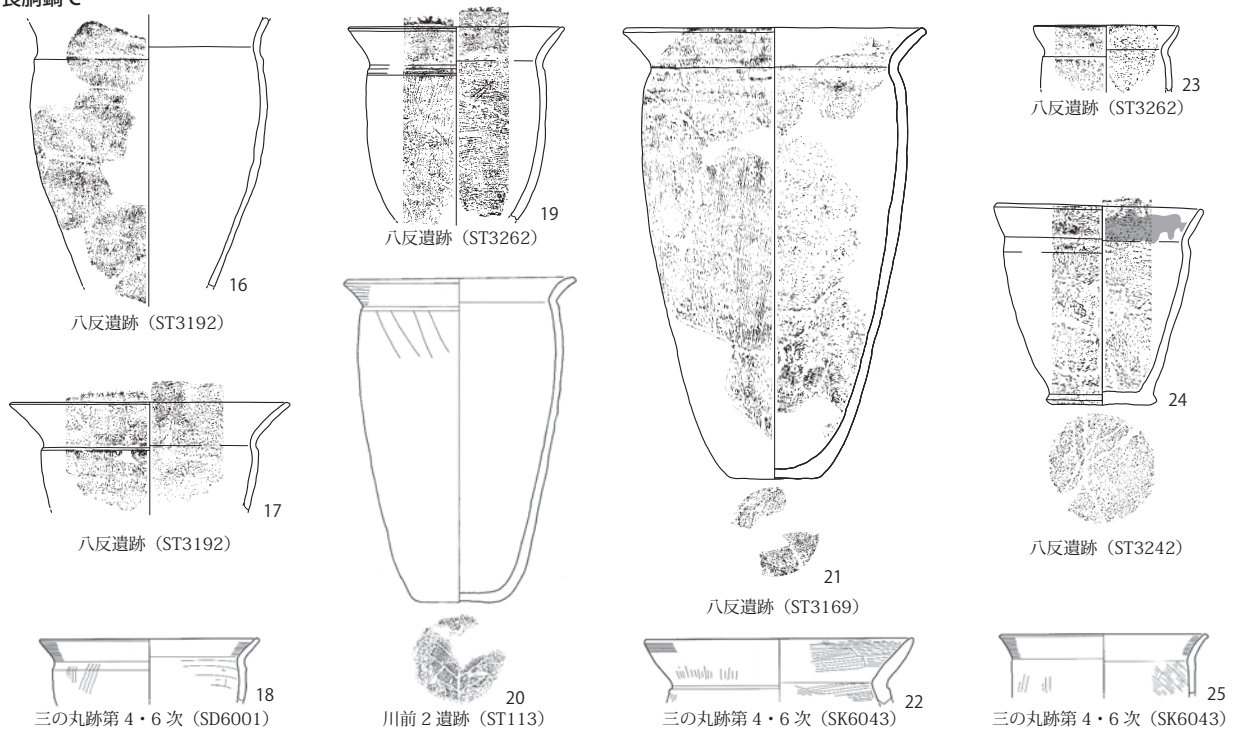
長胴鍋 A



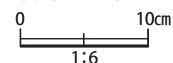
長胴鍋 B



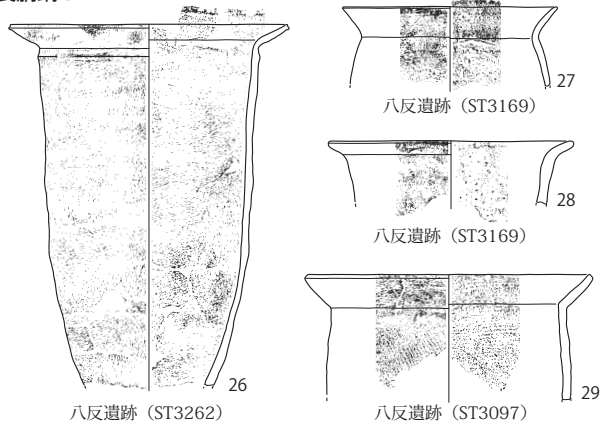
長胴鍋 C



第 4 図 長胴鍋の分類図 1



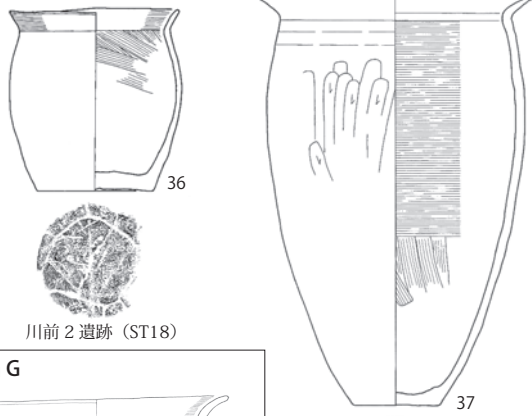
長胴鍋 D



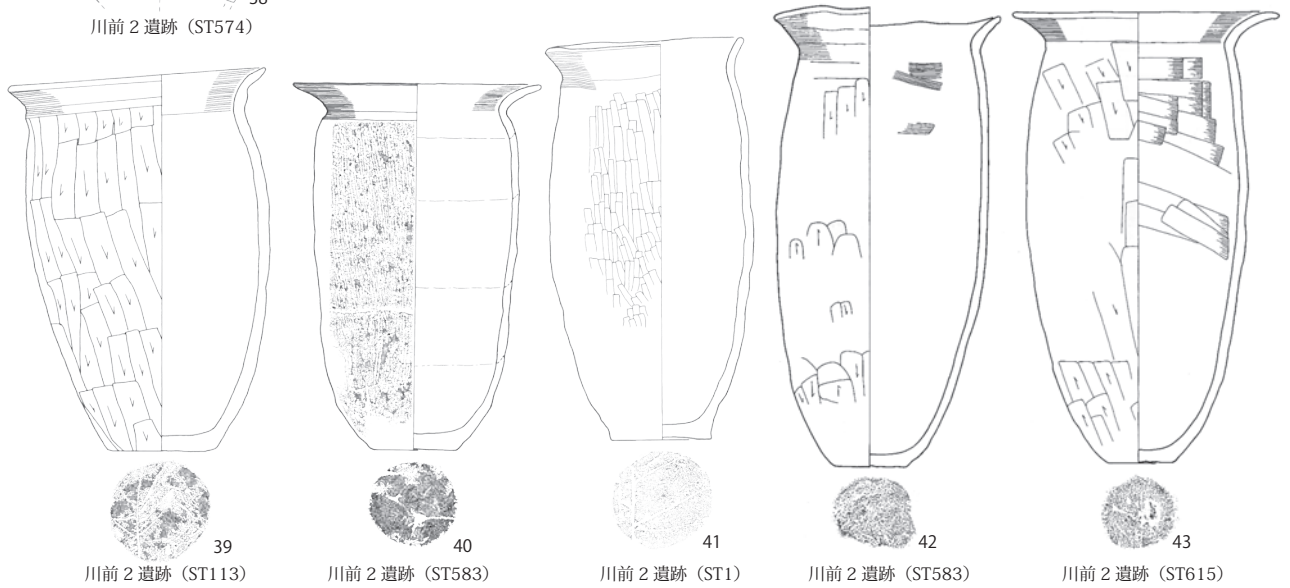
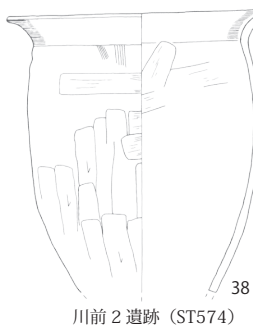
長胴鍋 E



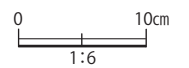
長胴鍋 F



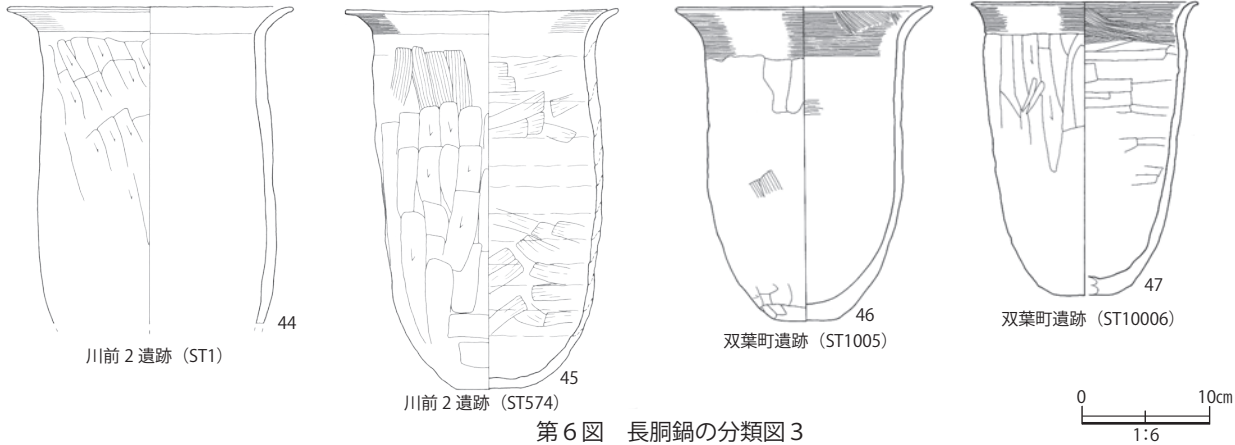
長胴鍋 G



第5図 長胴鍋の分類図2



長胴鍋 H



第6図 長胴鍋の分類図3

の上端を除きケズリを施し、上部はロクロ成形である。頸部から口縁部は横ナデである。内面は下端を上下方向のハケメ、中央部より頸部までを横ナデしている。36の体部内面調整は斜め方向へのハケメである。宮城県域でも7世紀末から8世紀前半にみられる器形であり、同様の年代と捉えて置きたい。

長胴鍋 G は底部平底で、体部は長胴鍋 F のように曲線を描き中央付近で最大径に達したあと、径を縮めながら頸部に至る。急な窄まりを頸部でみせたのち、口縁に向かい外反しながら到達する。38・39は最大径が体部中央からやや上部に来る。外面調整はタテ方向のケズリで39のみハケメである。頸部から口縁部はいずれも横ナデである。内面体部は横方向のハケメとみられ、口縁部は横ナデである。

長胴鍋 H は所謂砲弾型の器形であり、底部は丸底に近い。体部下端から直線的に上方へ立ち上がり頸部から口縁部にかけて外反する。外面調整は上下方向のケズリである。内面は横方向へのケズリかハケメである。頸部及び口縁部は横ナデである。長胴鍋 G・H は関東系土師器と考えられている。時期は紙数の関係で根拠と成る一括資料を掲載していないが双葉町遺跡 ST1005 と ST10006 の資料から7世紀後半頃を推定できる。川前2遺跡の44・45については一括資料の年代幅が大きく特定出来なかった。竈にこの土器が設置されていた住居については関東様式の竈構築まで行った可能性が高い。

上記の結果から本論に掲載した資料のうち、坏は7世紀後半～8世紀後半までの資料と考えられる。ただし、8世紀後半代ものは1分類のみであるため、主としては8世紀前半までの資料と想定出来る。分類の中で時期

差が見られるものも存在するが、概ね以下の様に設定できる。

- ① A : 7世紀中葉。
- ② B (7～9)・C・D・F : 7世紀後半。
- ③ B (10～15)・H : 7世紀末から8世紀初頭。
- ④ E・J : 8世紀初頭。
- ⑤ K・M・N・O・P : 8世紀前半。
- ⑥ L : 8世紀後半

続いて長胴鍋の時期であるが、概ね以下のような設定が可能である。

- ① A : 7世紀前半から後半
- ② B : 7世紀代、7世紀後半
- ③ C : 7世紀末から8世紀初頭
- ④ F : 7世紀末から8世紀前半

なお、長胴鍋は竈に設置されて使用されるものであるから、住居における竈の使用開始時期の検討は可能である。しかし、廃絶時の年代決定には向かない。なお、同じ遺構内で時期差がみられる長胴甕が出土した場合、竈の作り変えなどを想定できる。その上で、古いものと新しいものの比較により、古いものが使用された期間を検討することが可能になる。今後、検討してみたい。

4 一括出土遺物の時期検討

上記の検討を元に、第7図に示した一括資料の年代を検討する。対象とする遺跡は竪穴住居からの一括遺物が比較的豊富な、川前2遺跡・双葉町遺跡・八反遺跡とした。また、報告書で7世紀代と見込まれている竪穴住居を主に扱った。

川前2遺跡

川前2遺跡からはST549、ST66、ST686を取り上げる。多くの器種へ時期検討の材料を与えたいと考えたことから選定した。川前2遺跡に関しては報文中で吉田満が各遺構の年代を細かく検討している。本稿の結果を踏まえ、再度検討を行いたい。

ST549は報文で7世紀後半の年代を付与している。本稿の分類の内、坏Aと長胴鍋Bが出土している。坏Aは7世紀中葉に近いもの、長胴鍋Bは7世紀前半から後半の年代が考えられる。そのため、住居としては最大で7世紀前半から後半の使用年代が推定され、坏Aの存在とそれに後続すると考えられる坏HやJがみられないことから廃絶は7世紀第4四半期頃と考えることが出来る。これら遺物の状況から住居としては長胴鍋Bの継続期間と坏Aの年代から7世紀中葉付近から営まれたとみるのが妥当とみられ、住居としては7世紀第3四半期から第4四半期中頃まで使用されたと考えられる。

ST66は報文の中で7世紀後半の年代を設定されており、坏Bが出土している。坏Bは分類の中でも時期差があり、当住居出土のものは器高の高さから7世紀後半に属すると思われる。長胴鍋は検出されていないが須恵器坏が出土しており、体部中央よりやや下に段を持つ器形で、底部はケズリで成形しているもので、県内の資料には類似するものがなく、隣県である福島県の善光寺窯跡の資料の坏Gに類似するものがみられる。その年代は7世紀後半にあたり、坏Bとの整合性から住居が営まれた時期は7世紀後半から末とみられる。ゆえに同遺構出土の8も同様の年代を推定できる。

ST686は報文の中で7世紀後半の年代を設定されている。今回の分類の内、10が坏Cに対応する。長胴鍋も出土しており、器形から長胴鍋Eと推定される。坏Cは7世紀後半でも中葉よりであり、7世紀第3四半期頃と推定される。遺物一点で住居の年代を決定するのは問題があるものの坏Cの年代から7世紀第3四半期頃には営まれていたものと推定され、長胴鍋Eの11及び壺もその時期に近いものと考えたい。

今回検討した3つの遺構は報文とほぼ同様の年代観が考えられ、期間としては7世紀第3四半期から7世紀末までの住居跡と推定できる。

双葉町遺跡

ST1002とST1004を取り上げる。いずれも報文では7世紀に帰属するものと捉えられている。報文中では詳細な年代を記載していない。この遺跡が発掘された当初、山形盆地において7世紀に該当する遺物はほぼ確認されていなかったため、大まかな括りとして年代を提示するに留まっていたと思われる。

ST1002からは坏GとHが出土している。また長胴鍋15は器形から長胴鍋Bに分類される。坏Hは7世紀末～8世紀初頭の年代が推定される。長胴鍋Bは7世紀前半から後半の年代が推定されるため、7世紀第4四半期から8世紀初頭に営まれた住居と考えられる。坏Gとみられる13と中型鍋とみられる16も同期間の所産とみられる。

ST1004は坏DとI、長胴鍋BとCが出土している。坏Dは7世紀後半、長胴鍋Bは7世紀前半から後半の年代が推定されている。長胴鍋Cは7世紀末から8世紀初頭に成立していたとみられる。坏Dも7世紀後半頃のものと考えられるため、7世紀後半から8世紀初頭の住居と判断できる。坏Iとした17と19においても同様の年代が推定できる。

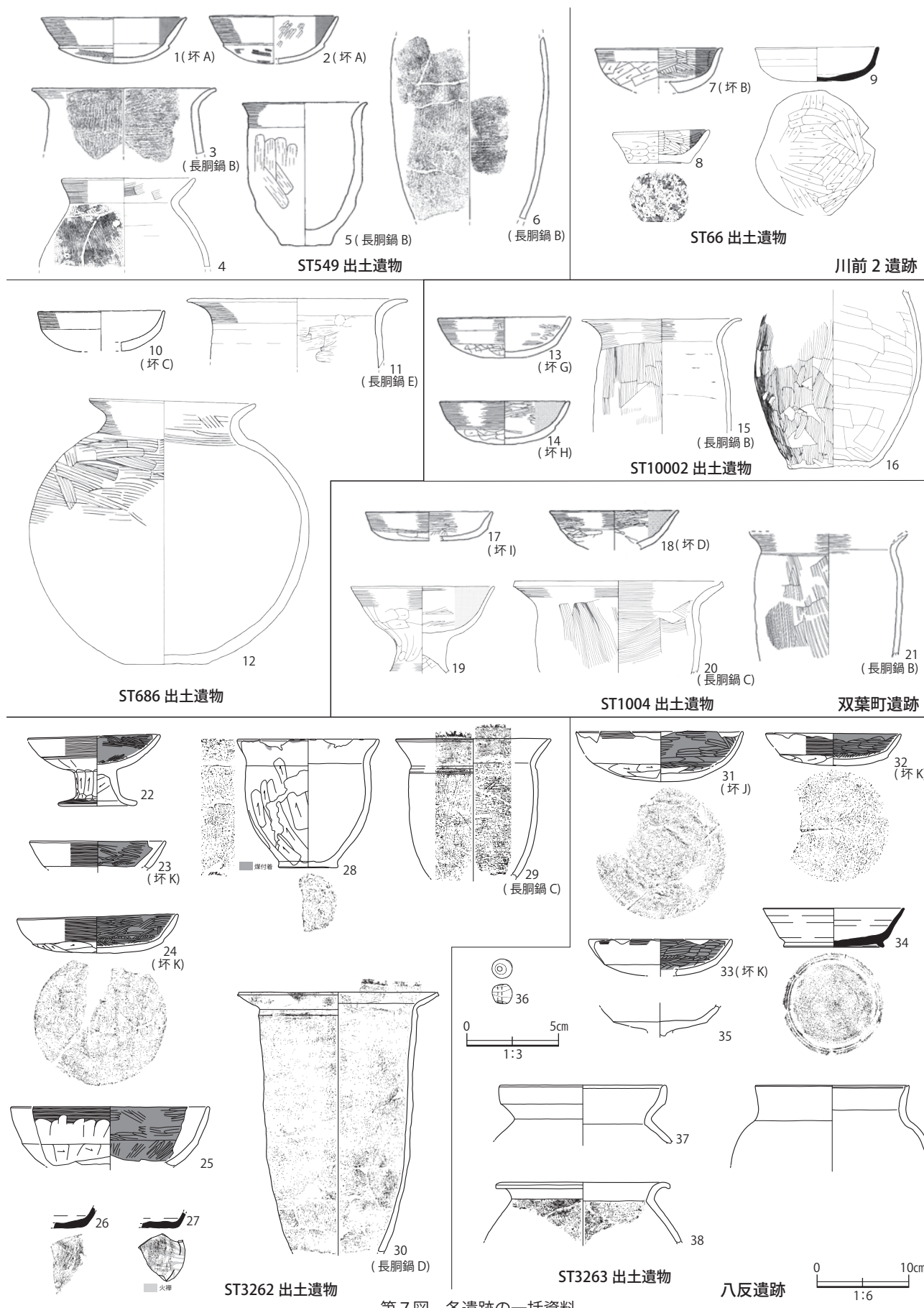
八反遺跡

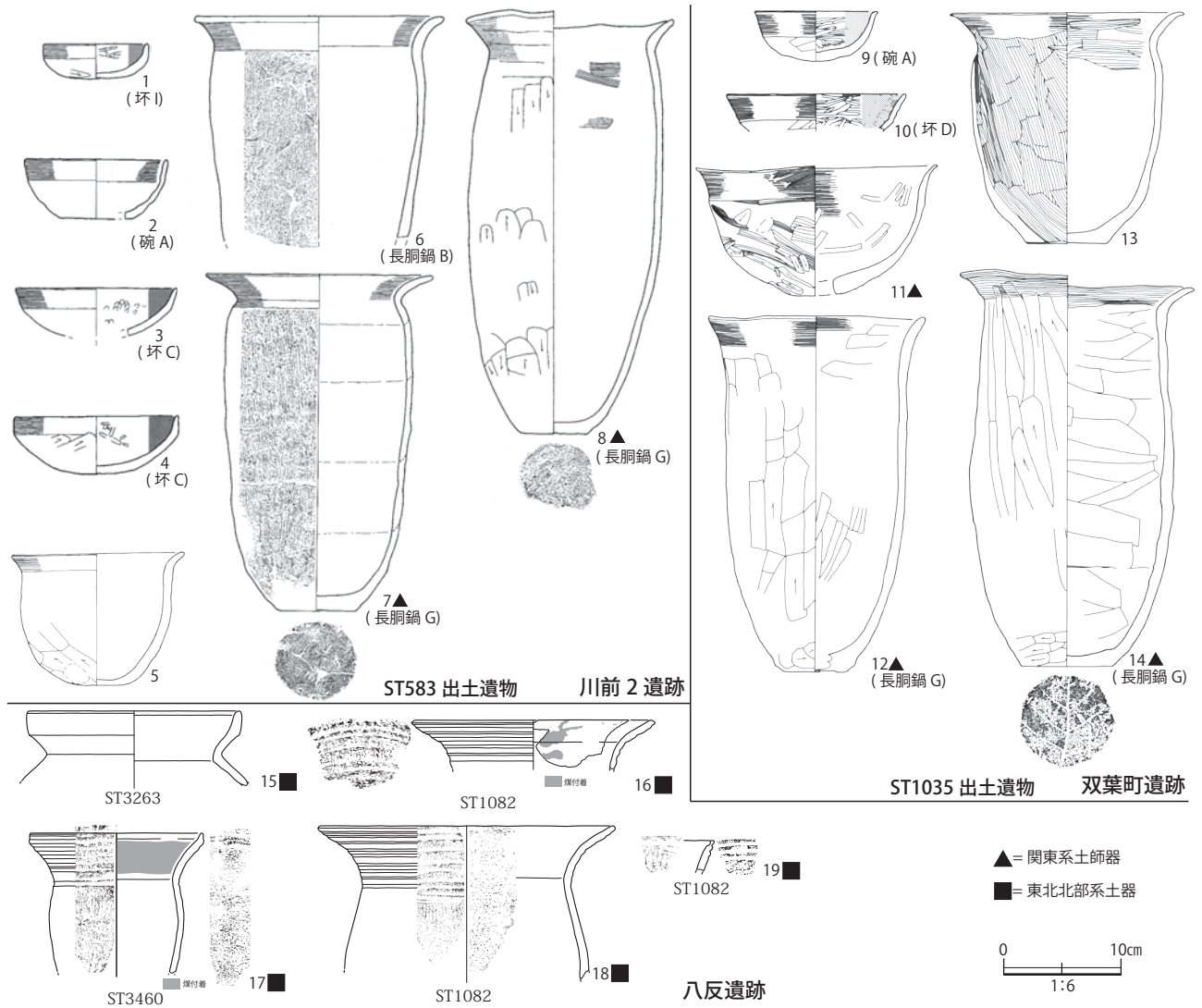
八反遺跡はST3262とST3263について検討する。いずれも報文では7世紀末から8世紀初頭の年代を設定している。両住居とも器種が豊富であり、ST3263については須恵器の高台坏も出土していることから年代の検討を行うのに適していると思われる。

ST3262からは坏Kが複数点、長胴鍋CとDが出土している。坏Kは8世紀前半と推定され、長胴鍋Cは7世紀末から8世紀初頭と考えられる。住居の存続期間は7世紀末から8世紀前半とみられる。長胴鍋Dも同時期に作られたと考えられるがより長胴鍋Cに近い時期のものと考えられる。

ST3263からは坏J・Kが出土している。坏Jは8世紀初頭、坏Kは8世紀前半である。また、須恵器高台坏34が出土しているが器形から8世紀初頭から前葉と推定される。長胴鍋が出土していないので住居の開始時期は検討できないが8世紀初頭から前半に営まれたものと考えられ、35から39も同様の年代が推定される。

全ての一括遺物を検討したわけではないため、7世紀末に遡る遺物も出てくる可能性があるが、集落としては





第8図 各遺跡出土の関東系土師器と東北部系土器

8世紀初め、出羽国に陸奥国から最上郡が編入される時期に営まれ初めた集落と解することが出来る。

5 関東系土師器・東北部系の土器

本稿で検討した遺跡の内、川前2遺跡・双葉町遺跡・八反遺跡からは在地の土器とは違う器形、もしくは調整をもった土器群が出土している。川前2遺跡と双葉町遺跡からは関東系土師器が、八反遺跡からは東北部の土器の出土がみられる。

これらの内、関東系土師器について、一括資料からその時期の検討を行う。なお、八反遺跡の東北部系の土器については第8図をもって紹介に返させていた。時期としては相伴遺物から8世紀前半頃と推定されている。

川前2遺跡のST583からは関東系土師器の長胴鍋が

出土している。なお、本稿の分類でGとしたものである。ST583では坏CとI、碗A、長胴鍋Bが出土している。坏Cは7世紀後半でも中葉より、長胴鍋Bは7世紀前半から後半と推定できる。坏Iは分類の中で時期差が考えられるが上記の検討により双葉町遺跡の坏Iは7世紀後半とみられる。川前2遺跡のST583の1は双葉町のものより底部が丸みを帯びていることが違いとして指摘できる。坏の変遷過程が丸底から平底へと変化していく中で捉えるとこの器形は双葉町遺跡ST1004のものより古いと考えられる。しかし明確な基準となるものがないため、おおまかに7世紀後半でも中葉より属するものと推定する。そのため、ST583出土遺物は7世紀第3四半期から末までと考えられ、長胴鍋の性格から7世紀中葉頃に属するとみられる。よって、7、8は7世紀中葉よりの後半の関東系土師器と考えら

れる。なお、坏Cに関しては近県に類似の器形がない。関東系土師器の影響を受けた器形と考えられ、そこに在地の様式である黒色処理が施されたものと理解する。広義の関東系土師器ともいえる。

双葉町遺跡 ST1035 から出土した土器を本稿の分類に該当させると9は碗Aになる。報文では坏である。碗Aはの中で時期差があるとみられる。器形が無段であり丸底で外形することから碗Aの68・69より後続の器形と思われ、碗Aの70や74と同様と考えられる。時期は碗Aの68・69が7世紀中葉から後半のものと考えられるからそれ以降7世紀末～8世紀初頭の可能性が高いと思われる。坏10は体部に形成される段が稜に変化し稜から口縁部までが外反する器形である。そのことから本稿の坏Dと考えられ、7世紀後半の年代が推定される。また、13が7世紀後半から8世紀初頭の中型鍋とみられることもあり、住居の存続期間も7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。よって、11・12・14の関東系土師器も7世紀後半から8世紀初頭のものとして推定できる。

双葉町遺跡の関東系土師器は形が崩れているとの指摘がされている(鶴間2019)。在地化が進んだ影響とも取れるが検討を要する。

6 まとめと課題

7世紀の遺物について主に宮城県域の資料を参考に分類を行い時期の検討と整理を行ってきた。今回検討を行った遺物については以下のことがいえる。

土器の分類と時期の検討から見えてきたものとして、近県及び他地域と検討した結果、坏Cは器形から関東系土師器の影響で派生したものと判明した。ただし、黒色処理など細かい点で関東系土師器とは異なるものもある。こういったものは宮城県蔵王町の十郎太遺跡や同県松島町赤井遺跡などでみられる関東系土師器の在地化したものとみられる。また、長胴鍋E・Dにみられた頸部から底部まで直線的に窄まっていく器形は近県および他地域にみられないことから山形県内において作られた在地性の高い器形とみられる。その他の遺物は東北南部における栗罎式の範疇に収まるとみられるが、在地産の器形の中でも坏や碗において黒色処理を行わないものがみられるため、これらが関東系の影響

を受けたと見做すにはもう少し検討が必要であろう。

なお、本稿の时期的な検討から当地域の南側である山形市域は7世紀中葉頃から開発が開始されたとみられる。当地域はこの時期、陸奥国に属していた。陸奥国の初期国府といわれる仙台市の郡山遺跡が造営開始された時期と同時期である。本県において、7世紀における明確な役所跡は確認されていない。双葉町遺跡と山形城三の丸跡第4・6次は近接した位置関係にある。遺物も7世後半のものが量的にまとまっており、さらに関東系土師器が一定量出土している。これらはこの周辺に大規模な集落があったか、もしくは同時期の集落が点在していた可能性を示している。

宮城県の郡山遺跡とその周辺の状況を考えると、上記の山形市市街地付近の状況は似ており、近辺に役所などの機能を持った施設があった可能性を見出すことが出来る。しかし、現状では検討できる材料が少ない。今後の資料の増加と研究に期待したい。

引用・参考文献

- 小林正史 2017 「序章 使い方から読み解くモノと技術」『モノと技術の古代史 陶芸編』吉川弘文館
- 蔵王町教育委員会 2011 『十郎太遺跡1』蔵王町文化財調査報告書第13集
- 齋藤淳 2016 「土器からみた地域間交流-秋田・津軽・北海道-」『北方世界と秋田城』六一書房
- 佐藤敏幸 2007 「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 高橋千晶 2007 「岩手県南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 鶴間正昭 2019 「東北経営と関東系土師器」『律令国家形成期の土器様相』六一書房
- 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター 1988 「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告IV』福島県文化財調査報告書第192集
- 村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 村田晃一 2005 「7世紀における陸奥北辺の様相-宮城県域を中心として-」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
- (財)山形県埋蔵文化財センター 2011 『川前2遺跡第1・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第193集
- (財)山形県埋蔵文化財センター 2010 『山形城三の丸跡第4・6次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第190集
- (公財)山形県埋蔵文化財センター 2019 『八反遺跡第1～3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書235集
- 山形市・山形市教育委員会 2005 『双葉町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書 縄文時代～中世編』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第24集
- 矢本町教育委員会 2001 『赤井遺跡I』矢本町文化財調査報告書第14集

執筆者（令和2年3月31日現在）

小林圭一（こばやし・けいいち） （公財）山形県埋蔵文化財センター業務課
渡辺和行（わたなべ・かずゆき） （公財）山形県埋蔵文化財センター業務課

研究紀要編集担当

小林圭一・菅原哲文・吉田満・白戸このみ

研究紀要 第12号

2020年3月31日発行

編集・発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3246 山形県上市市中山字壁屋敷5608番地

TEL 023-672-5301(代)

FAX 023-672-5586

URL <http://www.yamatamaibun.or.jp>

印刷 田宮印刷株式会社

題字

木村 宰（平成14年度 財団法人山形県埋蔵文化財センター 理事長）